

ライイ・フシエ・ヴォロドギーチは相手を慰めようとして言った。が、それには却々手間が取れた。彼女は啞の様に黙つて相手を見詰めて居た。物問ひたけな其眼には、前と同じ様に切なさうな疑惑の色が見えた、何か知ら可悼しい考へが動いて居た。彼女の憐れな弱い頭は或結論に達しようとして、未だ達し得ないらしい。一瞬間彼女は眼を床に落した。又不意に素疾い謎のやうな一目を呉れて相手を見守つて居た。到頭、未だ安心は出来ないながら、一つの結論には到着したらしい。

「何卒私の傍へ来て坐つて下さい、後で又好く貴方を見させて頂きますからね」と、彼女は明かに何か新たな目的を抱いて、一層落着きながら切出した。が、心配なさいますな、今は貴方の顔を見ませんからね。私は下を見て居りますよ。貴方も私が見て下さいと言ふ迄、私の顔を見ては不可なのよ。さ、坐つて下さい」と、彼女は性急に附け加へた。

何か新しい心持が彼女の中にだん／＼強く成つて行くらしい。

ニコライ・フシエ・ヴォロドギーチは下に坐つて待つて居た。稍長い沈黙が続いた。

「ふむ！皆何うも變だわね」と、彼女は不意にさも見下げたやうに呟いた。勿論私はあの夢で心持を悪くして居たのですよ。ですが、何故私はあんな風に成つてる貴方を夢に見たのでせうね？」

「まア夢の話は止さうぢやないか」と、彼は相手の禁止にも關はらず女の方へ向いて、性急に言った。恐らくは又前のやうな表情が一瞬間彼の眼の中に光つて居た。彼は女が何度も自分の方へ見向かうとしながら、頑固に自分を制して、下を見續けて居るのを見て取つた。

「公子様、お聴きなさい」と、彼女は急に聲を張り上げた。「公子様、お聴きなさい……」

如何して其方に向けて居るんだい？如何して私を見て呉れぬのだい？こんな茶番をして何に成るのだ？」と、彼も腹を立てたやうに叫んだ。

が、彼女は相手の言葉を聞いて居るやうには見えなかつた。

「公子様、お聴きなさい」と、彼女は三度目に不快な、忙しさうな表情をしながら、斷乎として繰返した。貴方が馬車の中で二人の結婚を公けにするのだとお話なさいました時にね、私は最う此神祕がお終ひに成るのだと思つて吃驚しましたよ。が、今は最う何にも知らない。私はあれからずつと考へて居ましたがね、そんな事は何うしたつて私の柄にないといふことが好く解りましたよ。私は衣服を着ることも知つて居る、又客應對も出来ぬことは有りますまい。お客様にお茶を飲んで下さいと頼むのは、そんなに艱かしいことでもないでせう、それに召使も澤山居ますからね。ですが、他人は何と言ふでせう？私はあの日曜日の朝あの家でいろんな事を経験しましたよ。あの美しいお嬢様は始終私を見て居ました、殊に貴方が這入つて被坐してからは左様でした。あれは貴方が被坐したからでせう、左様ぢや有りませんか。あの方の阿母さまは眞個變なお婆さんね。レビヤードキン氏も又豪儀なことをお致しましたわね。私は吹出さないやうにと思つて、始終天井ばかり見て居ましたよ。彼處の天井には綺麗な繪が畫いて有りますのね。あの人の阿母さまは何うしても尼寺の院長さんね。あの方は私に黒い肩掛を呉れたけれど、私はあの方が怖いよ。勿論あの人達は皆私を變な女だと思つたに違ひないわ。でも、私は平氣でした、私はあの人達の何んな親類に當るだらうと考へながら、彼處に坐つて居ました。勿論、伯爵夫人といふ者は精神上の才分さへ有れば可いものだ。家政の切廻しなぞ召使が遣つて呉れますものね。それに少々ばかり外國の旅客を歡待するに足るやうなお世辭が有れば可い。ですがね、あの日曜日には衆皆私を見下けて居ましたよ。只ダーシャだけは天使

だ、私はあの人達が私の身に就いて詰らないことを言つて、あの人に不快な思ひを爲せやしないかと、本當にそればかり心配して居ますのよ。」

「そんなに怖がることはない、心配することはないよ」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは顔を燈めながら言つた。

「だが、あの人が私のために少々差かしい思ひをしたつて、私には何でもないのよ。左様いふ場合には、屹度羞かしいといふよりも氣の毒が先に立つものですからね。勿論、それは各自の心に依つて違ひますのさ。ですが、あの人は屹度彼奴等が私を憫れむよりも、私の方で憫れんで遣つて然るべきだと思つて呉れますよ。」

「お前はあの連中に對して、大分腹を立てて居るやうだね、マリーヤ・チモフ・ヴィヴナ？」

「私？ いえ」と、彼女は人の好きさうな笑ひを漏した。「そんな事は決してない、あの時私は貴方を皆見下して遣つた。貴方は皆憤つて、喧嘩をして居たのね。あの連中は一緒に集まりながら、心から笑ふといふことを知らない。あんなに澤山金子を有つて居て、あんなにちよつぱりしか愉快がない。それが本當にお氣の毒でしたよ。尤も、私は今自分より外に何人も氣の毒だなどと思つては遣らないのですがね。」

「お前は私が居ない間、兄さんと一緒に酷い生活を遣つて居たさうだね？」

「誰がそんな事を言ひました？ 馬鹿な話だ！ 今の方が餘程悪いのですよ。今私の夢は好くない、貴方が来たから私の夢が悪く成つたのですよ。何の爲に貴方は来たのですか、私はそれが知りたい。何卒話して下さいな。」

「お前は最一度尼寺へ戻つて行かうとは思はぬかい。」

「え、貴方が又尼寺を言出すだらうとは思つて居ましたよ。實際、貴方の尼寺には驚きますね。又何故私

がそんな處へ行くのですかい。何の爲に、今そんな處へ這入るのですかい。私は今此世に唯一人居るのですよ。三度目の人生を始めるには最う遅いのですよ。」

「お前は何か大層憤つて居るやうだね。眞逆、私がお前を愛しなく成ると、そんな事を心配して居るのぢや有るまい？」

「私は貴方のことなぞ些とも氣に懸けちや居ませんよ。私は只自分が或人を愛しなく成りやしないかと、それを心配して居るのですわ。」

彼女はさも輕蔑したやうに高笑ひした。

「私は何かあの人に對して、大層悪い事をしたに違ひない」と、彼女は不意に一人言でも言ふやうに附け加へた。

「只私は何んな悪い事をしたのか解らない、それが始終氣になつて居るんですよ。始終、始終、此の五年間といふものはあの人に何んな悪い事をしたかと、夜も晝もそればかり心配して来た。私は祈つた、祈つた。始終私があの人に加へた大罪ばかり考へて来た。で、漸つとそれが眞實だと解つた。」

「え、何が解つたのだい？」

「私は只あの人の方にも何か有りやしないかと、そればかり心配して居ましたよ」と、彼女は相手の質問には答へないで、又、實際それを耳にも懸けないで語り續けた。「で、あの人は又あんな怖ろしい人達とは逆も一緒に成つて行かれなかつた。伯爵夫人は私を馬車の中へ入れて、側に坐らせて下さいましたけれどもね、出来ることなら、私を喰つて仕舞はうと思つたのですよ。あの人達は皆何か知ら計企んで居る——あの人も左様ぢやらうか、あの人も私を裏切るのだらうか。」彼女の唇と顎とはがたくと顫へ出した。「ねえ、仰有い、貴方は七つの寺院で呪はれ

たグリシユカ・オトレビーエフの話を読んだことが有りますか。」

ニコライ・フシエヴォロードギーチは黙つて居た。

「併し私は最う振向いて貴方を見ようか知ら」と、彼女は不意に決心したらしい。「貴方も此方に向いて、最つと好く私を見て下さい。私はこれを最後に好く見定めて置きたいのですよ。」

「私はずつとお前を見て居たのだ。」

「ふうむ！」と、マーリヤ・チモフェーヴナは凝乎と相手を見詰めながら言つた。「貴方は以前よりも肥りましたね。」

彼女は何か最つと言はうとした。が、不意に、三度目に、前と同じやうな恐怖が忽ち彼女の顔を歪めた。彼女は再び手を前へ差出しながら背後へ退つた。

「一體お前は如何したのだ？」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは到頭腹を立てて叫んだ。

が、彼女の恐怖はほんの一瞬間続いただけで、一種の不快な、相手を信じないやうな、妙な微笑を顔に泛べた。

「私のお願ひですからね、公子様、何卒立つて這入つて来て下さいませんか」と、彼女は不意に確乎した聲で言出した。

「這入れ？何處へ私が這入るのだい？」

「私は五年の間、あの人が何んな風をして這入つて来るだらうと空想して居たんですよ。さア立つて、次の部屋へお出なさい。私は何にも待つて居ないやうな振して坐つて居ますからね。それから、本を持つて居ませう。其處へ、不意に貴方が五年振に旅から戻つて這入つて来るのですよ。私はそれが何んなだか見たいのですよ。」

ニコライ・フシエヴォロードギーチは齒を鳴らして、何か一人で呟いた。

「澤山だ」と、彼は平手で卓子を敲きながら言つた。「マーリヤ・チモフェーヴナ、お願ひだから、私の言ふことも聞いて呉れ。出来るなら、何卒私の爲にお前の全注意を集めて呉れよ。お前も未だ丸切り狂人ぢや有るまい！」と、彼は苛々しながら言出した。「明日私は二人の結婚を公けに披露するよ。が、お前は決してお城の中などで棲むのぢやない——何卒それを記憶えて居て呉れ。お前は一生、私と一緒に棲はうとは思はぬかい、但し此處から遠く、瘋癲病院などへ入れも爲ないよ。私も何人に助けを乞はないで生活するだけの金子は有る。お前は召使も使へるだらうし、些とも仕事なぞせずとも可いよ。何でもお前の好きな物は出来る限り購つて上げるよ。お前は祈禱を上げることも出来る、好きな處へ行つて、好きなことをしても可い。私はお前に手も觸れないよ。私自身は斷じて其處から何處へも行かない。お前が所好なら、私は一生、お前に物も言ふまい。お前が所好なら、彼得斯堡の室の隅で好く遣つたやうに、毎晩私に話をして呉れても可いよ。又お前が所好なら、私はお前に物の本を讀んで聞かせても上げるよ。が、只一生、同じ處に居なくちや成らない、而も其場所が陰鬱な處だよ。行くかい。お前は行く氣が有るかい。お前は後で後悔して、涙と呪詛とで私を苦しめるやうなことは有るまいね？」

彼女は非常に珍らし相にして聽いて居た。そして、長い間黙つて考へて居た。

「私には皆信じられないわ」と、彼女は漸つと皮肉に、輕蔑したやうに言つた。「私はそんな山の中にこれから四十年も棲むのですね」と、彼女は笑ひ出した。

「それが如何したのだ？それぢや四十年棲んだら可いぢやないか……」と、ニコライ・フシエヴォロードギ

「チは顔を盛めながら言った。

「ふうむ！ 私は何んな事が有つても、そんな處へ行きませんよ。」

「私と一緒に？」

「で、私が一緒に行かなくちや成らんと云ふ貴方は何ですか、私は四十年も貴方と一緒に山の上に坐つて居るんですね——まあ驚いた！ 近頃の人は辛棒強く成つたこと！ いえ、鷹が巢に成るといふことが有るもんぢやない。私の公子様はそんなもんぢや有りませんよ」と、彼女は傲然として勝ち誇つたやうに頭を擡けながら言った。

「彼は何か何やら解らなく成つたらしい。」

「お前は何で私を公子様などと言ふのだい……私を誰だと思つて居るのか」と、彼は口早に訊いた。

「何うして、貴方は公子様ぢや有りませんか。」

「私はそんな者ぢやないよ。」

「ちや、貴方は御自分で、御自分の口から、私に面と向つて自分は公子ぢやないと仰有るのね？」

「あゝ、私は斷じてそんな者ぢやないよ。」

「神様！」と、彼女は両手を握りながら叫んだ。「私はあの人の敵から言はれるのなら、何を言はれても平氣だ。

が、あの人の口からこんな無禮な言葉を聴いては！ あの人はまだ生きて居るのか」と、彼女は狂人の様になつて、

ニコライ・フシエヴォロードギーチの方へ振向きながら叫喚した。「お前はあの人を殺したのか。白狀なさい！」

「私を誰だと思つてるのか」と、彼は顔を歪めて椅子から飛上りながら叫んだ。だが、斯う成つては、女を脅かすのは容易なことでない。彼女はよく勝ち誇つた。

「お前が誰で、何處から生れたといふことなど、何人が知つてるものか！ 只私の胸が、私の心が此の五年間こんな隠謀が有りやしないかと想像して居た。で、私は此處に坐りながら、何んな盲目の梟が私の許へ遣つて來るかと思議に思つて居た。いゝえ、お前は拙いよ、レビヤードキンよりも拙い役者だよ。私の卑しい挨拶を伯爵夫人に傳へてお呉れ、そして、お前よりも最つと好い役者を寄越すやうに言つてお呉れ。あの方がお前を備つて來たのか、言つて御覽な。お前は慈悲で彼家の臺所にでも置いて貰つて居るのかい。お前の瞞着など私に見透かせるよ。お前は皆、一人残らず私に解つて居る。」

彼は確乎女の臂の上を掴んだ。彼女は眞直に相手の顔を見詰めながら笑つた。

「お前はあの人に似てるよ、酷く似てるよ。お前はあの人の親類だね——お前方は皆狡い奴等だよ。只私の立派な鷹だよ、貴公子だよ。それにお前は何だ、梟ぢやないか、手代ぢやないか。私のは自分で氣に入れば、神様にも頼みますよ。だが、可厭なら、何んな事が有つても頭など下けない。そして、シャツシユカが——あの人は私の大切な男だよ——お前の頬邊を打つたらう、レビヤードキンが左様言ひましたよ。お前はあの時、お前が這入つて來た時、何をあんなに怖がつて居たの？ あの時、誰が怖かつたの？ 私は轉んでから、お前に抱き起された時、お前の卑しい顔を好く見て遣りましたがね、眞個私の胸の中へ蟲が匂ひ込んで來たやうな氣がしたよ。あの人ぢやないと、私は思つた。斷じてあの人ぢやない！ 私の鷹は幾許時めく若いお嬢さんの前だつて、私のことをあんなに羞かしがる氣遣ひは決して有りませんよ。あゝ、如何せう！ 此の五年間といふもの、私は私の鷹が何處か山の向うに棲んで居て、高く天翔りながら、太陽を見詰めて居ると思へばこそ、斯うして幸福にして居られたのですよ……白狀しろ、此の大騙詐奴、お前はそれで大分儲けたかい。お前を諾と言はせるには、何れだけ賄賂が入るのかね。私

はお前なぞに一錢だつて遣りたくないよ。はよよ！はよよ！……」
 「うよ、白痴奴！」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは、猶確乎女の腕を捕まへながら唸つた。
 「行つて仕舞へ、此の騙許奴！」と、彼女は烈しく鞆圍いた。「私は公子様の奥方だよ。お前の小刀など怖いものか！」

「小刀だ？」

「あゝ小刀だよ、お前は衣囊に小刀を持つて居るだらう。お前は私が寝て居たと思つたんだらうがね、私はちやんと見て置いたよ。お前は今這入つて来た時、其小刀を取出したらう！」

「何を言つてるのだ、此の不仕合女奴？ 何んな夢を見たのだ！」と、彼は力任せに女を突き退けながら叫んだ。女はよろ／＼として、長椅子の上に頭と肩とを打附けながら倒れた。彼は表へ走り出した。が、彼女は直に飛び起きて、跛引き／＼男の後を追掛けた。レビヤードキンは周章狼狽して、力一杯女を後へ引戻さうとした。が、女は間を目懸けて聲を上げて笑ひながら、男の背後から叫喚いた。

「昨日来い、グリシユカ・オトレビーエフ！」

十一

「小刀、小刀」と、彼は道を探ばないで、泥濘や水潦の中を大股に歩きながら、怒りに耐へ兼ねて繰返した。

實際、彼は時々大聲を上げて、狂人の様に笑ひたいやうな、怖ろしい慾望に驅られた。が、何かの理由で彼は自ら制して、高笑ひを耐へて居た。彼は其晩フエツカに出會つた橋の上へ来た時、漸つと我に返つた。其男は矢張彼

を待つて居た。ニコライ・フシエヴォロードギーチの姿を見ると、彼は帽子を取つて、何やら面白相に、口疾に饒舌りながら近づいて来た。最初ニコライ・フシエヴォロードギーチは足を止めないで歩き續けた。少時の間は、又／＼／＼言出した浮浪人の言葉を聴いても居なかつた。彼は不意に全然其男を忘れて居るやうな氣がした。實際又「小刀、小刀」と繰返して居る時には、其男を忘れもした。が、彼は相手の襟首を掴んで、烈しく橋桁に打附けながら、長い間鬱屈した憤怒を一時に發した。一瞬間其男も反抗しようとした。が、同時に自分の上へのし懸つて居る敵手に較べると、自分は藁蓋のやうな者と氣が附いて、彼は靜乎と手出しさへしないで黙つて居た。兩手を背後へ捻ぢ上げられて、地面に膝を突いたまゝ、狡猾な浮浪人は一見何んな危険をも加へ得ないやうな振して、如何なることかと、次の瞬間を待つて居た。

彼の注文は圖に中つた。ニコライ・フシエヴォロードギーチは囚人の兩腕を縛らうとして、既に左の手で厚い毛革の襟巻を外したが、何と思つたか不意に相手を捨て、向うの方へ突き遣つた。男は直に立上つて、ぐるりと廻つた。不意に短い靴屋の小刀が彼の手に閃いた。

「小刀を如何するんだ、直に捨ちまへ！」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは性急な身振をして命じた。小刀はそれが現はれたと思つたら、直に又消えた。

再び物も言はなければ、振返りもせず、ニコライ・フシエヴォロードギーチは元の様に道を歩いて行つた。が、執拗な浮浪人は斯う成つても未だ彼を見捨てなかつた。尤も、今度は前の様に饒舌らなかつた。悲々しげに間隔を保つて、一歩後から跟いて行つた。

二人は斯うして橋を渡つた。今度は左へ曲りながら、河添ひの土手の上へ出た。それから又淋しげな、長い裏町

へ這入つた。此町はバガヤールレンスキー街を通つて行くよりも、此町の中央へ出る近道で有る。

「何日か、何日かお前は此地方の教會へ泥棒に這入つたといふことだが本當かい」と、ニコラーイ・フシニェヴォ
ド平一チは不意に訊ねた。

「最初私はお祈禱を上げに行つたのですよ」と、浮浪人は何事も起らなかつたやうに、眞面目な、恭謙な態度で
答へた。前の親しげな「友達附合」のやうな句調は痕方もなかつた。恰度眞面目な、事務的な人が理由もなく侮辱
せられて、而も其侮辱を看過しようとして居るかのやうに見えた。

「ですが、神様の手が私を其處へ導いて下さつた時」と、彼は續けて言つた。「えよ、私も眞個神様のお恵みだと
思ひましたよ。それも皆私の手頼ない境遇から來て居るんですがね、私どものやうな世渡りをして居ては、側から
扶けて呉れる者がなくちや、眞個遣り切れませんか。で、神様も照覽あれ、旦那、眞個そりやア骨折損でした
よ。神様が私に罰を當てたのですね。あれだけの仕事をして、私の手に残つた物と言や唯十二留布ですだからね。
純銀で出來てる筈の聖ニコラーイの下顎は一文にも成りませんでした。えよ、鍍金だと云ふんですよ。」

「お前は番人を殺したんだね？」

「えよ、そりやア二人して一緒に教會を荒したのですよ。が、明るる朝に成ると、河の傍で、二人は何方が袋を
持つかといふことから喧嘩をおツ始めましたね。私も餘計な罪を作りました、私にはあの男の荷物を軽くして遣つた
のですよ。」

「ちや、お前は最一度人殺しをして盗みを働いたら可からう。」

「そりやアビョートル・ステバーノギ一チが私にしたと同じ助言ですよ、言葉迄も同じでさ。あの人は本當に吝

で、人を助ける段に成ると、随分頑固な方ですからね。加之に、あの人は吾々人間を土から造つた天の神様に對す
る信仰は一厘だつて有つて居ませんからね。何んな獸に到る迄悉皆自然が造つたのだと言ふのですよ。あの人には
又、私どものやうな世渡りでは、誰か扶けて呉れる人がなくちや遣り切れぬといふことが解らない。まアあの
に物を言ひ掛けて御覽なさい、あの人は羊のやうに水の中を眺めて居ますよ。何人だつて驚いて仕舞ひまアアね。
貴方は御存じぢやないでせうが、貴方が今訪ねて被往した彼處のレビヤードキンの家ぢや、あの男が未だフィリボ
フの家に棲んで居た頃、貴方が此方へ被入しやる前です、徹宵表の戸が開いて居ましたよ。あの男が酔拂つて、
死人の様に眠つて居ると、金子があの男の衣囊から食み出して、床中一杯にこぼれて居るんです。私は或時此眼で
それを見ましたよ、私どものやうな世渡りでは、誰か扶けて呉れる者がなくちや迎も遣り切れませんか……」

「お前の眼で見たといふのは如何いふ意味だい？ちや、お前は夜半に這入つて行つたのだね？」

「まア私が這入つて行つたとして、何人も知つちや居ませんよ。」

「何故お前はあの男を殺さなかつたのだい？」

「いや、私も腹で勘定して見ましたよ。百五十留布位の金子なら、私にや何時でも奪つて來られる。今少時待ち
さへすりや、十倍の千五百留布にも成らうと云ふのに、幾許私だつてそんな事が出來ますかい。レビヤードキン太
尉はね、私やア此耳で聞いたんだが、酔拂ふと好く貴方から大層なお金子が貰へるやうなことを言つてましたよ。
何しろ此町には何んな料理屋でも、居酒屋でも、あの男が酔拂つた時其話をしない店は一軒もない位ですからね。
で、いろんな人の口からそんな話を聞いたので、私も旦那一人に希望を繋ぐやうな氣に成りましたよ。旦那、私は
親身の父親か兄弟でなきや言はないことを貴方に言つて居るんですよ。私もビョートル・ステバーノギ一チなぞにこ

んな話はしませんからね。え、此世に一人だつて私の口からは言ひませんとも。ですから、旦那、濟みませんが、私に三留布だけ遣つて下さいませんか。旦那が私の心を落着けてさへ下されば、私だつて最つと眞實のことを知るやうに成りますよ。私どもは何誰かに扶けて頂かなくちや遣つて行かれないのですからね。」

ニコライ・フシエヴォロドギイチは聲を擧げて笑つた。そして、小さな紙幣で五十留布程入れて有る蠟臺口を取出しながら、束の中から一枚拔出して其男に投げて遣つた。それから又一枚、二枚、三枚。フェツカは空中にそれを捕まへやうとして飛び上つた。紙幣はひらくと泥濘の中に落ちた。彼は「えへ！えへ！」と叫びながら、それ等の紙幣を掴んだ。ニコライ・フシエヴォロドギイチは紙幣の束を悉皆投げて遣つて仕舞つた。そして、猶笑ひながら、今度は一人町を下つて行つた。浮浪人は後に残つて、泥濘の中に四ノ匂ひに匂ひながら、風に吹き散らされて水潦の中に落ちた紙幣を捜し廻つて居た。其後一時間ばかりも「えへ！えへ！」と掻擧るやうな聲が闇の中に聞えて居た。

何と云ふ小僧の指定を聞けりい

第二章 決闘

次の日、午後の二時に、豫定の如く決闘が行はれた。何でも彼でも決闘したいと言ふガバーノフの頑固な希望から、萬事が遮二無二急ぎ立てられた。彼は相手が自分に對して取る態度の不可解なために、一層憤つて仕舞つたのだ。全一箇月といふもの、彼は相手を侮辱し通して來たが、一向手應へがない、如何しても相手の忍耐力を失はせることが出来ない。彼は自分の方から相手に挑戦するやうな直接の理由がないので、ニコライ・フシエヴォロドギイチの方から挑戦するのを待つて居たのだ。彼の秘密な動機、即ち四年前に彼の一家に加へられた侮辱を根に持つた、スタッフローギンに對する殆ど病的ともいふべき憎惡に就いては、如何いふものか彼は自白することを恥ぢて居た。實際彼は自分でもこれを挑戦の理由とするには足りないかと考へて居た、特に二度もニコライ・スタッフローギンに依つて申出された、謙遜な辯解に見れば左様感ぜざるを得ない。彼は心密かにスタッフローギンを恥を知らぬ卑怯者と決めて居た。又彼がシャトーフの毆打を甘受した心持も解らなかつた。で、彼は最後に、ニコライ・フシエヴォロドギイチをして、到頭果し合ひ申込むに到らしめたやうな、極めて亂暴な手紙を送ることに決心した。昨日此手紙を出して置いてから、彼は熱にでも浮かされたやうに苛々しながら挑戦を待つて居た。で、或時は希望を有ち、或時は失望したりしながら、有らゆる場合を考へて見て、何事が起つても狼狽へないやうに、介添として、マヴリキイ・ニコライエギイチ・ドロズドフを頼んで置いた。此人は彼の舊い學校朋輩で、多大の敬意

を拂つて居る友人で有つた。で、次の朝九時にキリーロフが使命を帯びて遣つて来た時には、萬事用意が出来て居た。ニコライ・フシエヴォロードギーチの有らゆる辯解も前代未聞の讓歩も、一言言出すと直に非常な權幕で拒絶された。昨宵始めて此事件の關係を知つたマヴリーキイ・ニコライエギーチは、それを聞くと吃驚しながら口を開いた。そして、出来ることなら和解を勧めようと思つたが、ガバーノフがそれと察して、椅子の中にぶる／＼身を顛はして居るのを見ると、思ひ止つて、何にも言出さなかつた。これが一旦舊い學校朋輩にした約束でなげりや、彼は即座に身を退きたいと思つた。が、いよ／＼決闘の場に臨んだら、何か自分が役に立つことも有るだらうと思つて、其儘残つて居た。キリーロフは挑戦を傳言した。スタフロギンの申込んだ果し合ひの條件は、何等の抗議なくして、其場で承諾された。只一つの附加條件が提出された。而もそれが猛烈なもので有る。即ち第一の發射で決定的な結果を見なかつたら、再び發射しよう、若し又二度目の果し合ひが不結果に終つたら、第三の決闘に移らうと云ふのだ。キリーロフは顔を蹙めながら、三度目迄闘ふには及ぶまいと抗議した。が、自分の骨折も無効に終るのを見て、三度目が際限で有る、「四度目の果し合ひは論外で有る」といふ條件の下に承諾した。それだけは讓歩された。斯くの如くにして、午後二時に、町の外廓なるスタヴォーレジュニキとシュビーグリーン工場との間のブリコーフといふ小さな林の中で決闘が行はれた。

前夜の雨は止んだ。が、じめ／＼した、風の吹く、灰色の天氣で有つた。低い参差した、煤けた雲が寒空を奔つて居た。木の梢はどろ／＼といふ深い音を立て、吼え、木の根は慄んだ。眞個鬱陶しい朝で有つた。

マヴリーキイ・ニコライエギーチとガバーノフとは、後者が鞭を取つて、二匹の馬に曳かせた、洒落れた輕車に乗つて、其場へ遣つて来た、彼等は一人馬丁を連れて居た、ニコライ・フシエヴォロードギーチとキリーロフと

も殆ど同時に到着した。彼等は馬車を驅らないで、馬に乗つて遣つて来た。矢張乘馬の從僕を二人連れて居た。一度も馬に乗つたことのないキリーロフは、右の手に重い拳銃の箱を抱へながら、大膽にも、鞍の上に眞直に乗つて居た。彼は何うしても其箱を從僕には持たせ得ないのだ。馬に乗つた經驗がないので、彼は絶えず左の手で手綱を引張つた。それが爲に馬は頭を上げて、時々後足で立つやうな氣合を見せた。が、それでも乗手は一向不安を感じないやうに見えた。病的に疑ひ深く成つて、稍ともすれば腹を立てようとして居るガバーノフは、二人が馬に乗つて来たのを見て、又新に侮辱を加へられたものと考へた。即ち彼等が萬一傷つた場合の馬車を用意することさへ必要と思はないのは、相手が餘りに自分達の成功を過信して居ることを示すものだと思ふのだ。彼は憤怒の餘り蒼く成つて馬車から飛び出した。そして、マヴリーキイ・ニコライエギーチと話して居る間も、ぶる／＼と兩手を顛はせて居た。彼はニコライ・フシエヴォロードギーチの挨拶にも答へないで、ぐるりと背を向けた。介添人は圖を引いた。キリーロフの拳銃が圖に當つた。二人は柵の距離を測つて、闘手を立たせた。從僕どもは馬車と馬とを連れて、三百歩も後の方へ移された。武器には彈丸を込めて、闘手の手に渡された。

マヴリーキイ・ニコライエギーチは何か心に懸ることが有るやうな、憂鬱な顔をして居た。それに反して、キリーロフは全く穩やかな、何にも氣に懸けないやうな風に見えた、介添人としての義務も細かな點迄ちん／＼と遣つて退けた。が、少しも騒々しいこともなければ、目前の怖ろしい争闘の結果に關して、好奇心さへ抱いて居ないらしい。ニコライ・フシエヴォロードギーチは平常よりも蒼褪めて居た。外套の中に、稍輕装をして、白い海狸の皮の帽子を被つて居た。酷く疲れて居るやうで、時々顔を蹙めた。自分の不機嫌を隠すのも餘計なことだと感じ居るらしい。が、ガバーノフは此時何人よりも一層記載に値ひして居た。で、特に彼の爲に一言を費さずには置

かれない。

二

私は是迄彼の外貌を記載する機会を有たなかつた。彼は身丈の高い三十三の男で、好く肥つた、ぐたくした亞麻色の髪を有つた、何方かと言へば美しい顔立をして居た。彼は大佐で軍隊を退いた、若し將官に成る迄止まつて居たら、一層目覺しい働きをして、戰場でも勝れた副將に成つたに違ひない。

此人の性格の特徴として、私は彼の軍隊を退いた主なる理由が、四年前に俱樂部でニコライ・フシエヴォロドギイチに依つて、彼の父に與へられた侮辱以來、絶えず彼の心を悩ました家の不名譽の念で有つたことを一言せずには居られない。彼は心から軍隊に止まつて居るのを不名譽とさへ考へた。何人もそんな出来事を知つて居る者には居らなかつたが、彼は心の中で、聯隊を汚し、同僚の面を汚して居るものと信じて居た。尤も、彼は父に加へられた侮辱のすつと以前に、全然違つた原因から一度軍隊を去らうといふやうな氣に成つたことは有つた。が、彼は躊躇して止めた。可訝しな話だが、彼が軍隊を去らうとした本來の原因、寧ろ希望は、二月の十九日に發布された奴隸の開放令に原ついたので有つた。ガバーノフは此州でも一番富んだ地主の一人で、開放令の爲に別段多く損をしたといふ譯でもなく、加之、其改革の人道と經濟上の利益とを理解することも出来る人なのだが、不意に其布告に依つて自分が個人的に侮辱せられたのだと感じた。勿論、それは自分でも好く自覺しないやうな感情で有つた。が、自覺しない爲に一層それが強く感じられた。尤も、彼も父の死に到る迄は、斷乎とした所置を取るだけの決心は附かなかつた。が、彼は其の「紳士的な」思想の爲に、彼得斯堡でも高位高官の人の間に知られて來た。彼は其

關係を嚴格に持續して居た。彼は又滅多に打明けない、一人で満足して居るやうな質の男で有つた。最一つ彼の生活の特徴として、彼は猶露西亞に残存して居る、家系の純粹と舊さとに極端な價値を置いて、眞面目にそれを考へて居る妙な貴族の一派に屬して居た。同時に、彼は露西亞の歴史を耐へ難いものとして居た。實際、彼は一般に露西亞の風俗を何處か豚のやうなものと見て居た。特に富裕な貴族の子弟にのみ限られた陸軍幼年學校に於ける子供の時代に於てさへ——彼は其學校に入る特權を有つて居た——始終或詩的な思想が深く彼の心中に根ざして居た。彼は城を好み又騎士の道を悦んだ。即ち騎士の劇的な方面を悦んだのだ。彼は莫斯科朝廷の時代に於て、帝王が露西亞の貴族に體罰を科し得る權利を有つて居たといふ話を聞いて、殆ど恥しさに泣かうとした。そして、西歐羅巴の騎士の風習と較べて顔を赧らめた。兵學の著大な知識を有つて、完全に自家の義務を遂行した、此の頑固な、極めて嚴格な男も、其衷心に於ては一個の夢想家で有つた。彼は又會合の席で饒舌ることが出来る。殊に雄大な辯舌を有つて居るとさへ言はれて居た。が、生れて三十三年の間、彼は一度も饒舌つたことがなかつた。近頃彼が加はつて居た彼得斯堡の社交界ですら、彼は極めて傲岸な態度を持して居た。彼得斯堡に於ける彼と、其頃外國から歸つたニコライ・フシエヴォロドギイチとの會合は、殆ど彼を狂人にしようとした。で、今や彼は欄の前に立つて、怖ろしく不安を感じて居た。彼は始終如何にかして決闘が中止に成りやしないかとばかり案じて居た。一寸延びただけでも、彼は思はず身を戦はせた。で、キーリロフが闘手に發射の合圖を與へないで——實際彼が聲高に言つた通り形式的には過ぎないが——不意に饒舌り出した時は、彼の面に心痛の色が明々と見えた。

『今諸君が拳銃を手にして、私は合圖を與へなくちや成らぬ時、單に形式としてとは有るが、今一度諸君に和解の意の有無を確めて見たい。これが介添人として、私の義務で有る。』

絶えず自分の黙従を自分で非難したから、其時迄黙つて居たマヴリーキイ・ニコラーエギーチは、恰も友を苦しめようとしてもするやうに、不意にキリーロフの言葉に應じて饒舌り出した。

「私も全然キリーロフ君の言葉に同意する……一度柵の前に立てば和解は不可能で有るといふやうな考へは、單に佛蘭西人のみに適した一種の偏見に過ぎない。それに、私には如何しても此立腹の理由が解りませんよ。私は長い間此事を言ひたいと思つて居た……あれだけ辯解が申込まれて有るのですものね、左様ぢや有りませんか。」

彼は顔中眞根に成つた。滅多にこれだけ、こんなに昂奮して饒舌つたことはないのだ。

「私は再び出来る限りの有らゆる辯解をしようといふ申出を繰返します」と、ニコラーエギーチは急いで口を挟んだ。

「そりやア不可能だ」と、ガバーノフは眞根に成つてマヴリーキイ・ニコラーエギーチに向ひながら、足踏み鳴らして叫んだ。「此男に言つて下さい」と、彼は拳銃でニコラーエギーチを指差しながら、「マヴリーキイ・ニコラーエギーチ、君も僕の介添人で僕の敵でないなら、そんな申出は只侮辱を増大するばかりだと言つて聽かせて下さい。此男は私から侮辱されるのは不可能だと思つて居るんですよ……此男は柵の前に立つて、私から退くのを不名譽とも何とも思つて居ない！一體、此男は私を何だと思つて居るのだ。君は何だと思ひますか……君は、君は、僕の介添人たる君は何だと思つて居るのだ！君は只僕の覗ひを外させるために、僕を憤らせて居るのだ。」

彼は再び足踏み鳴らした。彼の唇には泡の滓が溜つて居た。

「談判は終つた、何卒私の合圖に耳を傾けて下さい」と、キリーロフは聲の頂邊で叫んだ。「一！二！三！」

三で、闘手は互に覗ひを定めた。ガバーノフは直に拳銃を上げて、五六歩出た處で發射した。一秒時間彼は立停つて居た。そして、自分が覗ひを外したと確かめながら、柵の側迄進んで行つた。ニコラーエギーチも又拳銃を上げながら進んだ。が、如何したのやら高過ぎる位に拳銃を上げて、殆ど覗ひも定めずに發射した。それから彼は手巾を取出して、右の手の小指を包んだ。此時に成つて、皆は始めてガバーノフが全然覗ひを外したのではないと知つた。が、彈丸は只相手の指の肉の部分を掠めて、骨には觸れなかつた。で、ほんの引掻き傷に過ぎなかつた。キリーロフは直に闘手がこれで満足しなかつたら、決闘は續行すると宣言した。

「私は斷言する」と、ガバーノフは再びマヴリーキイ・ニコラーエギーチに向ひながら嘖嘖れ聲で言つた。彼は喉が乾燥いだやうな氣がした。「此男は」と、再びスタフロロギンの方を指差しながら、「故と空中を向けて射つたのですよ……故意に……これは又侮辱だ……此男は決闘を不可能に終らせようとするのですよ。」

「僕は規則に觸れない以上、所好なやうに發射する権利が有るのだ」と、ニコラーエギーチは斷乎として言つた。

「いや、そんな権利はない！此男に言つて下さい！言つて聽かせて下さい」と、ガバーノフは叫んだ。

「私は全然ニコラーエギーチ・フシエヴォロードギーチと同意見です」と、キリーロフは宣言した。

「何故此男は僕を庇ふのだ？」と、ガバーノフは他人の言葉を耳に入れないで哮り立つた。「僕はそんな恩恵に浴したくない……僕はそんなものを唾棄する……僕は……」

「僕は暫つて言ふが、決して君を侮辱しようと思つたのではない」と、ニコラーエギーチはフシエヴォロードギーチも性急に叫んだ。「僕は只何人をも殺したくないと——君でも他の人でも——左様思つたから高く射つたのだ、何も君

自身に關係したことをぢやない。成程僕が自己を侮辱されたものと考へないのは事實だ、それが腹が立つのならお氣の毒だよ。だが、僕は何人も僕の權利に干渉することは許さない。」

「此男がそんなに血を見ることを怖れて居るなら、何故僕に挑戦したのだ。それを訊いて呉れ玉へ」と、ガバーノフは猶マヴリーキイ・ニコラーエギーチに向つて叫喚した。

「貴方に挑戦しないで居られるのか」と、キーリロフは言葉を狭んだ。「貴方は誰の言ふことも聽かない。如何したら貴方を免れることが出来るのだ？」

「僕はこれだけの事を言ひ得る」と、マヴリーキイ・ニコラーエギーチは苦しげに事件の顛末を考量しながら言つた。「一方の闘手が前以て空中に發射すると公言したら、確に決闘は續行することが出来ない……明白な……微妙な理由に依つてですね。」

「僕は幾度でも空中に發射するなどは言はなかつた」と、スタフロロギンは到頭忍耐を失ひながら叫んだ。「僕が心に何と思つて居るか、此次は如何する積りで居るか、貴方方には解るまい……僕は斷じて決闘の邪魔をしようとは思つて居ませんよ。」

「それなら立合は續けられる」と、マヴリーキイ・ニコラーエギーチはガバーノフに向つて言つた。

「諸君、位置に就いて下さい」と、キーリロフは命じた。

再び二人は進んで行つた。ガバーノフは再び視目を外した、スタフロロギンは又空中に向けて發射した。が、今度は必ずしも空中に向けて發射したとは言はれなかつた。ニコラーエギーチは故意に過つたとさへ言はなければ、斷乎として正當に發射したと言へば言はれたのだ。彼は眞直に空を覗つたのでもなければ、樹

木を覗つたのでもない、敵手を覗ふやうに見えるには見えた。只拳銃を向けた時、弾丸は敵手の帽子の上一尺ばかりの處を飛んだ。二度目の發射は前よりも低かつた、故意に見える度合が少なかつた。が、斯う成つては、ガバーノフの方で斷じて承知しない。

「又！」と、彼は齒を鳴らしながら呟いた。「最う構はない 僕は挑戦されたのだ、僕は僕の權利を利用するのだ。僕は三度目を打つのだ……如何成つても構はないぞ。」

「貴方は左様するだけの充分な權利がある」と、キーリロフは引奪るやうに言つた。マヴリーキイ・ニコラーエギーチは何にも言はなかつた。闘手は三度目に位置に着いて、合圖も與へられた。今度はガバーノフも眞直に柵迄進んで行つし、其處から十二歩の距離で覗ひ始めた。彼の手はぶる／＼と頭へて旨く覗ひが取れなかつた。スタフロロギンは拳銃を下けたまよ、身動きもせずに相手の發射を待つて居た。

「長過ぎる、貴方の覗ひ様は長過ぎる！」と、キーリロフは憤然として叫んだ。「打て！ 打て！」
が、拳銃は鳴つた。今度はスタフロロギンの白い海狸の皮の帽子が吹き飛ばされた。覗ひは眞個正しかつた。帽子の頂きが打貫かれて居た。最う一寸の四分の一も下なら萬事終れりだ。キーリロフは其帽子を拾ひ上げて、ニコラーエギーチに渡した。

「打て、敵手を引止めて置いちゃ成らない！」と、マヴリーキイ・ニコラーエギーチはスタフロロギンが打つことも忘れたやうに、キーリロフと一緒に帽子を検査して居るのを見て、極度に昂奮しながら叫んだ。スタフロロギンは飛び立つた。一寸ガバーノフを見て振り返りながら、今度は形式なぞに些とも意を留めないで、藪の中へ向けて一方に發射した。決闘は終つた。ガバーノフは呆然して立つて居た。マヴリーキイ・ニコラーエギーチは傍へ行つ

「何やら言ひ始めたが、彼はそれを理解するやうにも見えなかつた。キーリロフは其場を立去らうとして、帽子を取りながら、マヴリーキイ・ニコラーエギーチに挨拶した。が、スタフロロギンは前の慇懃な態度を忘れた。彼が藪の中へ向けて發射した時は、柵の方へ振向きさへしなかつた。彼は拳銃をキーリロフに渡して、馬の方へ急いで行つた。彼の顔は憤つて居るらしい、物も言はなかつた。キーリロフも又黙つて居た。二人は馬に乗つて、一鞭當てて駆け去つた。」

〇 三

「何故物を言はないのだ？」と、二人が自宅から遠からぬ邊迄来た時、彼は苛々しながらキーリロフを喚んだ。

「如何したのだ？」と、後者は後足で立つた馬から迂り落ちさうにしながら答へた。

スタフロロギンは自ら抑制した。

「僕はある……馬鹿を侮辱する積りはなかつた。が、又彼奴を侮辱して仕舞つたよ」と、彼は静かに言つた。

「左様、君は又あの男を侮辱した」と、キーリロフは相手の言葉を繰返した。「それに、あの男も馬鹿ぢやないよ。」

「兎に角、僕も出来るだけの事は盡くした。」

「いよや。」

「ぢや、僕は如何すりや可かつたのだい？」

「始めからあの男に挑戦しないのだ。」

「最一つ顔を打たれるのか。」

「あゝ打たれるのだ。」

「僕には最う何にも解らない」と、スタフロロギンは腹立たしげに言つた。「如何して君等は皆他の者からは期待しないやうなことを僕一人から期待しようとするのだ？如何して僕だけが誰一人辛抱し得ないやうなことを辛抱しなけりや成らないのだ、誰一人堪へ得ないやうな負擔を負はなけりや成らないのだ？」

「僕は君自身負擔を求めて居るのだと思つたよ。」

「僕が負擔を求めぬ。」

「左様だ。」

「君はそれを……見たのか。」

「左様だ。」

「そんなに目に立つかね。」

「左様だ。」

少時二人とも黙つて居た。スタフロロギンは何か心に懸ることが有るやうに見えた。彼は殆ど驚駭して居た。

「僕は只何人も殺したくないから暇はなかつただけだよ。別に仔細はないのさ」と、彼は自分で自分を辯護するやうに、何やら昂奮しながら邊て言つた。

「君はあの男に腹を立てさせない方が可かつたのだよ。」

「ぢや、如何したら可かつたのだね？」

「あの男を殺すのさ。」

「君は僕があつたの男を殺さなかつたのを後悔するのかい。」

「僕は何んな事でも後悔なぞしないよ。只、僕はね、君が實際あの男を殺す積りだと思つたのさ。君は自分が求めて居るものを知らないのだ。」

「僕は負擔を求めて居るよ」と、スタフロロギンは笑つた。

「君自身血を求めて居なかつたら、何のためにあの男に君を殺す機会を與へたのだい？」

「僕が挑戦しなけりや、彼奴は決闘でなしに、單に僕を殺したらうからね。」

「そりや君の關したことをぢやない。又恐らくあの男は君を殺さなかつたらうよ。」

「只僕を殴るだけか。」

「それも君の關したことをぢやない。君は只君の負擔に堪へたら可い。それでなけりや君の功蹟はないよ。」

「話らないことを言ふな。僕は何人にも讀めて貰ひたくないよ。」

「僕は又君がそれを求めて居るのだと思つた」と、キリロフは恐ろしく冷淡な、如何でも可いやうな調子で言つた。

二人は家の後庭へ乗込んだ。

「何うだ、上つて行くかい」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは言つた。

「いや、自宅へ歸るよ。左様なら。」

彼は馬を乗り捨て、拳銃の箱を小脇に抱えた。

「兎に角、君は僕を憤つたのぢやなからうね」と、スタフロロギンは相手に手を差出しながら言つた。

「そんな事はないよ」と、キリロフは振返つて握手しながら言つた。「僕の負擔が軽いとすれば、それは僕の生れ附から來るんだよ。恐らく君の負擔は僕のよりも重からう、それも君の生れ附だ。別に羞ぢる必要はないのさ。そりやア些ともないよ。」

「僕も自分が弱い人間だとは知つて居る。で、又強いやうな振もしたくないよ。」

「それが可いのさ、君は強い人間ぢやない。又お茶でも飲みに来玉へ。」

ニコライ・フシエヴォロードギーチは非常に昂奮しながら、家の中へ這入つて行つた。

四

彼は直にアレキセイ・エゴリイチから、ヴルヴトラ・ベトロヴァナがニコライ・フシエヴォロードギーチの馬に乗つて出掛けた——八日も病棟に在つた後始めて外出したといふ話を聞いて、大層喜んだといふ話を傳へられた。で、彼女も亦馬車を命じて、「八日の間も引籠つて居たから、昔日の習慣に従つて」外氣を呼吸するために、散歩に出掛けたと云ふのだ。

「一人か、それともダリリヤ・パブローヴァナと一緒に」と、ニコライ・フシエヴォロードギーチは爺さんを避けて口早に訊いた。そして、ダリリヤ・パブローヴァナが「病氣のために外出を斷つて、室に引籠つて居る」と聞いた時、彼は不快な顔をした。

「おい、爺さん」と、彼は不意に決心したやうに言つた。「今日中あの女を番して居て呉れ。で、若しあの女が俺の許へ會ひに來るやうだつたら、直に引留めて、俺は少くとも此處五六日の間あの女に會ふことは出來ないと言つ

て呉れるんだよ……俺自身来ないやうに頼んで居たと……好い時期が来りや、俺の方から知らせるからね。解つたかい。」

「左様申しませう」と、アレキセイ・エゴリイチは眼を床に落したまよ、聲を曇らせながら言つた。

「尤も、あの女が自分で俺に會ひに来る積りだといふことが判然解つてからにするんだよ。」

「えよ、御心配には及びませぬ、大丈夫間違へる氣遣ひは有りませぬからね。貴方方の會見は是迄皆私が首尾したので御座いませう。何かと言へば、毎も私の手をお借りなさいましたよ。」

「知つてるよ。兎に角、あの女が自分で来ようとする迄は黙つて居るのだぜ。お茶を一杯持つて来て呉れんか、直に。」

老人が出て行くと、殆ど同時に扉が再び開いて、ダーリヤ・パブローヴナが扉口に現れた。彼女の顔は眞蒼に成つて居たが、眼は穏やかに見えた。

「お前は何處から来たのだ？」と、スタフローギンは思はず聲を立てた。

「私は彼處に立つて、あの人が出て行くのを待つて居ました。貴方があの人に仰有り附けて被坐しやいましたことも聞きました。今あの人が出て行つた時は、隅に身を隠したので、あの人は氣が附かない様で御座いました。」

「ダーシヤ、俺は以前からお前と仲違ひをする積りで居るのだよ……少時の間……當分の間だね。昨宵お前の手紙は貰つたけれど、何うしても俺は會ふことが出来なかつた。實は俺の方からも手紙を上げようと思つたが、如何書いて可いか解らなかつたのだよ」と、彼は苦しげに、殆ど思々し相に附け加へた。

「私も左様して頂かなければ成るまいと思つて居ました。ウルヴラ・ベトロヴナさんは私どもの關係を非常

に疑つて被坐しやいますものね。」

「うむ、疑ふなら疑はせて置くさ。」

「あの方に御心配を懸けては不可せんよ。まア私どもは終局が来るまで別れて居るんですね。」

「お前は未だ終局が来るものと思つて居るんだね？」

「えよ、私はそれを信じて居ます。」

「だが、世の中に終局の有るものなどは一つだつてないよ。」

「これだけは終局が有ります。其日が来たら私を喚んで下さい。私はお傍へ参りますよ。では、左様なら。」

「で、何んな終局が有ると云ふのかい？」と、ニコライ・フシニョヴォロドポーチは微笑した。

「貴方はお負傷を爲すつたのぢや有りませんか……血を注いだのですか」と、彼女は男の質問には答へないで訊いた。

「馬鹿な話だよ。が、何人も殺しはしないから心配するな。それに仔細は今日にも衆皆が来て話して呉れるよ。俺は何うも加減が好くない。」

「今参りますよ。結婚の披露は今日ぢやないでせうね？」と、彼女は躊躇しながら訊いた。

「今日ぢや有るまい、明日でもなからう。明後日のことは何とも言はれないね。恐らく俺達は皆死んで居るだらうよ。それが可いのさ。さ、早く歸つて呉れ、歸つて呉れ。」

「貴方はあの……氣の狂つた娘さんまで墮落させようとは爲さらないでせうね？」

「何方の狂人も墮落させはしないよ。俺が墮落させようとして居るのは眞當面な女らしいね。ダーシヤ、俺は本

當にお前を……お前の所謂「終局の日」に喚びに遣り兼ねないやうな男だよ、左様いふ卑しい可厭な人間だよ。お前は眞當面な人間で有るにも係らず、矢張来るだらうよ。何故お前はお前自身を墮落させるのだい？」

「私は最後に貴方に残されるものは私だけだらうと思つてますよ。私は又……それを待つて居ます。」

「で、若し俺が最後迄お前を喚びに遣らなかつたら、そして、お前から遠く離れて行つて仕舞つたら、如何するのだね？」

「そんな事は有る筈がない。貴方は屹度私を喚んで下さいませよ。」

「左様言ふのは非常に私を侮辱するものだ。」

「侮辱するばかりぢやないと云ふことは、貴方も御存じで被坐しやませう。」

「ぢや、兎に角私を侮辱したのだね？」

「私の言方が悪う御座いました。神様も照覽あれ、私は貴方が決して私など喚ぶ必要をお有ちに成らないやうに祈つて居るので御座います。」

「何方でも同じ事だよ。私もお前を墮落させないやうに祈らうよ。」

「何方道、貴方が私を墮落させるやうなことに成る氣遣ひは有りませんよ。それは何人よりも一番好く貴方が御存じの筈ぢや有りませんか」と、ダーリヤ・パブロヴナは斷乎として口早に言つた。「若し貴方のお傍へ行けなかつたら、私は看護婦にでも成つて病人の看護をするか、でなければ福音書を賣つて歩きますよ。私は左様決心しました。私には何うも人の妻に成ることは出来ない、又こんな家の中に生活されさうにも御座いません。そんな事は私の望みでない……貴方は皆御存じの筈です。」

「いや、俺はお前の希望など知らない。只、お前は俺に興味を有つて居るらしいのだね。恰度熟練した看護婦が他の患者と比較して、特に或病人に興味を有つやうに——それとも、墓場から墓場へ、お祈禱を上げながら彷徨つて歩く敬虔なお婆さんが、他の死骸よりも一つの死骸に一層心を惹かされるやうなものだと言つた方が可いかな。如何してお前はそんな妙な顔をして私を見るのだい？」

「貴方は御病氣が大層お悪いのですか」と、彼女は妙な具合に相手を見詰めながら、聲に同情を罩めて訊いた。「如何したら可からう！こんな人が私なしに遣つて行かれるんだつて！」

「ねえ、ダーシヤ、俺は近頃始終幽霊を見るんだよ。一昨日も一人の悪魔が橋の上に待つて居てね、レビヤードキンとマーリヤ・チモフエーヴナの二人を斬殺して、結婚の迷惑を除いた上、すつかり後始末をして遣らうと申出たんだよ。其男は手附として三留布呉れと頼んだ。が、いよく遣附ける日には千五百留布以下ぢや出来ないよ云ふやうなことを俺に呑ませたのだね。随分慾ッ張の悪魔ぢやないか。宛然商賣屋の番頭のやうだね。はッは」

「ですが、貴方は本當にそれを幽霊だと思つて被坐しやるのですか。」

「いや、決してそんな物ぢやアない。正體はなに、囚人のフェツカだよ、監獄を脱け出した泥棒だよ。が、そんな事は問題ぢやない。お前は其處で俺が如何したとお思ひだい？俺は持つてるだけ悉皆、蝦蟇口の中に有りたけ其男に呉れて遣つたよ、あの男は今時分俺が手附にそれを遣つたと信じて居るだらうかね！」

「貴方は夜間そんな者にお遭ひに成つた、其男は又そんな事を申出した。して見ると、貴方は其奴等の網にすつかり懸つて被坐しやるのだとはお思ひに成りませんか。」

「うむ、彼奴等は彼奴等のするやうに爲せて置くさ。だが、お前は何か訊きたいことが口の先迄出かよつて居る

やうだね？そりやアお前の眼で判るよ」と、彼は皮肉な、苛々した微笑を浮かべながら附け足した。

ダーシヤは顔を上つた。

「私は別段何にもお訊き申したいとは思つて居ません、何んな疑ひも——それよりは何卒静かにして居て下さいませ！」と、彼女は相手の質問を避けるやうに、妙に昂奮しながら言つた。

「ちや、お前は私が居酒屋へでもフエツカに會ひに必ず行くものと思つて居るんだね？」

「あゝ神様！」と、彼女は両手を握りながら叫んだ。「貴方は如何して私をこんなに苦しめるのです？」

「あゝ、戯談だから勘辨してお呉れな。俺は彼奴等から悪い癖をおほえたよ。ねえおい、俺は昨夜から如何いふものか笑ひたくて堪らないんだよ、何時迄も續けて笑つて居たいのだね。俺は笑つて／＼終ひには爆發しやうな氣がするよ。何うもこれは病氣の所爲だね……おゝ！阿母さんが歸つて来た。俺には馬車が立開て停まつた時、車の音で判るよ。」

ダーシヤは不意に男の手を掴んだ。

「神様が悪魔から貴方を護つて下さいますよ……私を喚んで下さい、直に私を喚んで下さいましな。」

「あゝ、俺の悪魔か！なに、一寸した汚らしい、瘰癧に罹つたやうな小鬼だよ。加之、頭に風邪を引いてな、遣り損なつてばかり居る奴さ。だが、ダーシヤ、お前は又何か言ひたいことを言はずに居るやうだね。」

彼女は切なさうな、相手を非難するやうな眼を男に向けながら、つか／＼と扉口の方へ出て行つた。

「おい！」と、彼は皮肉な、引歪められたやうな微笑を浮かべながら、背後から喚んだ。「若し……左様、若しだよ——一言で言へば、若しだよ……最う解つたらう。で、若し俺が居酒屋へ訪ねて行つたね、其後でお前を喚

んだとしたら、それでもお前は矢張来て呉れるかい。」

彼女は両手に顔を隠したまゝ、振向きもしなければ答へもせずに出て行つた。

「居酒屋へ行つた後でもあの女は来る」と、彼は一寸考へながら呟いた。そして、下卑むやうな侮蔑の表情が顔に現れた。「看護婦だ！ふむ……だが、恐らく己の必要とするのもそれだよ。」

第三章 皆人待つ

此決闘の噂は瞬く間に喧傳されたが、町の人々の上に與へた印象は、總ての人が一致してニコラーイ・フシエヴァ、ロードギーチの肩を持つた處から、特に著しいものが有つた。以前に彼の敵で有つた人々も一時に彼の味方と成つた。斯くの如く輿論の一變した理由は、主として、從來餘り自家の説を發表しないで居て、急に今大多數の人々に取つて極めて興味ある意義を一度に此事件に賦與するやうな二三の言葉をはつきりと發言した或貴婦人の力に基くので有つた。それは斯ういふ次第だ。決闘の有つた明くる日、町中の人々は州會議長の夫人の誕生日だと云ふので、舉つて其家に聚つた。ユーリヤ・ミハイロヴナもリザベータ・ニコラーエヴナを伴れて其場へ出席したといふよりは、寧ろ統監して居た。此日リザベータは輝くばかりに美しく見えたが、餘り嬉し相にして乾燥いて居たので、却て貴婦人連の疑惑を招いた。序ながら、彼女とマヴリーキイ・ニコラーエヴィチとの婚約は最早公然の事實で有つた。其晩も、威名赫々たる或退職將官の戲談交りの質問に對して、リザベータ・ニコラーエヴナははつきり自分が婚約された身で有る旨を答へた。只可訝しいのは、貴婦人連が一人も彼女の婚約を信じようとしなない。彼等は飽迄一種のローマンスを主張して、何か重大な家の秘密がある。瑞西では何か事が有つたに違ひない、甚だしいは、何かの理由でユーリヤ・ミハイロヴナも必ずそれに關係して居るに違ひないと迄想像して居た。如何いふ譯でこんな噂が、寧ろ想像がそれ程頑固に主張されるのか、又如何いふ譯でユーリヤ・ミハイロヴナがそれ程

確實に關係して居なけりや成らぬのか、一寸了解に苦しまざるを得なかつた。彼女が這入つて来た時、一座は皆待たると思ひに胸を焦しながら、眼を敏て彼女を迎へた。尤も事件が最近の出来事であるのと、それに伴ふ或事情に基いて、座中の人々も何處か遠慮しながら低い聲で話して居た。加之、官憲がそれに對して何んな處置を取つたか、未だ少しも知れて居なかつた。今迄知れた限りでは、二人ながら闘手は警察の手に煩はされなかつたらしい。例せば、ガバーノフは今朝早く、何人にも妨げられないで、ゾホーヴナに向けて家を出た。が、同時に、勿論總ての人は誰か最初に大きな聲で言出して、口火を切つて呉れぬかと身悶へしながら待つて居た。彼等は前に擧げた將官に望みを囑して居たが、果して失望しなかつた。

此將官も大きくはないが矢張地主で、俱樂部の有力な會員の一人で有つた。又、極めて風變りな氣立の人でも有つた。好く若い娘達を捕まへて、舊式の戲談を言つて調戲つた。特に大集會の席上で、他人が四邊を憚つてこそ話を話してやうな事柄を、將官の有らゆる重々しさを具へながら、大きな聲で言出すのが所好で有つた。謂はば、これが地方の社交界に於ける此人の特殊な役目でも有つた。彼は又片言交りに一種の甘へたやうな物の言方をした。恐らくは他國を旅行した露西亞人の、それとも奴隸解放令のために手痛い打撃を受けた昔日の富有な地主から、こんな癖を傳へたもので有らう。嘗てステパン・トラフィモーフは地主が根こそぎ零落すればする程、一層甘へたやうな、片言交りの物の言方をするものだと言つたことが有つた。實際、彼自身も片言雜りの甘へた物の言方をして居た。が、自身では全然それに氣が附かなかつた。

此將官は大人物らしい物の言振をした。加之、彼はガバーノフの遠い親戚で有つた。尤も仲は餘り好くない。或事件に關して訴訟まで起して居た。其上、彼は若い時自分でも二度程決闘した。其一度のためには官位を褫はれ

て高加索へ送られたことも有つた。で、ブルヴァー・ペトロヴァが病氣と稱して家に閉籠つた後、昨日も今日も外出したと云ふやうな話が持出された。尤も直接彼女に關したことはない、スタフローギン家で飼養する四匹の栗毛の馬が揃ひも揃つて立派な逸物だと云ふやうな話で有つた。將官は不意に其日馬上で若いスタフローギンと出會つたと言出した……皆一時に黙つて仕舞つた。將官は少時唇を咬んで、指の間に金の喫煙草入れを弄んで居たが、やがて得意げに口を開いた。

「僕は數年前に此處に居なかつたのが残念だよ……僕がカールスバッドに居た時分だがね……ふむ！僕は其時分いろんな風聞を聞いたあの若者に大層興味を持つてね。ふむ！で、何かい、其男が狂人だといふのは眞實かね。或男がそんな事を言つてたよ。處で、不意に其若者が此處で大勢従妹などの居る前で、或學生に殴られて、卓子の下へ潛つて逃出したといふ話を聞いたのだがね。すると、昨日は又ステバーン・ヴィソツキイからスタフローギンがガバーノフと決闘したといふやうな話を聞いた。それも單にあの馬鹿者から死れるために、其男の筒先に立つと云ふやうな華々しい目的からだと言ふぢやないか。ふむ！眞個二十年代の近衛士官と同じ遣方だね。此町ぢや誰と往來して居るのですかい。」

將官は返辭を待ち設けるやうな態度で口を噤んだ。いよく一座の待ちに待つた話の口火は開かれた。

「そりやア何でもないぢや有りませんか」と、ユリヤ・ミハイロヴァは一座の眼が號令で掛けられたやうに、皆彼女の方へ向いた程苛々した聲を張上げながら叫んだ。「スタフローギンがガバーノフと決闘して學生を眼中に置かなかつたとて、そんなに不思議でせうかね。あの方も元々自分の宅の奴隷で有つた男に挑戦は出来ませんよ。」成程道理至極な言葉だ。簡單明瞭な考へで有るが、それが其時迄何人の頭にも泛ばなかつたのだ。で、此一言は

非常な効果を有つた。有らゆる陰口や有らゆる無駄話は影を潛めて、他の意義が発見された。凡ての人が誤つて判斷して居た新しい人物が出現した。其標幟の高邁な點に於て、殆ど理想的ともいふべき人物で有る。一學生のために、即ち教育ある男のために手痛い侮辱を受けながら、相手が嘗て自分の奴隷で有つたと云ふの故を以て、彼は其襲撃を無視した。社會は彼を誇り彼の陰口を利いた。世の淺薄な人々は顔を殴られた人を視るに侮蔑の眼を以てした。が、彼は自家の持する最高標幟の水準に達しない社會の輿論なるものを無視した。

「で、如何だい、イブリン・アレキサンドロヴィチ、君や僕等は其間此處に坐つて、あの正當な標幟を彼是論じて來たぢやないか」と、一人の年を老つた俱樂部の會員は自ら責むる心熱に動かされながら、最一人の會員に向つて切出した。

「左様だ、ビョートル・ミハイロヴィチ、眞個左様だ」と、最一人の會員も熱心に同意した。「何を言ふにも青年時代のことだね。」

「何も青年時代が問題ぢやないでせう」と、三番目の會員が口を挟んだ。「青年時代とは別問題ですよ。あの男は單に大立物で、青年時代の一人ではない。其處に眼を着けなくちや不可ませんよ。」

「左様、それが吾々の求めて居るものですよ。眞個新人物は乏しく成りましたからね。」
勿論、此の新人物が「一點の疑義を挿む餘地もない真正銘の貴族」として彼自身を證據立てた外に、此州の一番富有な地主で有るといふことが肝要な點で有るのだ——それでこそ、彼の身に關した會話には人も熱中して來るのだ。

「あの男は嘗に學生に對する挑戦を避けたばかりぢや有りませんぜ。兩手を背後に廻して居たのですよ、特にそ

れを御注意下さい、閣下」と、或男が指摘した。

「又其男を法廷へ引出さうともしなかつた」と、最一人の男が附言した。「法律上其學生は貴族に與へた個人的侮辱に對して十五留布の罰金に處せらるべきで有るにも係らずですな、へ、へ、へ！」

「いや、私は法廷の秘密を素ッば抜いてお目に懸けますがね」と、第三の男は狂人のやうに昂奮しながら言つた。「何人でも泥棒するか騙許をして罰せられ相に成つたら、先づ捕まへられない間に自宅へ逃げて歸るんですね。それから母親を殺すんですよ。左様すりや、何んな罪を犯しても無罪放免で、貴婦人達がブラットフォームから麻の半巾を振つて呉れませアね。眞個其通りですよ。」

「其通りだ。眞個其通りだ！」

必然の結果として、いろんな逸話が持出された。即ちニコライ・フシエヴォロードギーチのK伯爵に對する親密な關係が話題に上つた。最近の改革に對するK伯爵の嚴格で獨立した態度は、近頃稍下火に成つたやうでも有るが、其の目覺しい政治上の活動と共に世に知れ渡つて居た。で、今不意にニコライ・フシエヴォロードギーチと伯爵の娘の一人との間に婚約が成立して居ると云ふやうな評判が立つた。尤もそんな推定に何等の根據が有るのではない。瑞西に於けるリザベータ・ニコライエヴナとの間の或奇怪な情事に至つては、婦人連すらそれに關する噂を止めた。それにドロズドフ家でも、近頃成つて一度廢したお禮廻りを一巡済ました。で、今や總ての人は安心してリザベータ・ニコライエヴナを病的な神經を見せびらかした極めて平凡な娘と考へて居た。ニコライ・フシエヴォロードギーチが到着した日に彼女が氣絶したのも、今ではあの學生の粗暴な振舞ひを見ての恐怖に基づくものと解釋された。曩には餘り幻想的な色彩を添へただけに、今度は又飽迄散文的に説明しようとした。一度噂に上つた

跛の女に關しては、皆けろりと忘れて仕舞つて、其女のことを言出すさへ恥ぢて居た。偶々言出しても、「世の中に跛の娘は百人でも有るぢやないか」といふ一言の下に葬むられた。ニコライ・フシエヴォロードギーチの母親に對する敬虔の念も誇大して語られた。さまざまな徳能が彼の中に見出された。彼が獨逸の大學で費した四箇年の間に修得した學殖に就いても、多大の讚辭が加へられた。ガバーノフの行爲は「敵と味方の見分さへ出来ない、全然手練を缺いたものと宣言された。ユーリヤ・ミハイロヴナの鋭い洞觀力は猶豫なく承認された。

で、いよくスタフロロギンが社交界に現はれた時は、總ての人から森嚴な心持で迎へられた。彼の上に膠着した有らゆる眼の中には、明々と熱心な期待が讀まれた。が、ニコライ・フシエヴォロードギーチは只むつとりとして黙つて居た。勿論、其方が彌勒の世まで饒舌り續けたよりも總ての人を満足させた。一言にして言へば、彼は成功した、流行兒と成つた。それとも知らないで、又願はないで、社交界の風潮を導いた。彼は交際して面白い友達ではない。が、「苦勞して來た人といふものは普通の人間とは違ふ、何か深く考へて居ることが有るのだ。」それが又彼の辯解にも成つた。四年前には、あれ程嫌はれた彼の傲慢な、近づき難いやうな處さへ、今は氣に入つて敬愛された——中には眞似さへされた。

ブルプーラ・ペトロヴナは勝鬨を上げた。彼女がリザベータ・ニコライエヴナに對する夢の碎けたことを何れだけ悲しんだか、私は知らない。勿論家の矜りが彼女のそれに打克つ補けとは成つた。只一つ可訝しいことには、ブルプーラ・ペトロヴナは不意にニコライ・フシエヴォロードギーチが實際K伯爵の宅で「選擇をした」とも信するやうに成つた。特に最も怪訝に堪へないのは、彼女が他の人々と一向異なる出所に基く風評から、それを信するに到つたことだ。彼女は直接ニコライ・フシエヴォロードギーチに訊いて見ることを恐れて居た。尤も、二

三度は彼女も狡猾な上機嫌の體で、彼が自分に對して餘り別け隔てが有り過ぎると非難して見ずには居られなかつた。ニコライ・フシニヴァ・ロードギーチは微笑したまふ、矢張黙つて居た。沈黙は同意の符號として取られた。が、同時に彼女はあの跛の女を忘れることが出来なかつた。あの女が石の様に彼女の胸に宿へて居た。寐て居ても氣に懸れば、不快な夢にも魘はれた。それが皆K伯爵の令嬢達とちやんほんに成つて居るのだから可訝しい。が、それに就いては、何れ又後で話すことにする。勿論、ブルヴァー・ペトロヴァは再び社交界で非常な敬意と謙讓とで遇せられるやうに成つた。が、彼女は殆どそれを利用してはせず、外出することも罕れで有つた。が、彼女も知事公の夫人には一度儀式張つた訪問をした。勿論、あの會長邸の夜會に於けるユーリヤ・ミハイロヴァナの言葉を聞いて悦に入つた點では、彼女に上越すものはなかつた。あの言葉は彼女の胸から壓石を取除けた、不幸な日曜日以來彼女を苦しめて居た數々の悩みを一時に輕めて遣つた。

「私はあの女を誤解して居た」と、彼女は一人言つた。そして、獨特な衝動的發作に驅られて、ユーリヤ・ミハイロヴァナに向つても、正直に「私は貴方にお禮を言ひに来た」と言つて退けた。ユーリヤ・ミハイロヴァナの方でも大層媚びられた。が、例に依つて威嚴を保つたまゝ應待した。近來彼女は大分見識を高くした。實際、餘りに高くしたと言つても可い位だ。例へば、彼女は談話の間に、自分は學者又は指導者として一度もステバーン・トラフィ・モーギーチの名を耳にしたことがないと言つた。

「勿論息子の方のヴェルホーゼンスキイなら存じて居ますよ。又尊敬もして居ます。あの人も稍不謹慎な處は有りますが、何しろ未だ年が若う御座いますからね。が、學識は確乎して居ますよ。兎に角、あの人は時代後れな、舊式な批評家ではない。」ブルヴァー・ペトロヴァは速く、ステバーン・トラフィ・モーギーチは決して批評家で

はない、それ處か一生を彼女の家で送つたと注意した。彼は只若い頃の經歷から有名に成つたので、餘りに好く全世界に名を知られて居るのだ。近頃は又西班牙の歴史に於ける研究で其名を誦はれて居る。最近には近世獨逸諸大學の地位に就いて論じようとして居る。彼女の信する處に據れば、ドレスデンの聖母に就いても何か書かうとして居るのだ。これを要するに、ブルヴァー・ペトロヴァは幾許出してもステバーン・トラフィ・モーギーチをユーリヤ・ミハイロヴァナに譲渡しようとは思はなかつた。

「ドレスデンの聖母？ シクスツス法王の聖母のことぢや有りませんか。ねえ、ブルヴァー・ペトロヴァさん、私はあの畫の前に二時間も立ち盡しました。そして、其揚句失望して歸りました。私はあの畫から何物をも觀取することが出来ない、眞個茫然として居ましたよ。カルマーチノフも亦あれは解らないと言つてました。今ぢやあの畫の解るものは殆ど有りませぬ、露西亞人でも、英吉利人でも。あの畫の名稱は昔前時代の物語ですよ。」

「ぢや、流行が一變したのですか。」

「私の考へぢや、私どもは何うしても青年時代を輕蔑しては成りませぬ。一部の人は彼等が共産論者だと云ふので輕蔑しますがね、私の意見では、私どもは寧ろ彼等の價値を認めて、今迄の様に辛く當つては成るまいと思ひますよ。私は今何でも讀んで居ますがね、新聞でも、評論でも、自然科學でも——畢竟、人は何處に自分が住んで居るか、何人を相手に生きて居るかを知らなや成るまいと思ふからです。人は生涯自家の空想の雲の峰にばかりは生きて居られない。私はこんな結論に來た、又それを主義としても採用して居ます。即ち私どもは青年を保護して、彼等を川の縁から救つて遣らなや成らないと。ねえ、ブルヴァー・ペトロヴァさん、幸ひに上流社會を成して居る私どもが、私どもの好意と善良な影響に依つて、あの老人どもの頑迷な主張のために將に深淵の中へ追

込まれようとして居る青年を引留めて遣る外に、彼等を救つて遣るものは有りませんよ。だが、私は何を言はうとしたのでせうね。左様々々、ステバーン・トラフィモージェーチのお話を承はつて、私は大變嬉しいのですよ。と云ふのは、不圖こんな事を想ひ附いたのですね、あの方も私どもの文學會へ出て下さると可いと——貴方も最う御存じで被坐しやいませう。私は此州の憐れな保母どものために、皆さん方の寄附を仰いで、一日の慰安會を開かうと思つて居るので御座いますよ。左様いふ會は最う露西亞中到處に御座います。此地方だけでも六つは御座いませう。それに電話局へ勤めて居る女が二人と、専門學校へ通つて居る女が二人有りましてね。其他の者でも經費さへ有れば皆喜んで加はりますよ。プルヴーラ・ペトロヴナさん、女の運命といふものは眞個怖ろしいもので御座いますよ。それからして、目下大學の制度が問題に成つて居ますがね、帝國議會でも一度それに就いて集會が有つた位でした。私どもの露西亞は眞個面白い國でしてね、何人でも所好な事が出来ますよ。尤も、それだから繰返して言ひますが、只上流社會の好意と直接熱心な同情とに依つて、此の一般的原理を正しい道の上に導いて行くことが出来るので御座いますかね。處が、残念なことには、私どもの中にも高潔な人格といふものは滅多に有るもので御座いませんよ。勿論幾許かは有ります。が、それも彼方此方に散らばつて居るので御座いますね。私どもをして一致せしめよ、そしてら屹度強く成るでせう。一口に言へば、私は先づ文學會を開いて、それから軽い晝食、それから少時休憩して、晩には舞踏會を開きたいと思つて居るので御座いますよ。晩の會は最初活人畫で始めたいとも思ひましたがね、左様すると大分費用も嵩みませう。ですから、まア公衆の娛樂には、有名な文學の各派を代表するやうな假面を被つて、それ／＼假裝した四班舞踏曲を二番加へましたよ。此のユーモラスな趣向はカルマーデノフの暗示に據つたのですがね。ええ、あの方は随分私を補けて下さいましたよ。あの方は又私どものために、最

後にお書きに成つて、未だ何人も知らないお作を朗讀して下さいと云ふんですよ。あの方は最う筆を捨てよ、此後は一切お書きに成らない相ですからね。其論文があの方の公衆に對する告別の辭に成るかも知れないのですよ。「Merci (多謝)」といふ可愛らしい短篇ですがね。表題は佛蘭西語です。其方が一層滑稽で、又趣味も有ると仰有るのですよ。私も左様思ひますの。實は私が附けて上げたのですがね。ステバーン・トラフィモージェーチさんも短かいものなら、何か私どものために朗讀して下さいと可いと思ひますよ……餘り學者振つたものでは困りますがね。ピョートル・ステバーノギーチ其他の人も何か朗讀するだらうと思ひますよ。あの方がお宅へ上つて順序をお話し申すでせうよ。いや、お待ちなさい、寧ろ私が自身でそれを持參致しませう。」

「何卒寄附金名簿に私の名もお載せ下さい。私はステバーン・トラフィモージェーチにも話して、承知して貰ふやうに好く頼みますよ。」

プルヴーラ・ペトロヴナはすっかり魅せられて自宅へ歸つた。彼女は萬難を排してユーリヤ・ミハイロヴナのために闘はうと決心して居た。如何いふ理由か、ステバーン・トラフィモージェーチに對しては最うすっかり腹を立てて居た。可哀相に、彼は何にも知らずに自宅に坐つて居た。

「私はあの女を愛して居ますよ。如何して今迄あの女を誤解して居たか、自分ながら解りませぬね」と、彼女はニコライ・フシエヴォロードギーチと、其晩立寄つたピョートル・ステバーノギーチとに向つて言つた。

「ですが、貴方は矢張あの老人と仲直りをして下さらなきや困りますよ」と、ピョートル・ステバーノギーチは物知らかに言つた。「あの人はすっかり萎けて居ますよ。宛然貴方のために社會から追放されたやうな鹽梅です。ね。昨日あの人は貴方の馬車に出會つて、お叩頭をしたのに、貴方は側を向かれたさうな。ねえ、私どもはあの人を引

1257720
873
9.5

張り出さうとして居るのですよ。私はあの人の目算を着けて居るのです。なに、あの人だつて未だ役に立つことも有りますからね。」

「あゝ、あの人も何か朗讀する筈ですよ。」

「私はそのみを言つてるのぢやない。で、今日もあの人の許へ一寸立寄らうかと思つて居ますがね。私から其事を言ひませうか。」

「何卒。ですがね、貴方は何んな風に計らう積りですか」と、彼女は未だ決心が着かないやうに言つた。「私は自分で一度好く談話をして見ようと思つて居たのですよ。で、時間と場所とを定めようと思つて居たのですがね。」

「なに、時間など定める必要が有りますものか。私が簡単に話して置きませうよ。」

「何卒左様して下さい。ですが、矢張私の方で時間を極めませうよ。乾度左様言つて下さいな。」

ビョートル・ステバーノギーチは齒を噛み鳴らしながら駈出すやうにして出て行つた。實際、私の記憶に有る範圍に於て、彼は其頃特に憤りッほい氣分に成つて居て、何人に對してもつけくくと打突かつて行つた。不思議なことには、それを又何人も宥して居た。彼は普通の見地から視らるべき男でないと云ふことが、一般に承認されて居たのだ。

序ながら言へば、彼はニコライ・フシエヴォロードギーチの決闘に對して、非常に立腹したやうな態度を取つた。決闘は彼の全然知らない間に起つた。他人からそれを聞いた時、彼は見る／＼眞蒼に成つて腹を立てた。恐らく彼は自分の虚榮心を傷つけられたので有らう。彼は次の日何人でもそれを知つて居るやうに成つてから始めて聞いたのだ。

「君はそんな決闘なぞする権利はないのだ、解つてるだらう」と、彼は五日後俱樂部でひよつこり出會つた時、スタフロロギンの耳に囁いた。ビョートル・ステバーノギーチは毎日の様にブルヴァ・ベトロローヴァナの宅を訪れながら、二人が五日の間に一度も會はなかつたと云ふのも又珍らしい話で有つた。

ニコライ・フシエヴォロードギーチは何を言はれたか、それさへ了解しないやうに、ほんやりした顔附で黙つて相手の顔を見返したまよ、さつさと歩いて行つた。彼は倶楽部の大客室を横切つて、茶葉室へ這入らうとして居た。

「君は又シャトーフにも會ひに行つた相だね……マリーリャ・チモフェーヴナとの結婚を知らせようと思つたのだらう」と、ビョートル・ステバーノギーチは背後から追掛けながら呟いた。そして、何を爲てるか自分でも知らないやうに、相手の肩を掴んだ。

ニコライ・フシエヴォロードギーチは相手の手を振落して、威嚇するやうに顔を燈めながら、急に振返つた。ビョートル・ステバーノギーチは妙な、引伸ばしたやうな微笑を漏らしながら、相手を見返した。それがほんの一瞬間続いた。ニコライ・フシエヴォロードギーチは一人歩み去つた。

二

ビョートル・ステバーノギーチはブルヴァ・ベトロローヴァナの許から眞直にあの「老人」の寓居へ急いだ。彼は何日ぞや自分に加へられた侮辱を複雑しようとして、單に忌々しさからそんなに急いだのだ。何んな侮辱だか當時は私も知らなかつた。が、事實は斯うだ。先週の火曜日に於ける二人が最後の會見に於て、ステバーン・トラフイ

モーギーチは自分から言出した議論で有るにも拘らず、到頭鞭を擧げてビョートル・ステバーノギーチを追出した。彼は當時それを私に隠して居た。が、今ビョートル・ステバーノギーチが如何にも企畫して人を見下けるやうな、例の齒ざしりをして、氣味の悪い眼を隅々に光らせながら駈込んで来た時、ステバーン・トラフィモーギーチは窃と私に合圖をして此室を去らないやうに頼んだ。斯くの如くにして、今度は私も二人の會話を始めから終ひ迄聞いたので、二人の關係もすつかり呑込めた。

ステバーン・トラフィモーギーチは長椅子に身體を伸しながら坐つて居た。彼は火曜日以來瘠せて顔色もいやに黄色く成つた。ビョートル・ステバーノギーチは極めて狎々しい態度で、父親に對する遠慮が許すよりも遙に廣い場所を長椅子の上に占めながら、彼と並んでどつかと腰を卸した。ステバーン・トラフィモーギーチは黙つて、應揚に側へ片寄つた。

卓子の上には一冊の本が開いたまゝ載つて居た。それは「サー如何するのだ？」と題する小説で有つた。あゝ、私は又此處で私の友達の妙な弱點を白状しなければ成らない。彼が草薙を出て、一度最後の戦ひを試みなげりや成らぬといふ幻想は、彼の欺かれた想像の上によく固く成つて居た。私は彼がこんな小説を購つて、一生懸命にそれを研究して居るのも、敵と避け難い衝突に來た時、豫め彼等の戦術や論法を彼等自身の「問答法」から知つて置いて、それに依つて彼女の眼の前に彼等を見事に打破つて見たいといふ、單にそれだけの爲だと推量した。が、其本は何の位彼を苦しめたことであらう！彼は時々絶望したやうにそれを投げ遣つて、飛び上りながら、室の中を彼方此方と狂氣のやうに歩き廻つた。

「僕も著者の根本觀念が眞理だといふことは承認する」と、彼は熱に泛かされたやうに私に言つた。「だが、それだから一層怖ろしいんだよ。これは僕等の觀念だ、精密に僕等の觀念だ。僕等は種子を蒔いて、育て、準備までしたのだ。實際、僕等から言へば、これが如何して新しいなぞと言へるんだい？が、如何だ！皆捻ぢ歪めて、手足を断つて表現して有るよ」と、彼は指で本を敲きながら絶叫した。「こんな物が僕等の求めて居た結論かい。何人がこんな物の中に本來の觀念を理解することが出来るものか。」

「や、勉強して居るのですか」と、ビョートル・ステバーノギーチは卓子の上の本を取上げて、表題を読みながら、くすくす笑つた。「時間は切迫して居ますぞ。何なら私が最つと好い本を持つて來て上げませうか。」

ステバーン・トラフィモーギーチは再び威容を繕つて沈黙した。私は隅の長椅子の上に腰掛けて居た。

ビョートル・ステバーノギーチは直に遣つて來た理由を説明した。ステバーン・トラフィモーギーチは愕れて蹣跚としながら、不精無精に聽いて居た。何とも言へない憤怒の情も籠つて居た。

「で、ユーリヤ・ミハイロヴナは私があの女のために朗讀に行くものと思つて居るのだね！」

「なに、あの連中はそんなに貴方を必要として居る譯ちや有りませんよ。それ處ちやない、只、ブルヴァーラ・ペトローヴナに取入らうとして、貴方にも出て貰ひたいと言つたばかりでさ。が、勿論貴方がそれを拒んぢや不可ませんよ。貴方は又進んで出て見たいのだからうとは思つてますがね」と、彼は又齒齧みをしながら附け足した。「貴方方時代後れの人間といふものは、皆恐ろしく鼻息の暴いものだ。併し私は言つて置きますがね、餘り長たらしくないやうに氣を付けて下さいよ。何を想ひ着きました？え、西班牙の歴史ですか。何でも可いから、三日前に私に一度見せるやうに爲さい。左様しないと、貴方は恐らく私達を皆睡らせて仕舞ふでせうからね。」

此突撃の連てた、餘りに露骨な手暴さ加減は明かに前以て考へられたものらしい。彼はステバーン・トラフィモ

「ギーチに對しては、これ以外に最つと優しい言葉で物を言ふことが出来ないやうな顔をして居た。ステバイン・トラフィモーギーチは斷乎として、飽迄此侮辱を無視しようとした。が、同時に言葉の内容は層一層彼を昂奮させた。

「で、あの女は、あの女自らお前を使者にして、こんな事を私に言はせるのだね」と、彼は眞着に成つて訊いた。「え、左様ですね、あの女は相互の説明のために時と場所とを指定しようと言つて居るんですよ——貴方の感傷主義の名残りですかね。二十年の間、貴方はあの女に詔媚を賣つて、あの女に飛んだ物笑ひな癖を着けて仕舞ひました。が、御心配には及びませんよ、今では全然違つて居ますからね。あの女は始終今始めて「眼が開き掛けた」と言つてるんですよ。私はいろ／＼話をして、貴方方の此友情は互に泥濘を投げ合つて居たに過ぎないと言つて遣りましたよ。あの女も私にいろんな話をしました、ねえ坊や、ふゝ！貴方は永の年月の間何て馬鹿な阿諛漢の役を演じて居たのですよ。私は眞個貴方のために顔が赭く成りましたぞ。」

「私が阿諛者の役を演ずる？」と、ステバイン・トラフィモーギーチは自ら制し切れないで叫んだ。

「最つと悪いのです、貴方は寄食者でしたよ、即ち金子が欲しい癖に働くことの嫌ひな任意的寄食者でしたよ。あの女も今はそれを悉く理解して居ます。兎に角、あの女が貴方に就いて私に話したことは、そりやア怖ろしいものでした。坊や、私は貴方があの女に送つた手紙を見て笑ひましたよ。馬鹿けても居れば、第一卑劣です。併し貴方方老人といふものは墮落したものです、眞個墮落したものだ！元來施與には何か知ら墮落が伴ふものですがね——貴方は其の好適例ですよ。」

「あの女がお前に手紙を見せたのか。」

「え、悉皆。尤も、誰だつてあれを皆讀んで仕舞ふことは出来ませんがね。ふゝ、貴方も又何れだけ紙を費したものです。何でも二千本以上は有つたやうですよ。處でだね、おい茶目さん、あの女も一度は貴方と結婚しようと思つたことも有るやうに思ふが、御存じですか。貴方は馬鹿な事をして、折角向いて来た運を取外したのさ。勿論これは貴方の立場に成つて言つて居るのですよ。兎に角、「他人の罪惡」を蔽はむとして、戯談に——金子のために、愚人のやうな結婚をしかけた今よりやすつと好うがすからねえ。」

「金子のためだ！あの女が、あの女が金子のためだと言つた！」と、ステバイン・トラフィモーギーチは苦し相に呻いた。

「ちや、何ですか、勿論私は貴方のために辯じた。それが又貴方の唯一の防禦線ですよ。あの女も貴方が他の人同様に金子を必要とする事は理解しています——其見地から貴方は恐らく正しかつた。私はあの女に向つて、二の倍が四である程明瞭に、そりやア利益交換だと説明して置いた。あの女は資本主で、貴方はあの女に仕へた感傷的な道化者に過ぎないのだ。貴方のためには、あの女も山羊のやうに搾り取られたが、金子のことぢや憤つて居ない。あの女は只二十年間貴方に騙されて居たのが、貴方の高尚な精神に就いて、永い間自分を馬鹿にされて居たのが口惜しいと言ふのですよ。あの女は決して自分が馬鹿にされて居たとは認めない、それだから一層捕まへ易いのです。それよりも、私には如何しても貴方が一度は勘定の日が来るといふことを知らずに居たのが解らない。兎に角、貴方も少許は物が判つて居るのですからね。私は昨日あの女に貴方を養老院へ入れるやうに勸めて置きました。御安心なさい、體裁の好い方ですよ。何も屈辱といふ程のことは有りませんやね。あの女も屹度左様するでせうよ。時に貴方は三週間前私に呉れた最後の手紙を記憶して居ますか。」

「あれもあの女に見せたのか」と、ステバーン・トラフィモーギーチは恐怖の餘り飛び上りながら叫んだ。

「又、如何して見せないのです？ 第一番に見せましたよ。あの女が貴方の才能を嫉んで、貴方を利用して居ると書いて寄越された、あれでさ。あゝ、左様だ！ 他人の罪惡」云々もあの中に有りましたね。貴方も餘り自惚が強過ぎますよ、ねえ坊や。私は本當に笑つて仕舞つた。貴方の手紙は馬鹿に長たらしいからね。眞個怖ろしい文體を有つてお坐だよ。私は時々全く讀まずに置く、今日迄開かず有るのも一本有りますよ。明日にも送つて上げませう。併しあれだ、貴方のあの手紙ばかりは眞個見物ですよ。私は笑つた、眞個腹の筋を振らされた！

「うぬ、獸物め！」と、ステバーン・トラフィモーギーチは呻いた。

「なにを馬鹿な、貴方とは話が出来ませんよ。貴方は又何日ぞやの木曜日やうに面を膨らして來ましたね。」

ステバーン・トラフィモーギーチは威嚇するやうに立上つた。

「お前はそんな言葉でしか私に物が言へないのか。」

「何んな言葉です 簡單で明瞭ぢや有りませんか。」

「一體、お前は私の兒か如何ぢや？」

「それは貴方が一番好く御存じですよ。尤も父親は斯ういふ問題に懸けちや好く疑惑を抱くものだ相ですね。」

「黙れ！ 黙れ！」と、ステバーン・トラフィモーギーチは身體中頭をながら叫んだ。

「そら御覽なさい、貴方は先達ての木曜日やうに、私を罵つて、叫喚して居るぢや有りませんか。貴方は又杖を振上げようとしたね。ですが、お聞きなさい。私はあの書類を目附けましたよ。物所好から一晩中かよつて革靴を引くり反して見たのですがね。成程別に正確な物は見當らなかつたから、それだけは御安心なさい。只阿母

さんが其波蘭人に遣つた手紙が有りましたよ。が、あの女の性格から判断して見るに……」

「今一言言つて見ろ、貴様の頬邊を打殿つて遣るぞ。」

「あれだから御覽なさい！」と、ビョートル・ステバーノギーチは不意に私へ話掛けるやうにしながら言つた。「先週の木曜日以來、二人の間はこんな鹽梅でしたよ。兎に角、今度は貴方が傍に居て、二人を判断して下さるから私も安心だ。第一に先づ事實ですがね、此人は私が母親のことをこんな風に言ふからと言つて非難しますが、こんな風にしたのは抑も此人ぢや有りませんか。彼得斯堡で、未だ私が高等學校に居る頃でしたがね、此人は夜間二度も起しに來て、私を抱擁して、女のやうに泣くんですよ。それで何を私に言つたと想ひます？ 矢張私の母親に關する同じお耻かしい話ですよ。私が始めてそんな話を聞いたのは、此人からでした。」

「おゝ、俺は最つと高尚な意味でそれを話したのだ！ お前にはそれが解らない！ お前には何にも、何にも解らない」

「ですが、そりやア私が言ふよりも、貴方の言つた方が卑劣ですよ、卑劣ですよ。それを腹へお入れなさい。私にはまア何方でも同じ事ですからね。私は貴方の立場に成つて言つて居るのでですよ。私の立場に就いちや心配して下さいますな。私は別段阿母さんを責める氣はない。貴方なら貴方で可いし、波蘭人なら波蘭人でも可い。何方にしても私には同じ事ですからね。貴方と阿母さんとが伯林で何んな馬鹿な目に會つたからと言つて、私に罪は有りませんよ。又貴方にあれ以上の處置が出来ますかい。兎に角、貴方は面白い人達だ。で、私が貴方の息子で有らうが、なからうが、貴方に關係が有りますかい。まア聽いて下さい」と、彼は再び私の方へ向直りながら續けた。「此人は生涯私のために一錢だつて使つたことは有りませんよ。私が十六歳に成る迄は、全然私を知りませんでした。」

其後、此處で私の所有を盗んで置きながら、一生私のために心を痛めたなどと叫喚いて、私の前で俳優のやうな真似をするぢやア有りませんか。私はワルワラ・ベトロ・ヴァナでないから、氣を附けなさい！」

彼は帽子を取つて立上つた。
「俺は今後お前を呪つて遣るよ」と、ステバーン・トラフイ・モーギーチは死人の様に眞蒼に成つて、相手の頭の上

に手を伸ばした。
「おゝ、人間も馬鹿に成れば方圖がないものですな」と、ビョートル・ステバーノギーチは實際驚いて叫んだ。ちや、左様なら、お爺さん、私は最う二度と貴方に會ひには來ませんからね。前以て私に論文を送つて寄越しなさい、それだけは忘れちや不可せんよ。まア出来るだけ馬鹿な事を書かぬやうに爲さい、事實、事實、最一つ事實ですよ。何よりも先づ短くなくちや不可ない。左様なら。」

三

ビョートル・ステバーノギーチがこんな風に父親を取扱つたに就いては、確に何か腹に企圖が有つたのだ。私の考へでは、彼は斯うして老人を全く絶望に陥らしめて、一種の物笑ひにして仕舞はうとしたのだ。それが彼のお腹に有る途方もない遠方の目的に副ふものらしい。それに就いては、何れお話をする機会も有らう。此種の計畫やら畫策やらが當時彼の心中にうちや／＼して居た。勿論、其の殆ど總てが奇怪至極な性質のもので有つた。彼はステバーン・トラフイ・モーギーチの外に、最一人犠牲にする積りで着々歩を進めて居た。實際、其後判つた處に據るも、彼の犠牲は數に於て決して少くなかつた。が、此犠牲だけは特に眼を着けて置いたので、即ちフォン・レムブケ氏

其人で有つた。

アンドレイ・アントノギーチ・フォン・レムブケ氏は、露西亞の國勢調査に據れば數十萬の人口を有する上に、其全體を通じて知らず／＼嚴密な編制を遂げた團結を成して居る、彼の自然の恩寵の極めて深い人種に屬して居た。勿論、此團結は計畫されたものでも、豫め考へられたものでもない。が、單に此人種の全員に依つて、如何なる時、如何なる場所、如何なる事情の下にも、扶け扶けられる相互の支持の中に存する道德的義務の一つとして、言葉もなければ約束もなく、天然自然に全人種に互つて成立して居るので有る。アンドレイ・アントノギーチは又富と門地とを有する家々の子弟に依つてのみ占められた、露西亞の高い教育機關の一つで教育せられる名譽を荷つた。一通り學業を卒へると、殆ど同時に其學生は政府の各省に於ける比較的高い地位に任命される。アントレイ・アントノギーチは父方の祖父には工兵大佐、母方の祖父には麴包屋を有つて居た。が、彼は兎に角此貴族的な學校へ這入つて、他の朋輩とも同等な待遇を受けた。友達としては愉快な質で、學業は稍劣つた居たが、始終何人にも好かれて居た。で、上級の朋輩が——主に露西亞人だが——艱かしい時事問題などを論じて、學校を出さへすれば、一舉にして世界の問題を定めようとする構へて居る間に、アントレイ・アントノギーチだけは矢張無邪氣な學生の興味に没頭して居た。實際、彼は極めて單純な性質の惡戯で——大抵は稍粗野でも有つたが——朋輩を懐しませて居た。又それを一生の目的として居るやうにも見えた。或時、彼は教師の質問を受けながら、朋輩や先生を笑はせようとして、わざと吃驚するやうな、變挺來な遣方で鼻をひつた。或時は又寢室で何か無邪氣な活人畫を演つて見せながら、一同の喝采を博した。又は鼻で巧妙に「フラ・デアヴァーロ」の序樂を吹奏したりした。彼は又わざとわざと汚い衣服を着て來るので有名に成つた。如何いふ理由かして、彼はそれを洒落れた風だと考へて居た。又卒

業する前に露西亞の詩を作り出した。
 彼も本國の言葉に就いては、露西亞に於ける同人種の多くと同じ様に、只非文法的な知識を有するに止まつた。此の詩を作る傾向は彼を一人の沈鬱な學生に惹附けた。其學生は露西亞の貧乏な將官の子で、學校の中でも文學に大きな將來を有つやうに噂されて居た。そして、前者を庇護して遣つた。が、學校を出て三年後、露西亞文學のために官吏としての榮達を抛つて、其結果秋も闖けたのに軽い夏の外套一枚引張つて、寒さに齒をがつかう言はせながら、破れ靴を穿いて歩き廻つて居た例の沈鬱な學生は、一日アニチゴーフの橋の上で、以前の被保護者なる、當時學生どもの喚び習はせに從へば、「レムブカ」と出會つた。で、何んな光景で有つたらう。彼は最初相手を認めることが出来ないで、只目を睜つて立停まつた。彼の前には驚くべく好く手入れをした赤ちやけた色の頬鬚を蓄へて、鼻眼鏡を懸けて、漆塗の靴を穿いて、眞新しの手套を穿めて、シャーマア洋服店仕立の長外套を着込んだ、批點の打所のない服装をした若い紳士が立つて居た。レムブケは舊い學友に對して懇切で有つた。住所を教へて、晩にでも會ひに来て呉れと頼んだ。彼は最早「レムブカ」ではない、「フォン・レムブケ」で有ることも知れた。學友は彼に會ひに来た。が、恐らくは單に悪意から遣つて来たものらしい。赤い絨氈で——それも稍汚れて、決して生粹な物ではなかつたが——蔽はれた階段の上で、彼は門番に會つて姓名を訊かれた。呼鈴が二階で聲高に鳴つた。が、訪客の豫期したやうな豪華な室へは通されないので、レムブケは薄暗いやうな、廢類の觀有る、小さな隅の室に坐つて居た。其室は大きな暗綠色の帷帳で二つに仕切られて、高く狭い窓に同じく暗綠色の日蔽を被けながら、室の道具も古びては居るが、極めて坐心地よく飾られて居た。フォン・レムブケは自分の保護者で、遠い親戚に當る將官の家に寄寓して居た。彼は懇切に客を遇して、眞面目で慇懃を極めた。二人は又序ながら文學の話もした。

白の襟飾をした召使は二人に淡いお茶と、小さな圓いビスケットとを持つて来た。學友は悪意から故とセルツェル礦水を注文した。永い間かよつて、それを持つて来た。レムブケは二度も其從僕を喚んで用を吩咐けたのが大分氣に成るらしかつた。が、自分の方から訪客に夕食は如何だと伺めた。そして、相手が辭退して歸つた時、ほとと安心した容子が明々と見えた。一言にして云へば、レムブケはだん／＼出世をして、同國人で勢力の有る將官の許に寄食して居た。

彼は當時其將官の五番目の娘に想ひを懸けて居た。又、其想ひが適へられ相にも見えた。が、アマリヤは一向頓着しないで、時節が來ると、將官の舊い同僚で、年を老つた獨逸人の工場主に嫁いで仕舞つた。アンドレイ・アントノーギーチも深く嘆かなかつた。そして、紙製の劇場を作つた。幕が上ると、俳優が出て來て、兩手でいりんな身振をした。棲敷には見物人も居た。噓方は機關で提琴の上に弓を動かして、指揮者は鞭を振つた。土間では、士官や貴婦人連が拍手送した。皆厚紙で出來て居て、レムブケ自ら考案して作製したものだ。彼は此劇場を作るに六箇月を費した。將官は其爲にわざ／＼友達を集めて會をした。劇場は展覽に供された。新に結婚したアマリヤと所夫の工場主を始めとして、將官の五人の娘や、數多の夫人や令嬢や紳士が仔細に其劇場を點檢して、大いに喝采した。それから皆舞踏に移つた。レムブケは大いに満足して、速かに胸の傷痕を忘れた。

數年經過して、彼もだん／＼出世した。彼は始終同人種の長官の下に、始終好い地位を占めて居た。最後に年齢に比較して極めて立派な地位に迄登つた。彼は永い間結婚を望んで、絶えず周圍に眼を注いで居た。或時長官に知れないやうにして、或雜誌の編輯人へ小説を書いて送つた。が、それは嘉納されなかつた。一方では、彼は又玩具の完全な鐵道を作つて、再び多大の成功を博した。旅客が手下囊や革靴や、犬や子供を伴ながら、ブラット

フォームへ出て来て、列車の中へ乗込んだ。車掌や驛夫が去つて、鈴が鳴る、信號が與へられる、列車は停車場を發した。彼は此の巧妙な工夫のために殆ど一年を費した。が、此男も到頭結婚した。彼が知己は随分ひろい範圍に亙つて居たが、主として同國人の間に有つた。が、勿論役向の上から露西亞人の仲間にも接觸した。到頭、三十九歳の時、彼も遺産を受ける身と成つた。麵粉屋のお祖父さんが死んで、三萬留布の遺産を彼に遺して行つた。一つ缺けたのは只適當な地位だけと成つた。彼の若くして贏ち獲た役柄の既に素張しいものがあるにも係らず、彼は決して野心家ではない、寧ろ何でも可いから獨立した、官林でも自分の自由に成るやうな、又は何かそんな様な坐心地の好い、政府の小さな地位を獲得したら、一生それで満足して居るやうな質の人物で有つた。が、今や彼の望んで居たミンナやエルネスチナの代りに、ユーリヤ・ミハイロヴナが不意に舞臺面へ現はれて来た、彼の進路は即座に一層高い平面に高められた。平凡な、生眞面目な男が、一つ自分も野心を抱いて見ようかなと感ずるやうに成つた。

ユーリヤ・ミハイロヴナは昔風に勘定すると、二百人の奴隷を有するだけの財産を所有して、それに勢力の有る友達も有つた。一方では又レムブケが好男子で有るのに、彼女は既に四十を越えて居た。面白いことに、彼は彼女との婚約におひく慣れるに伴れて、だんく心から彼女を戀するやうに成つた。婚禮の日の朝、彼は女に詩を送つた。彼女は其詩まで氣に入つた。眞個四十といふ年齢は戲談ではないので有る。彼は此結婚の後速かに位階を進められ、勳等も上つて、間もなく吾々の州の知事に任命せられた。

吾々の町へ来る前に、ユーリヤ・ミハイロヴナは所天を造り直さうとして一生懸命働いた。彼女の説に據れば、彼は全然才能がない譯ぢやない、客間へ這入り様も知つて居れば、叩頭の仕方にも心得て居る。他人が話をする時、

黙つて聽いて居て威嚴を落さぬ術も知つて居れば、又自分で演説も出来る。實際、彼は二三の獨創的な思想の斷片も所有すれば、他人からは自由主義者だと目される程、新しい思想にも感觸れて居た。が、一つ彼女の心を惱ましたのは、彼が永い間官界を遊ぎ廻つた結果、何うしても休息の必要を感じ出したことだ。彼女は自分の野心を所天に感染させようと努めた。が、彼は不意に玩具の教會を作り始めた。牧師が出て来て説教をする、會衆が手を前にして柔順に聽聞して居る、一人の女が半帛を出して眼を拭つて居る、一人の老紳士が鼻をひる、最後に風琴が鳴るといふ仕組みだ。これは態々瑞西へ注文して、費用に構はず急便で取寄せられた。ユーリヤ・ミハイロヴナは吃驚して、それと知るや否や、悉皆組立を取上げて、自分の室の箱の中に錠を卸して仕舞つた。其代りと言ふので、彼女は内密にする條件の下に彼に小説を書くことを許した。それからと云ふもの、彼女は只自分一人で遣つて行く所存を固めた。が、不幸にも、彼女の態度には随分淺薄な處や、判斷の缺乏した處が有つた。運命は餘りに永く彼女を老嬢にして置いた。で、いろんな考へが次から次へと彼女の野心に充ちた、寧ろ過度に昂奮した頭の中を狂ひ廻つた。彼女はいろんな計畫を抱いて居た。實際、一人で此州を治めて、日を期してわが社交界に於ける人物と輿論と諸機關との中心に成らうと夢みて居た、随分政略的な同情も寄せて見た。フォン・レムブケも多年の役目の上手練から、疾くも自分が州其者の政治に關しても別段心配する必要がないと悟つた時は、流石に少々驚駭して居た。實際、最初の二三箇月は極めて満足に經過した。が、其時ビョートル・ステバーノギーチが出て来て、何やら妙な事が始まり掛けた。

先づ少ヴェルホーエンスキイが第一歩からアンドレイ・アントノーギーチに對する目に餘るやうな敬意の缺乏を示して、萬事彼に命令する權利でも有つて居るかの如く振舞ひ出したことから始まつた。同時にユーリヤ・ミハイ

ローヴナはそれ迄所夫の權威の餘りに強いのを始終快からず思つて居た處から、それに對して、全然吾不關焉の態度を取つた、或は少くともそれを重視しないやうな態度を取つた。若者は此家の寵人と成つて、喰つて、飲んで、殆ど家の中で眠らないばかりにした。フォン・レムブケは自家防衛の手段として、他人の前に彼を「おい、若い」と呼んだり、如何にも自分が目を懸けて居るやうに相手の肩を敲いたりした。が、一向効目はなかつた。ビョートル・ステバーノギーチは表面上眞面目に彼に話をして居る時でも、絶えず目の前で彼を笑つて居るやうな風が見えた。そして、他人の居る前でも、彼に面と向つて逆も信じられないやうな酷い事を言ひくした。或日自宅へ歸つた時、彼は此若者が許しもしないのに自分の書齋へ陣取つて、長椅子の上に長々と寐そべつて居るのを見た。彼は這入つて来たが、何人も自宅に居ないので「一寐入りした處だ」と辯解した。フォン・レムブケも立腹して、再び細君に不平を訴へた。細君は彼の苛立しさを笑ひながら、何れにしても貴方が自分の威嚴を維持する手段を知らないのだと、随分辛辣な注意を與へた。で、兎に角自分に對しては「あの兒」もそんな我儘な振舞ひは爲し得ない、「あれも社會の因襲には拘泥しない性質だが、自然の儘で可愛氣の有る兒だ」と云ふのだ。フォン・レムブケはいよく、蓋面をつくつた。が、今度はユーリヤ・ミハイロヴナが二人の間に立つて仲直りをさせた。ビョートル・ステバーノギーチは辯解までもしない、只粗野な戯談でそれを切抜けた。他の時ならそんな戯談は更に新しい侮辱を加へたものとも取られたらうが、此場合には後悔の徴候として受取られた。アンドレイ・アントノギーチの弱點は第一相手に彼の小説の秘密を漏らすと云ふやうな、馬鹿な大間違ひを演つて居ることであつた。彼を詩的感情に充ちた熱烈な若者と想像して、自分も久しく聽手に渴へて居た處から、二人が始めて知合に成つた頃、或時彼に二章だけ朗讀して聞かせた。若者は彼の退屈を隠さうともしないで、大欠呻をしながら聽いて居た。一言だつて賞讃

の辭は發しなかつた。が、歸りがけに、閑暇な時それを讀んで批評がして見たいから、暫時其稿本が貸して貰ひたいと頼んだ。アンドレイ・アントノギーチは言ふが儘に貸して遣つた。彼は其後毎日の様に遣つて來ながら、一向其稿本を返さうとしない。何と訊かれても笑つて受け流した。後には街上で失くしたと迄言出した。ユーリヤ・ミハイロヴナは所天の此の不用意を耳にした時、かんくんに憤つて仕舞つた。

「貴方は屹度あの教會のことも話したのでせう？」と、ユーリヤ・ミハイロヴナは殆ど落膽したやうに叫喚した。

フォン・レムブケは眞面目に思案し出した。が、此の思案といふ奴が彼には好くない、醫者からも禁ぜられて居るのだ。此州に面倒な事——それに就いては、何れ後で話す積りだが——が起りさうな徴候が有るといふ事實を外にして、彼は知事としての威嚴を冒されたばかりでなく、所天としての感情をも傷けられた。アンドレイ・アントノギーチは最初結婚した時、將來夫婦の間に争鬭が有らうななどは夢にも思つて居なかつた。そんな事は彼が永い間ミンナやエルネスチナに就いて畫いて居た夢想と相容れぬもので有つた。彼は自分には到底家庭の風波に堪へられないやうな氣がした。到頭ユーリヤ・ミハイロヴナは彼に對して公然談判を始めた。

「貴方もこれに就いては餘まり憤れませんか」と、彼女は言つた。「貴方には未だあの兒に負けないだけの知慧が有つて、社會上の地位は比較に成らない程高い所に被座しやるといふ、それだけの點から見てもですね。あの兒は以前自由思想に感觸れた時の癖が未だ澤山残つて居るのですよ。私は單にそれを惡戯だと思ひますわ。ですが、人間といふものは左様急に變る譯にも行きませんからね。まア永い目で見て居る外有りませんよ。私どもは先づ青年を重んじて遣らなくちや成りませぬ。私は何です、彼等青年を遇するに愛情を以てして、淵から支へて居て

造るんですよ。』

『だが、あの男の言草も餘り酷いからね』と、フォン・レムブケは反對した。『私もあの男に他人の面前で、政府は何時迄も人民を馬鹿にして置いて、それに依つて革命を避けるために、わざ／＼火酒で酒浸しにして置くのだなぞと言はれると、逆も我慢が成らんからね。まあ私が衆皆の前でそんな事を聞いて居なくちや成らん時の私の地位を察して見て下さい。』

斯う言ひながら、フォン・レムブケは最近にビートル・ステバーノギーチと交した會話を心に想ひ起した。彼の自由思想的傾向を見せびらかさうとする無邪氣な目的から、彼は個人として千八百五十九年以來注意して集めて置いた、露西亞と外國とを問はず、有らゆる種類の革命の機文の蒐集を出して相手に見せた。尤も、これは單に好事家としてそんな物を蒐めたのではない、何かの場合官歴の上に役に立つ日も有らうといふ興味から蒐めたのだ。ビートル・ステバーノギーチは彼の出して見せた目的を見て取つて、斯ういふ機文の一行の中には、貴方のも含めて、全政廳の中に於けるよりも多くの意味が有るといふ意見を發表した。

レムブケは眼を剝いた。

『だが、吾々の間では未だ早いよ、未だ早いよ』と、彼は機文を指差しながら、殆ど哀願するやうに言つた。

『いや、早いことはない。貴方も其様に怖がつて居られるのでせう。して見ると、矢張り早いことは有りませんよ。』

『だが、此處を見たまへ、例へばこんな教會を滅せと云ふやうな煽動的な文句が有るだらう。』

『如何してそれが不可ないのです 貴方も物の解つた方だ。勿論、貴方自身神など信じては被坐しやらない。只人民を馬鹿にするために宗教を必要とするのだと云ふ位のことには充分御承知の筈だ。眞理は虚偽よりも正直ですよ』

……』

『そりやア左様だ、左様だ、眞個左様に違ひないが、此國ぢや未だ早過ぎるよ、早過ぎるよ……』と、フォン・レムブケは顔を盛めながら言つた。

『で、貴方も教會を破壊して、車の輻を擔いで彼得斯堡へ進軍することにも同意して、單にそれを時期の問題だとして居られながら、如何しておめ／＼と政府の役人に成つて居られるのですか。』

レムブケも斯う容赦なく引捕まへられては、かつと腹を立つた。

『左様ぢやない、決して左様いふ譯ぢやない』と、彼はかつとすると共に、いよく自分の失策を悔いながら叫んだ。『君は若いから、未だ僕等の目的が解らない、それだからそんな間違ひをするんだよ。ねえ君、ビートル・ステバーノギーチ君、君は今吾々を政府の役人だと言つたね？ 左様かい、獨立した役人だね？ だが、君は僕等が如何して働いて居るか知つてるかい。僕等は只責任の下に遣つて居るんだよ。が、畢竟それが永い間には君達と同じく文明の進展に資することに成るんだね。僕等は只君達が破壊しようとするものをそつとして、一緒に守立て居るんだよ。又僕等がなけりや、疾くの昔風に吹飛んで仕舞つてるんだよ。僕等は君達の敵ぢやない、決してそんな事はない。僕等は君達に言ふのだ、さア行け、進め、時には破壊もせよと——勿論、そりや舊く成つて改革の必要が有る物のことを言ふのだがね。が、僕等も必要に際しては、君達を必要な範圍に制限するかも知れない。それに依つて、君達を君等自身から救ふのだよ。左様しなければ、君達は此露西亞を不安と動搖とに委して、兎に角それが維持して居る表面上の平穩さへ奪つて仕舞ふだらうからね。又左様いふ表面上の平穩を維持するのが僕等の任務だよ。まあ僕等と君達とは相互に缺くべからざるものだ』と云ふことが了解して貰ひたいね。英國では自由黨と保守

黨とが同じ意味に於て相互に缺くべからざるものと成つて居る。畢竟、君達は自由黨で僕等は保守黨だね。僕の観る處は、まアそんな物だよ。」

アンドレイ・アントノフ・ギーチはすっかり雄辯に成つた。彼は彼得斯堡に在つた時ですら自由思想を口にすることが所好で有つた。殊に此處では誰も間諜に成る者がないのだから堪らない。ビョートル・ステバーノフ・ギーチは黙つて、何日になく嚴肅な態度を装つて居た。それが又一層辯士を昂奮させた。

「君は知らないだらうが、僕がだね、「此州に對して責任を有する」僕がだね」と、彼は書齋を歩き廻りながら續けた。「其一つさへ全うすることが出来ない程澤山の義務を有すると共に、一方では、同様の眞實さで、此處に居ても僕は一つ爲ることがないとも言ひ得られるんだね。其意味は何事も政府の意見に據る外ないといふ一事に歸着するんだよ。で、假に政府が政略上、又は公衆の昂奮を宥和して、知事の権能を増大するために、共和國を建設しようとしたと想ひ玉へ、吾々知事たるものは共和國を鷄呑みにする外ないよ。これが共和國ばかりぢやない、何んな物でも鷄呑みにするよ。少くとも、僕は左様する積りで居るね。一言にして言へば、政府が僕に電報で *active devouante* (吞滅的活動) を命令したとするか、僕は直ちに *active devouante* (吞滅的活動) を遣つて見せるよ。僕は此處に衆皆の前で言つて遣つた。「諸君、均勢を維持して、有らゆる州の制度文物の發展を期するためには、只一つの事が肝要である。即ち知事の権力の増大だ」と。ねえ君、州議會にしろ、裁判所にしろ、有らゆる制度は皆二重の存在を有するといふことが必要だよ。即ち一方では、それが存在することだね——僕もそれ等の制度が缺くべからざるものだと承認するよ——又一方では、それが存在しないと云ふことが必要だね。これは皆政府の見地から言つて居るんだよ。で、若し僕が左様いふ制度を必要とするやうな氣分に成れば、即座にそれを設けさせるよ。又

そんな必要がなく成れば、僕の支配下にはそんな物は見られなく成るさ。これが僕の解釋に據る *active devouante* (吞滅的活動) だよ。が、それは知事の権力を増大しなけりや出来ることぢやない。君と僕とは *collision* (膝突合せ) で話してるのだがね。僕は何だよ、既に彼得斯堡の政府へ知事の官邸の前に一人番兵を置く必要を上申して置いたんだよ。今返辭が来るのを待つて居るのだ。」

「番兵は二人でなけりや駄目でせうね」と、ビョートル・ステバーノフ・ギーチは口を抉んだ。

「何故二人だい？」と、フォン・レムブケは彼の前に立寄りながら言つた。

「一人ぢや貴方の威嚴を添へる力は有りませんよ。如何しても二人でなけりや駄目ですね。」

アンドレイ・アントノフ・ギーチは顔を燈めた。

「君は……言はせて置けば方圖がないね。何だらう、君は僕が人の好いのに附け込んで、皮肉を言つて、*bourru* *bouffant* (善い事をする皮肉家) の役を演じようと云ふんだね。」

「ま、其邊は宜しいやうにと、ビョートル・ステバーノフ・ギーチは呟いた。「兎に角、貴方は私どものために道を拓いて、其成功を補つて下さいますよ。」

「で、「私ども」といふのは何人だね、何が成功だね？」と、フォン・レムブケは吃驚して、相手を見詰めながら訊いた。が、返辭はなかつた。

ユーリヤ・ミハイロフナは始終の話を聞いて、非常に不快な顔をした。

「だがね、私は如何してもお前の寵人の上に權威を使用することが出来ないよ」と、フォン・レムブケは自家防衛として抗議した。「特に二人が *relative* (相對) で居る時にだね……私も人が好いから……餘計な事を言つた

「余も知れないがね。」
「餘まり人が好過ぎますよ。で、貴方がそんな機文を蒐めて被坐しやるとは知りませんでしたね。何卒一週私にも見せて下さいな。」

「處が……あの男が一日で可いから貸して呉れと言ふんだよ。」

「で、それも貸してお遣りなすつたのですか」と、ユーリヤ・ミハイロヴナは肝癪聲を出した。「まあ何て目先の見えないことでせうね。」

「直に取戻すやうに使を遣らうよ。」

「あの兒が返しますものか。」

「強つて取戻して見せるよ」と、レムブケも怫然として座を立ちながら言つた。「一體あの男が何者なれば、私達はその間に怖がるのだい、又そんなに遠慮なくちや成らぬ私は、一體何だい。」

「まあ落着いて下に被坐しやい」と、ユーリヤ・ミハイロヴナは所天を押し止めながら言つた。「第一の質問には私が答へますよ。あの兒は特に立派な推薦状を持つて、私の許へ来ました。あの兒は才能も有れば、時には非常に穿つたことも言ひます。カルマーチノフも言ひましたがね、あの兒は到る處に懇意な關係が有つて、殊に彼得斯堡と莫斯科との青年の間には非常な勢力が有るといふことですよ。で、若し私があの兒を通じて彼等青年を私の周圍に惹附けることが出来れば、私は彼等の野心に新しい漏口を授けて、彼等を没落から救つて遣りますよ。あの兒も私には全心を傾けて懐附いてますから、何事に依らず私の言葉に従ひますよ。」

「だが、彼奴等は他人から可愛がられて居る間に……眞個彼奴等は何んな事をするか知れたもんぢやアない。」

勿論、そりやア一つの思想だらうがね……と、フォン・レムブケはほんやり自分を辯護するやうに言つた。「だが……だが、私はX州で或種の機文が発見されたと云ふやうな話を聞いたよ。」

「ですが、夏時分もそんな風説が有りましたよ——機文だとか、贋造紙幣だとか、そんな様な噂ばかりでしたがね、是迄の處ちや一つも證據が上らないぢや有りませんか、誰からお聞きなさいました？」

「私はフォン・ブルーメルから聞いたよ。」

「まあ、あんな人のことなど私に言はないで下さい。貴方は私の前であんな人のことが能く言はれますね！」
ユーリヤ・ミハイロヴナは一時にかつと成つて、少時言葉さへ繼がれなかつた。フォン・ブルーメルは此知事の下に書記を勤めた男で、痛く彼女から憎まれて居た。それに就いては、又後で話すことにする。

「何卒ヴェルホーゼンスキイのことでは心配して下さいませぬ」と、彼女は漸つと言出した。「實際何か悪い事の仲間入りをして居るのなら、あの兒も貴方や此土地の何人に向つても話したやうに、無暗にほかく話さないでせうよ。饒舌る人といふものは餘り危険ぢやない。私は又お請合でも致しますがね、若し何事が起るものとすれば第一番に私が聞き込むだらうと思つてますよ。あの兒も私には狂氣のやうに心服して居ますからね。」

私は先まぐりながら一言するが、ユーリヤ・ミハイロヴナさへ是程頑固で自尊心に充ちて居なかつたら、あの連中が吾々の間に齎したやうな不幸は多分起らずに済んだかも知れない。眞個、彼女に大部分の責任が有つた。

第四章 祭の前夜

ユーリヤ・ミハイロヴナが此州の保姆達のために計畫して居た祭日は、幾度か決定して又日延べに成つた。ピョートル・ステバーノギチと書記のリヤムジンとが相變らず彼女を取巻いて騒いで居た。此男は一時ステバーノギチの寓居へも出入した男で、洋琴を弾く處から急に知事の家を去つて、今では使歩きをして役に立つて居た。又リイプティンも日々足を運んで、ユーリヤ・ミハイロヴナから新に起す筈の獨立州日報の主筆に目指されて居た。其他結婚したのやら、しないのやら取交せて五六人の婦人連も有つた。最後にカルマーヂノフさへ時々顔を出した。此人は大騒ぎをすると云ふ程でもないが、一人笑壺に入りながら、文學の四班舞曲では一つ皆さんを驚かせることが有ると、大きな聲で豫約して居た。多額の寄附金が計上せられた。それが皆此町の撰拔きの社交界から出た。が、それ程でないのも金子さへ出せば入會を許された。ユーリヤ・ミハイロヴナは、時として階級の混淆を許すのは積極的義務で有るとまで公言した。左様でもしなければ、如何して彼等の眼を開くことが出来やうと。

私立お座敷委員會が設けられて、其席上でお祭は民主的性質のものにすべしと決定せられた。多額の寄附金名簿が委員どもを浪費に傾かせた。彼等は何か大仕掛けな事をしようと企圖して居た。たび／＼延びたのもそれが爲で有つた。彼等は舞踏會を州會議長の夫人に屬する大きな邸宅で開くことにしようか——夫人も其日自邸を提供する

ことを望んで居た——それともスクヴォーレジュニキに於けるヴルヴラ・ペトロヴナの邸にしようかと、未だ決定しないで居た。スクヴォーレジュニキ迄は稍路程が遠かつた。が、委員の多数は其方が「一層自由」だらうといふ意見を持して居た。ヴルヴラ・ペトロヴナ自身も大分自分の邸にしたいやうな思召が有つた。如何してあんな氣位の高い女が殆どユーリヤ・ミハイロヴナの氣を迎へるやうな態度に出たかは、私どもの了解に苦しむ處で有る。が、恐らくは後者が自分の方でも亦殆どニコライ・フシエヴォロドギチに媚びるやうにして、何人よりも彼に對して鄭重にするのが、彼女を悦ばせたからで有らう。加之、私はピョートル・ステバーノギチが絶えず小聲に囁いて、知事の家の中に、ニコライ・フシエヴォロドギチは極めて不思議な邊に極めて不思議な關係を有して、此處へ遣つて來たのも確に彼等から或種の任務を托せられて居るのだと云ふやうな、兼々吹込んで有る觀念を一層強めにかゝつて居たことも繰返して置きたい。

此町の人々は一時妙な心的状態に有るやうに見えた。特に婦人連の中に、而もそれはだん／＼左様成つたとも言へないのだ。極めて自由な、束縛されな

た。到る處荒んだ悦樂と輕燥とが有つた。が、それが始終愉快で

成つた。其後、一樂濟んだ時、人はユーリヤ・ミハイロヴナ

全然ユーリヤ・ミハイロヴナばかりにも罪は歸せられな

して眺めて居た。が、左様いふ人々ですら、當時は別段、私の記憶する所に據れば、何時からともなく一つの大きな

イローヴァナの客間に有つた。其集團の中では、勿論若い會分端目を外した悪戯をすることが公認されたものと考へられて

此集團の中には、二三の婀娜な婦人も交つて居た。若い連中は遊んで馬車や乗馬で市中を押廻したりした。彼等は冒険に憧れた、單に面

工夫さへした。彼等は吾々の町を一種の酒場でも有るやうに心得て居た。へば、或中尉の細君で、所天の虐待に容色も衰へては居るが、年紀は未だ若い、フ

廻套を買ひたさの一心から無思慮にも高い賭の骨牌遊びに加はつて、儲ける處か、十五留布持つて行かれた。所天は怖し、拂ふ金子はなし、彼女は曩日の勇氣を振ひ興して、其場で窃と市長の息子に借金を申込んだ。これが又歳

に似合はぬ罪作りな、淫蕩な男で有つたが、如何したのやらそれを跳ね附けたばかりでなく、大きな聲で笑ひながら、所天の許へ言ひ告げに行つた。固より中尉は月給の外に何にもないやうな、貧乏な身だから、細君を自宅へ引

張つて来て、泣いたり叫喚いたり、膝を突いて謝罪するにも頓着せず、思ふ存分腹癢せをした。此の吐胸を吐くやうな話も、町中に浮いた興味の別段何にも惹起さなかつた。勿論、此細君はユーリヤ・ミハイロヴァナの集團に屬

して居る譯でもなかつた。が、「隊」の一人で、中心を逸した、冒險的な性格の貴婦人が遇々其細君の知合で有つた處から、馬車で乗込んで、黙つて其女を自分の邸へ連れて来て仕舞つた。彼女は直様狂人染みた人達の手に移されて、

大切にされて、山の様に贈物を貰つた上、四日の間所天の許へも歸さず留めて置かれた。一日中例の冒險的な貴

婦人の許に居て、其貴婦人を始め幾多の遊び所好な仲間と一緒に馬車で市中を乗廻したり、舞踏其他の遊戯の仲間入りもした。彼等は絶えず所天を法廷へ引出して恥辱を擡かせて遣れと煽動した。又自分達も彼女を扶けて證人に

成つて遣らうと途言つた。所天は手出しも仕得ないで黙つて居た。憐れな女も最後に自分が手頼ない境地に陥つたことに氣が附いた。そして、恐怖のために死ぬやうな思ひをしなから、四日目の薄暗かりに保護者の家を脱け出し

て、中尉の許へ立戻つた。所天と細君との間に何事が有つたかは能く判らない。が、中尉の棲んで居た低い屋根の小舎の二つ有る窓の扉は二週間計り開かれなかつた。ユーリヤ・ミハイロヴァナは此話を聞いた時、悪戯者どもに

對して立腹した。殊に例の冒險的な貴婦人の所爲に對しては、其女を奪つて来た日に夫人の前へ連れて行つたにも拘らず、非常に不快を感じて居た。が、間もなくそれも忘却された。

又ある時、一家の主人たる小さな書記が、町中に美人の名を知られた十七の娘を他の地方から来た若い書記に縁附かせた。が、不意に、此の若い所天が婚禮の夜何かの譯から此美人を手暴な目に會はせたいといふ噂が傳はつた。

リヤムジンは婚禮の席で酔拂つて其家に泊つて居た處から、此事件を目撃しなければかりにして、夜が明けるや否や、此の面白い報道を觸れて歩いた。即座に十數人の乗馬隊が出来上つた。中には、ピョートル・ステバーノギチだ

のリープティンだのと借馬に跨つて居るものも有つた。此のリープティンといふ男は胡麻鹽頭をしながら、何んな馬鹿けた冒険にも顔を出して、若い者と一緒に騒いで居た。で、若夫婦が二頭立ちの四輪馬車に乗つて、お禮廻りを

するとして、これは此町では、何んな事が有らうとも結婚の翌日廻らなけりや成らぬことに成つて居る——街に出た時、例の乗馬隊はがやく、囃立てながら其馬車を取巻いて、午前中町の何處へ行つても、其後から、くつ隨いて

歩いた。尤も、彼等も家の中迄は隨いて行かなかつた。只馬上の儘戸外に待つて居た。彼等は又花嫁花婿に對して

婦人の許に居て、其貴婦人を始め幾多の遊び所好な仲間と一緒に馬車で市中を乗廻したり、舞踏其他の遊戯の仲間入りもした。彼等は絶えず所天を法廷へ引出して恥辱を擡かせて遣れと煽動した。又自分達も彼女を扶けて證人に成つて遣らうと途言つた。所天は手出しも仕得ないで黙つて居た。憐れな女も最後に自分が手頼ない境地に陥つたことに氣が附いた。そして、恐怖のために死ぬやうな思ひをしなから、四日目の薄暗かりに保護者の家を脱け出して、中尉の許へ立戻つた。所天と細君との間に何事が有つたかは能く判らない。が、中尉の棲んで居た低い屋根の小舎の二つ有る窓の扉は二週間計り開かれなかつた。ユーリヤ・ミハイロヴァナは此話を聞いた時、悪戯者どもに對して立腹した。殊に例の冒險的な貴婦人の所爲に對しては、其女を奪つて来た日に夫人の前へ連れて行つたにも拘らず、非常に不快を感じて居た。が、間もなくそれも忘却された。又ある時、一家の主人たる小さな書記が、町中に美人の名を知られた十七の娘を他の地方から来た若い書記に縁附かせた。が、不意に、此の若い所天が婚禮の夜何かの譯から此美人を手暴な目に會はせたいといふ噂が傳はつた。リヤムジンは婚禮の席で酔拂つて其家に泊つて居た處から、此事件を目撃しなければかりにして、夜が明けるや否や、此の面白い報道を觸れて歩いた。即座に十數人の乗馬隊が出来上つた。中には、ピョートル・ステバーノギチだのと借馬に跨つて居るものも有つた。此のリープティンといふ男は胡麻鹽頭をしながら、何んな馬鹿けた冒険にも顔を出して、若い者と一緒に騒いで居た。で、若夫婦が二頭立ちの四輪馬車に乗つて、お禮廻りをするとして、これは此町では、何んな事が有らうとも結婚の翌日廻らなけりや成らぬことに成つて居る——街に出た時、例の乗馬隊はがやく、囃立てながら其馬車を取巻いて、午前中町の何處へ行つても、其後から、くつ隨いて歩いた。尤も、彼等も家の中迄は隨いて行かなかつた。只馬上の儘戸外に待つて居た。彼等は又花嫁花婿に對して

別段侮辱も加へなかつた。が、これだけでも悪い評判は立てた。町中がそれを噂し出した。勿論、皆笑つた。が、それを聞いて、フォン・レムブケは立腹した。又ユーリヤ・ミハイロワナとの間に口闘が起つた。彼女も亦非常に立腹して、そんな無作法漢どもなら悉皆邸から敲き出さうと迄決意した。が、明るる日彼女はビートル・ステバーノギチの勸告と、此事件を寧ろ面白いやうに考へて居たカルマーチノフの言葉とを容れて、彼等一同を容して遣つた。

『これは此土地の傳説と一致して居るのですよ』と、彼は言つた。『兎に角、特徴が有つて……痛快だ。御覽なさい。皆笑つて居る、憤つて居るのは貴方一人ですよ。』

が、如何しても許して置かれないやうな性質の悪戯も有つた。

職工階級の女では有つたが、極めて媚やかな婦人が福音書を賣りながら此町へ這入つて来た。此の福音書を賣る女どもに就いて、或面白い報道が彼得斯堡の新聞に掲げられた當座なので、町の人は好く此女の噂をした。又例の道化者のリヤムジンが、休暇で歸省して居た或神學生の助けを藉りて、此女から福音書を買ふやうな振をしながら、彼女の囊の中へ外國製の淫猥な寫眞の束を窃と忍び込ませた。後で聞けば、此寫眞はわざ／＼左様するために、名前は略して置くが、其人の言葉に従へば、『健全な笑ひと愉快な戯談』の所好な、勳章迄所持して居る、或老紳士の手から出たものださうな。憫れな女は市場で福音書を取らうとした時、其寫眞がはらく／＼と落ち散つた。物見高い群集が寄つて簇つて、彼女を罵り出した、巡査が遣つて来なかつたら、將に拳骨を飛ばさうと迄した。福音書賣の女は其儘警察に監禁されたが、此の厭はしい事件の真相を聞いて憤然として立つたマヴリーキイ・ニコラーエギイチの盡力で、晩に成つてから漸く釋放されて、町の外迄護送された。斯う成つては、ユーリヤ・ミハイロワナ

も、斷然リヤムジンの出入を禁じようとした。が、其晩集團の連中は舉つて彼を彼女の許へ連れて来て、恰度此男が洋琴の新曲を作曲した處だから、切めてそれだけでも聽いて遣つて呉れと哀願した。實際、其曲は面白かつた、表題も『普佛戰爭』といふ滑稽な名が附いて居た。先づ『マルセーユの歌』の威嚇するやうな調子で始まつた。

『Qu'un sang impur abreuve nos sillons. (不淨な血が吾等の畔を澆さむことを)』

未來の勝利に酔つたやうな、華やかな挑戰の響が聞かれた。が、不意に巧妙なプリエーションで此國歌と交りながら、何處か近くの隅から『Mein Herr Augustin (我が愛するアウグスティン)』の蠻的な調子が一方に上つて来た。

『マルセーユの歌』はそれに氣が附かないで進んで行く。『マルセーユの歌』はそれ自身の光榮に酔ひながら、今や其頂點に立つた。が、アウグスティンも勢ひを得て行く。アウグスティンはだん／＼傲岸に成つて、不意にアウグスティンの旋律が『マルセーユの歌』の旋律とごつちやに成出した。後者は如何やら腹を立てたやうだ。到頭アウグスティンに氣が附いて、彼女はそれを振落さうとする、煩さい、無意味な蠅のやうに掃ひ除けようとする。が、『我が愛するアウグスティン』は確乎として其地歩を保つて居る、彼は愉快に自信を有つて居る、嬉し相に傲岸で有る。で、不意に『マルセーユの歌』は恐ろしく馬鹿に成つたやうに見えた。彼女は最早憤怒と苦惱とを隠すことが出来ない。兩手を天にひろげながら、怒りと、涙と、呪ひとの慟哭が有る。

『Pas un pouce de notre terrain : pas une de nos forteresses. (吾等の土地の一すたりとも、吾等の城砦の一すたりとも)』

が、彼女は其間『我が愛するアウグスティン』と一緒に唄ふことを強ひられた。彼女の旋律は馬鹿々々しい方法でアウグスティンに移つて行く。彼女は降参した、死滅した、只片々に再び歌の文句が聞かれた。

「Quum sang impur……(不淨な血が吾等の……)」

が、直に又それがアウグスティンに呑まれて、野蠻な舞踏曲に移つて行く。恰もそれは有らゆる物を投出しながら、ピスマルクの胸に飲泣するジュレ・フアーブルで有る。が、此瞬間に於て、アウグスティンは再び猛烈に成る。皺唄れた音が聞かれる。無量の麥酒と、狂氣染みた自得と、数百万の黄金と、葉巻烟草と、三鞭酒と、人質の要求との暗示が有る、アウグスティンは「……また叫喚の聲に移つた……」「普佛戦争」は終つた。吾々の集團は喝采した。ユーリヤ・ミハイロヴナも「……斯う成つては追出し様も有りませぬね」と言つた。仲直りは出来た。實際、此無頼漢は才能を有つて居た。ヘテバイン・トラフイ・モーギーチは嘗て私に向つて、最も高い藝術的才能が最も忌はしい背景の中に存在することも有得るものだ、而も一が他と抵觸することもないと斷言した。其後リヤムジンは此狂曲を彼の知己で名前も餘り知られて居ない、才能が有つて内氣な若者の手から盗んだのだと云ふやうな風評が有つた。が、それは如何でも可いことだ。此男は以前ステバイン・トラフイ・モーギーチに着き纏つて、會のたんに招かれて来ては、いろんな型の猶太人を真似したり、耳の遠い百姓の婆が懺悔をする真似をしたり、赤ん坊の啼く聲色を使つたりして置きながら、今ユーリヤ・ミハイロヴナの許では、「四十年代の自由主義者」といふ題目の下に、残酷な手段でステバイン・トラフイ・モーギーチ其人を戯畫にして見せた。皆腹を抱へて笑つた。斯くの如くにして、終に彼を追出すことは不可能と成つた。彼も亦缺くべからざる人間と成つたのだ。加之、彼は奴隸のやうな手段でビョートル・ステバイン・モーギーチに取入つた。彼は又彼として、近頃はユーリヤ・ミハイロヴナの上に妙な、説明の出来ないやうな勢力を獲得して来た。

私はこんな無頼漢のことを語りたくない。又、實際語る値打もないのだ。が、此處に又彼が手を下したといふ不

快な話がある。これだけは何うも略する譯に行かない。

或朝、憎むべく又怖るべき神威褻瀆の噂が町中に擴がった。此町の廣大な市場の入口に聖母降誕の古い教會が立つて居た。古い此町でも有名な古跡で、山門の壁の中に格子戸を前にして、大きな聖母の偶像が祀つて有つた。で、見よ、一夜此偶像が劫掠されて、厨子の硝子は破られ、格子扉は碎かれて、數多の寶石や眞珠——それが非常に高價なものか如何かは判らない——が寶冠から取り取つて行かれた。が、更に宜しくないのは、偷盜の外に無意味な、人を馬鹿にしたやうな褻瀆が行はれたことで、偶像の碎かれた硝子戸の後ろに、朝に成つて見ると生きた鼠が入れて有つたと云ふのだ。四箇月後の今では、此犯罪は囚人のフェツカが所業に違ひないと云ふことに成つた。が、如何いふものか、リヤムジンも手を籍したと言はれて居る。當時は何人もリヤムジンのことを言ひもしなければ、疑ひもしなかつた。が、今では衆皆が鼠を入れて置いたのはリヤムジンだと言つて居る。何しろ役人どもも皆退避いだ。郡集は荒された跡を見ようとして早朝から集つて来た。多人數でもないが、始終百人位の群集が往つたり來つたりして、絶えず其前に簇つて居た。彼等は偶像に近づく時、十字を切つて、其前に跪いた。彼等は又お供物を上げ出した。お供物盤が一人の坊さんと一緒に現はれた。が、午後の三時過ぎに成つてから、漸つと役人どももお氣が附かれたと見え、其坊さんが其周りに立停るのを禁じたり、彼等が跪いて祈禱をしたり、お供物を上げたりする時、さつさと立去るに命じた。此の不幸な出来事はフォン・レムブケに至極不愉快な印象を與へた。其後ユーリヤ・ミハイロヴナは自分が所天の顔にあの奇態な、二箇月前彼が病氣の故を以て吾々の州を去つた時迄つと引き續いた憂鬱は認めたのは、此の辻占の悪い朝からだと言つたさうな。想ふに、彼の憂鬱症は吾々の州に於ける短い任期の爲に、休養の爲に出掛けた瑞西でも、矢張時折彼を悩ませたことで有らう。

午後の一時期、私も市場を通行した。群集は沈黙して、彼等の顔には嚴肅な、憂鬱な色が見えた。一人の肥つた、顔色の好くない商人が造つて来て、馬車から降りて、地面に額つきながら偶像に接吻して、一留布奉納して、溜息を吐きながら、又馬車に乗つて駈けて行つた。又一つ馬車で、二人の貴婦人が例の乗馬隊の若衆二人に伴はれながら造つて来た。二人の紳士——一人はそんなに若いと云ふ程でもなかつた——は矢張馬車から出て、無闇に群集を突き除けながら、偶像の前迄進んで行つた。二人とも帽子を脱らなかつた。一人は鼻眼鏡を懸けて居た。群集の中には低けれども大分癢に觸つたやうな唃聲が聞えた。鼻眼鏡の貴公子は紙幣を一杯詰めたんだ蝦蟇口から銅貨を一枚取出して、お供物臺の上へ投げた。二人は笑つて、何やら高聲に語りながら馬車の中へ戻つて行つた。其時リザベータ・ニコラーエヴナがマヴァーリキイ・ニコラーエヰーチに護衛されながら、馬に乗つて駈けて来た。彼女は馬から飛び降りて、手綱を伴侶に渡しながら——伴侶は彼女の吩咐に従つて、大人しく馬の傍に待つて居た——偶像の前に近づいた。其隙間に例の銅貨が投げられたのだ。憤怒の色はさつと彼女の頬を染めた。彼女は圓い帽子と手套とを脱つて、泥濘に塗れた舗石の上へべつたり膝を突いた。そして、恭々しく偶像の前に三度頭を垂れた。それから小さな蝦蟇口を取出したが、折悪しく二三の小貨幣しか見當らなかつたので、直に金剛石入りの耳環を抜いて、それをお供物盤の上に載せた。

「こんな物でも好う御座んすか。あの、あの寶冠の飾りに？」と、彼女は昂奮しながら坊さんに訊いた。

「あゝ好う御座んすよ」と、坊さんは答へた。「何んな物でも皆功德に成るのぢや。」

群集は笑ひもしなければ讚めもせず、只黙つて居た。リザは泥土に汚れた乗馬衣のまゝ、再び馬に乗つて駈け去つた。

二

此の出来事が有つてから二日目に、私は彼女が仲間と一緒に三つの乗合馬車に分乗して、馬上の若衆どもに取巻かれながら、何處か遠足にでも出掛けようとして居るのに出會つた。彼女は私を手招きしながら馬車を停めて、無理矢理仲間に加はらせた。馬車の中に、私のために座席も設けられた。彼女は笑ひながら華美な服装をした仲間の貴婦人達を私に紹介した。それから彼等は皆極めて面白い遠征に出掛ける處だと私に説明して聞かせた。彼女は始終笑つて居た、何處か過度に嬉し相にも見えた。最近彼女は非常に活潑で、實際談話が勝つて居た。

此遠征隊は眞個中心を逸して居た。彼等は皆川の向河岸の商人セヴスチャノフの家を訪れようと云ふのだ。此商人の家の小舎には、セミオン・ヤコヴレーヰーチと云つて、此州ばかりでない、近隣の各州にも、彼得斯堡や莫斯科までも其名を知られて居る豫言者の聖者が、茲十年許りも隠遁して安樂に住つて居た。何人でも、殊に此近郊へ散策にでも出掛ける者は、皆此の聖者を見に行つて、何か狂氣染みたことを言はせながら、其前に額づいて、お布施を残しては歸つて来た。お布施は時として莫大な額に上つた。で、若しセミオン・ヤコヴレーヰーチが自分で他に用途を指定しない場合には、何處かの教會に、多くは聖母の僧院へ寄贈せられた。僧院からは此目的のために坊さんが一人出張して、始終セミオン・ヤコヴレーヰーチに待つて居た。

誰も彼も皆非常な快楽を待ち望んで居た。一行の中リヤムジンを除いては、是迄一人もセミオン・ヤコヴレーヰーチを見たものはなかつた。リヤムジンは聖者が自分を箒で追出せと命令して、背後から彼自身の手で焙つた馬鈴薯を投げ附けたと自慢して居た。一行の中には、ピョートル・ステバーノヰーチが例の借馬に跨りながら加はつて

居た。其姿勢が又馬鹿に危なツかしい。ニコライ・フシエヴォロードギーチも亦馬上で随つて居た。彼は毎もこんな遊戯に遠ざかりはしなかつた。又そんな場合には、口こそ稀にしか利かないが、始終樂しげな顔附を装つて居た。一行が橋を渡つて、町の旅館に到着した時、不意に其旅館の一室で旅客の自殺したのが發見されて、警官の出張を待つて居る處だと言ふ者が有つた。誰やら直に自分達も這入つて、自殺人を見て來やうぢやないかと言出した。好からうと言ふので、一同賛成した。婦人達は未だ自殺人を見ることがないのだ。其時彼等の一人が、「世の中は皆面白い事ばかりぢやないの、何でも面白い事が有つたら、そんなにきち、く、倒にして居るものぢやないのよ」と、大きな聲で言つたのを私は記憶えて居る。只二三の婦人達が戸外に残つて居た。他の者は一團と成つて汚穢しい廊下を這入つて行つた。其中にリザベータ・ニコライエヴナ迄交つて居たので、私も吃驚した。其室の扉は開放しに成つて、勿論何人も吾々が自殺人を見に這入つて行くのを咎めるものはなかつた。自殺者は未だ十九とは成らないやうな少年で有つた。濃い黄金色の髪をして、卵形の顔に美しい、純潔な額をした、屹度見好けな兒で有つたに違ひない。身體は最う硬く成つて、若い眞白な顔は大理石のやうに見えた。卓子の上には、自分で書いたらしい遺書が置いて有つた。其文句に據れば、彼は誰を恨んで死ぬのでもない、四百留布の金子を浪費したから、申譯なさに自殺すると云ふのだ。「浪費」といふ言葉が書置の中に使つて有つた。四行の文句の中に綴りの間違ひが三つ迄有つた。

一人の強健相な田舎の紳士が自分の用向で此旅館に泊つて居たが、近隣の人と見えて、此事件に就いて一番悲嘆して居た。此紳士の話に據れば、此兒は彼の家族——寡婦さんの母親と、姉妹と、叔母達とから成立つて居る——に依つて、町の親類に當る或女の監督の下に、一番上の姉の嫁入道具や衣裳を購ひに田舎から町へ送られたのだ。

家族の者は恐る／＼十年の貯蓄より成つた四百留布を此兒に托して、いろ／＼訓戒するやら、祈禱するやら、十字を切るやらして旅立たせて遣つた。此兒もそれ迄は品行もよく、信用の出来る質で有つた。が、三日前に町へ着くと、親戚へは立寄らないで、旅館に陣取つた。それから直に骨牌遊びをする積りで俱樂部へ駈け着けた。が、其晩は俱樂部にも賭博が開かれなかつた。夜半に旅館へ戻つて、三鞭とハワナの葉巻煙草とを頼んで、六七品の夕食を命じた。が、三鞭に酔拂つて葉巻で胸が悪く成ると、折角命じた御馳走にも手を着けないで、殆ど正體なしに床へ這入つた。明くる朝、林檎のやうに鮮やかな氣持に成つて、起きると直に、昨宵俱樂部で置いて置いた川向ひの一廓に在るヂブシイの假舎へ遊びに行つた。其儘二日の間旅館へ歸らなかつた。到頭、前の日の午後五時頃に酔拂つて歸つて來て、直に床に就いたまゝ、晩の十時頃迄一寝入りに眠つた。眼を覺した時、彼はカツレットを一皿と、シャトー・デクームの葡萄酒を一瓶と、葡萄酒の實と、紙とペンと、それから勘定書とを注文した。別段其時も變つた容子はなかつた。靜かで、大人しく、何人を見ても嬌然にして居た。何うも眞夜半に自殺したものらしい。それにしても、一人も銃砲の音を聞かなかつたのは不思議だ。今日午頃に衆皆が騒ぎ出した。幾許扉を敲いても開けないので、蹴破つて這入つて見ると、此體たらくだ。葡萄酒の瓶は半分空に成つて、葡萄酒の皿も半分は残つて居た。三連發の拳銃を直接に胸へ當てよ引金を引いたものらしい。血は殆ど瀉れて居なかつた。拳銃は手から絨氈の上へ落ちて居た。少年自身も長椅子の隅から半分床の上へ倒れて居た。息は即座に絶えたに違ひない。死體の顔には些の苦痛の痕もなかつた。顔の表情は朗らかで、殆ど嬉し相で、一生何の苦勞もなかつたやうに見えた。吾々の一行は貪るやうな好奇の眼で彼を見詰めて居た。隣人の不幸に際しては、傍觀者には——それが何人でも有るにもせよ——何か知ら屹度愉快な處が有るものだ。貴婦人達は黙つて凝視して居た。又伴侶の連中は平常から才氣に富んだ、平

然たる言草で名を知られた豪の者どもで有る。或者は此少年の遺口が最善の遺口だ、これより惻かな手段は一寸考へ附かれなだらうと言つた。又或者は彼も一寸の間ちや有るが、旨い事をしたものだと言つた。三番目の男が不意に、近頃人間が急に根柢を失つて、足の下の地面が滑り落ちてでも行くやうに、首を縮つたり、拳銃で自殺したりするのは、一體如何いふ譯だらうと突拍子もなく言出した。人々は冷淡に此理窟家の談を聞き流した。其時、兼兼馬鹿な真似をするのが自慢のリヤムジンが皿の中から葡萄酒の瓶に迄手を伸ばした。他の者も笑ひながら彼の例に倣つた。三番目の男はシャトー・デクームの葡萄酒の瓶に迄手を伸ばした。が、警察の署長が来て彼を制止した。加之、一行を室から追出さうとした。衆皆見るだけ見た後なので、不平も言はずに出て行つた。尤も、リヤムジン一人は何かぶつ／＼言つて署長を困らせて居た。一行の愉快さうな笑聲や、戯談めいた高話は、道の後半に於て二倍も活潑に成つた。

吾々は恰度一時にセミオン・ヤコヴレーギーチの隠栖に到着した。稍ひろい邸の門は開放されたまゝで、小舎へ近づくのも自由で有つた。セミオン・ヤコヴレーギーチは晝飯を認めて居たが、それでも客には接すると云ふことだ。一行はどよ／＼と這入つて行つた。聖者が晝飯を喫べながら訪客に接して居た室は二つの窓が有つて、可成廣かつた。それが壁から壁へ突切つた、三四尺の高さの木格子で、二つの同じやうな部分に仕切られて居た。普通の客は格子の外に残されて、仕合せな者だけが聖者の許可を得て格子の中へ通された。で、氣が向けば、長椅子だの、古い鞆皮張の椅子だのに掛けさせた。彼自身は毎も相變らず舊いヴァルテュー型の汚れた安樂椅子に凭つて居た。何方かと云へば長目な、水腫んだ、黄色い顔をした五十年配の人物で、頭は禿けて、亞麻色の髪の毛がちよんほり残つて居た。鬚はなかつた。右の頬が腫れて、口が何處か引釣つて居るやうに見えた。又鼻の左側に大きな疣が有

つた。細りした眼は穏やかな、魯鈍な、睡さうな表情を有つて居た。彼は又歐羅巴風な、黒い上衣を着て居たが、胴衣も頸飾も着けて居なかつた。稍荒目な白襦衣が上衣の下から覗いて居た。彼の足には何か異常が有るらしい。が、始終上靴の中へ突込んで居た。彼は嘗て書記をして、服務中位階も貰つて居ると云ふことだ。恰度肉汁を啜つて仕舞つた處で、鹽と牛酪を着けながら、馬鈴薯の二皿目を皮ごと平げにかゝつて居た。家主の商人から供給した三人の召使が彼の周りを彼方此方走り廻つて居た。其中の一人は燕尾服を着けて居た、二番目の職工のやうに、三番目の役僧のやうに見えた。又一人十六七の活潑な小僧も居た。召使の外に、一人灰色の頭をした、稍肥え過ぎて居るが、尊けな坊さんが壺を捧げながら控へて居た。卓子の上には、湯沸器が奠立つて、一枚の盆が二十餘りの洋盃と一緒に置いて有つた。最一つの卓子には、砂糖の塊や、同じく數斤や、茶の二斤や、刺繍をした上靴や、絹の半帛や、反物や、亞麻布の片など、いろんなお布施が載せて有つた。金子のお布施は皆坊さんの捧げて居る壺の中へ這入つた。室には少くとも十二人以上の訪客が詰めかけて居た。其中の二人はセミオン・ヤコヴレーギーチと共に格子の向側に腰掛けて居た。一人は百姓らしい白髪のお巡禮で、最一人の小さな、干乾びた坊さんは眼を床に注いだまゝ、謹直らしく坐つて居た。其他の訪客は皆格子の傍へ聳々と詰め掛けながら立つて居たが、一人の貧に衰れた年配の女と、一人の地主と、町から来た強壯さうな商人で、金持として知られながら、露西亞風の服を着た、濃い鬚の男とを外にしては、大抵百姓らしかつた。

皆自分からは何とも言出し得ないで、機會の來るのを待つて居た。四人は膝を突いて居た。中にも人の注意を惹いたのは、四十年配の強壯さうな地主で、何人よりも目立つやうに、格子の眞前に跪きながら、恭々しげにセミオン・ヤコヴレーギーチの一瞥、若しくは慈悲深い一言を待つて居た。彼は既に一時間の餘も其處に左様して居るの

だが、聖者はそれに眼も呉れなかつた。

一行の婦人達は懐しげに囁いたり、笑つたりしながら、格子の前まで押寄せて行つた。彼等は他の訪客を排除して、正面へ出た。地主一人を除いては、床に跪いて居る者でも容赦はなかつた。只地主一人は格子に確乎捕まりながら、頑固に自分の優越した地位を譲るまいとした。懐しげな、又貧るやうな眼が皆セミオン・ヤコヴレーギーチの上に向けられた。柄附の眼鏡や鼻眼鏡を取出すのも有れば、甚たしいのは雙眼鏡を向ける者さへ有つた。少くともリヤムジンだけは雙眼鏡で覗いて居た。セミオン・ヤコヴレーギーチは穩やかに、又懶けに小さな、しよほくした眼から一同をちろりと見渡した。

「あゝ、皆横目を使ふ人間どもだな」と、彼は皺腹れた低い聲で、切れぐくに發音した。

一行は皆笑つた。「何だ、横目を使ふ人間とは？」が、セミオン・ヤコヴレーギーチは再び黙り込んで、又むづ／＼と馬鈴薯を平けて仕舞つた。やがて彼は卓布で口端を拭つた、召使がお茶を持つて來た。

彼は常例として一人ではお茶を飲まなかつた。訪客の中の或者にそれを注いで遣つたが、それも悉皆と云ふ譯ぢやない。通例氣に入つた者だけ指で示しながら、召使に注がせた。其又撰擇が人の意表に出るので、毎も人々を驚かせた。金持や地位の高い人間を其方除けにして置いて、時としては百姓やよほくのお婆さんに眼を着けた。時としては又乞食を顧みないで、肥つた、富有な商人に此名譽を興へることも有る。お茶も亦一人々に遣つた淹れ方がされた。砂糖を茶碗の中へ入れて渡されるのも有れば、別々に渡されるのも有る。時には又全然砂糖なしに渡されるのも有る。例の壺を捧げて居る坊さんは從來毎日のやうにお茶を頂いて居たが、如何いふ理由か、今日は何にも貰はなかつた。

「セミオン、ヤコヴレーギーチさま、何か私にも言つて下さいな。私は永い間貴方のお近附に成らうと思つて居たのですよ」と、一行の中の華美な服装をした貴婦人が、眼を斜に微笑しながら、歌でも唄ふやうに言つた。此婦人は前に人間は面白いことが有つたら、そんなに七面倒臭くするもんぢやないことよと言つた、其女で有つた。セミオン・ヤコヴレーギーチは彼女の方を振向きもしなかつた。膝を突いて居る地主は鞆の底からでも出るやうな、深い、高調子な溜息を漏らした。

「其中に砂糖を入れて！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは富有な商人を指しながら言つた。後者は前へ進んで床に跪いて居る地主と並んで立つた。

「最つと砂糖を入れて遣れ！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは既に茶碗へお茶が注がれた後から命じた。召使は又砂糖を入れた。「最つと、最つと遣るんだ！」三度目に又砂糖が入られた。四度目にも又。商人は恭々しく甘茶を飲み出した。

「あゝ神様！」と、人々は十字を切りながら呟いた。床に跪いて居る紳士は又深い高調子な溜息を漏らした。「長老様！セミオン・ヤコヴレーギーチ様！憐れな婦人の聲は忽ち悲しげに、又吃驚する程鋭く鳴り渡つた。吾の一行が彼女を壁へ押し着けたのだ。長老様、私は最う一時間の餘も貴方のお恵みを待つて居るので御座いますよ。何卒私に物を仰有つて下さい。私の手頼ない事情をお察し下さい。」

「あの女に訊いて見よ」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは役僧に言つた。役僧はつか／＼と格子に近づいた。「お前さんは先度セミオン・ヤコヴレーギーチ様がお吩咐けに成つた通りに爲ましたか」と、彼は懐しい、調子を取つたやうな聲で寡婦さんに訊いた。

「あれを爲す！長老様、幾許何でもあんな奴等に對してそんな事が出来ませうか」と、寡婦さんは訴へた。彼奴等は人喰鬼で御座います、彼奴等は私を裁判所へ訴へようとして居るので御座います。私を元老院へ突出すと言つて脅かすのです……現在の母をそんな目に會はせるので御座いますよ。」

「あの女に遣れ！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは砂糖の塊を指差した。小僧は駆け寄つて、砂糖の塊を掴みながら、寡婦さんの傍へ持つて行つた。

「あゝ長老様、貴方の御深切なお恵みは有難う御座います。こんなに澤山頂いて、私は如何致しませう」と、寡婦さんは歎息した。

「最つと、最つと」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは氣前好く言つた。

召使は又寡婦さんに塊を持つて行つた。「最つと、最つと」と、聖者が命じた。彼等は又三度目を持つて行つた、又四度目を、寡婦さんは周圍を砂糖で取巻かれた。僧院から來て居る坊さんは溜息を吐いた。こんな事を爲なければ、是迄通り今日にも悉皆僧院へ持つて行かれるのだ。

「こんなに澤山頂いて、私は如何したら可いでせう」と、寡婦さんは追従するやうに溜息した。「これだけで、最つと始末に困る位有りますよ……それとも、これが何かの豫言で御座いませうか、長老様。」

「そりやア屹度豫言に違ひないよ」と、群集の中の一人が言つた。

「あの女に最つと一斤遣れ、最つと一斤遣れ」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは飽迄言ひ張つた。

卓子の上には、未だ砂糖の塊が山の様に有つた。が、聖者に一斤遣れと命じられたので、召使どもも一斤だけ遣つた。

「あゝ神様、全能の御神よ」と、人々は胸に十字を切りながら喘いだ。「これは屹度何かの豫言に相違ない。」

「これからお前の胸を患ひと親切とで甘くするんだよ。それから子供に對して不平を訴へに來るが可い、お前の血を分けた子ぢやないか。此砂糖の意味は如何しても左様取らなくちや成らないね」と、お茶を貰へなかつた僧院の坊さんは、虚榮心を傷つけられた口惜し紛れに説明の役を自分に引受けながら、低い聲では有るが得々として言つた。

「何と仰有います、長老様」と、寡婦さんは不意に憤怒の形相を表しながら叫んだ。「如何して、彼奴等はヴェリージンの家が焼けた時、私の首玉に繩を結び着けて火の中に引張り込まうとしましたよ。それから又彼奴等は私の懷中へ死んだ猫を押込みました。彼奴等は何んな悪い事でも仕兼ねないのですよ。」

「あの女を追出せ！追出せ！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは不意に手を振りながら言出した。役僧と小僧とは格子を抜けて飛んで來た。役僧は先づ女の腕を抑へた。寡婦さんも抵抗しないで、始終貰つた砂糖の塊に眼を着けながら、むづ／＼扉口の方へ出て行つた。其砂糖を後から小僧が持つて行つた。

「一つだけ取返せ、取返して來い」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは傍に残つて居た、職工のやうな召使に吩咐けた。召使は出て行く女の後から追掛けて行つた。良少時して、三人の召使は寡婦さんに與へられた砂糖の一塊を取返しながら、意氣揚々として戻つて來た。が、彼女はそれでも三つ貰つて歸つた。

「セミオン・ヤコヴレーギーチ様」と、扉口で一人の聲がした。「私は鳥の夢を見ました、鳥の夢ですよ。それが水の中から飛んで出て、火の中へ飛込みました。如何いふことで御座いませう？」

「霜だ」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは言ひ放つた。

「セミオン・ヤコヴレーギーチ様、何故私にだけ何時迄も返辭して下さらないの？ 私は前から貴方に興味を有つて居たのですよ」と、一行の中の貴婦人は再び言出した。
「あの男に訊け！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは彼女に眼を呉れないで、床に跪いて居る男を指差しながら言った。

此命令を受けた僧院の坊さんは澄し込んで、跪いて居る紳士の傍へ近づいた。

「お前さんは何んな罪を犯したのだ？ 何か命令が下つて居るのかえ。」

「喧嘩をするなど、私の手の手綱を弛めるなど」と、跪いて居る紳士は皺皺れた聲で言った。

「で、それに従つたのか」と、坊さんが訊いた。

「私には何うも従ふことが出来ません。私自身の力が私よりも強いのですからね。」

「其男を追出せ、追出せ！ 審で、審でだぞ！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは手を振りながら叫んだ。紳士は其刑罰を待たないで、室の中から飛出した。

「あの男が膝を突いてた所に金貨を落して行きました」と、坊さんは半留布の金貨を掴み上げながら言った。

「あの男に！」と、聖者は金持の商人を指差しながら言った。商人もそれを辭退し切れないうで、有難く頂いた。

「黄金は黄金に」と、僧院の坊さんはいく口を滑らした。

「それから其男に砂糖を入れて遣れ」と、聖者はマヴリーキイ・ニコラーエギーチを指差しながら言った。召使はお茶を注いで、間違へて鼻眼鏡を懸けた貴公子の前へ持つて来た。

「身丈の高い方だ、高い方だ」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは間違ひを正した。

マヴリーキイ・ニコラーエギーチは茶碗を取つて、軍隊的な短いお叩頭をしながらそれを飲み始めた。何故か知らないが、一行は高聲を出して笑ひ動搖めいた。

「マヴリーキイ・ニコラーエギーチ」と、リザは不意に叫び出した。「あの膝を突いてた紳士が行つて仕舞つたら、代りに貴方が其處へ膝をお突きなさいな。」

マヴリーキイ・ニコラーエギーチは目を睨りながら彼女を眺め遣つた。

「お願ひだからよう。後生だから左様して下さいな。ねえ、マヴリーキイ・ニコラーエギーチ」と、彼女は聲を馳まして、頑固に、昂奮して、疾口に饒舌りながら續けた。「貴方は如何しても膝を突かなきゃ可厭よ。貴方の跪いた處を見るんだからさ。貴方が爲さるなきや、私最うお目に懸らないから可い。さア爲て頂戴よ、頂戴よ。」

私は如何いふ積りで、彼女がそんな事を言出したのか知らないが、彼女は發作にでも罹つたやうに飽迄それを言ひ張つた。マヴリーキイ・ニコラーエギーチは、何れ後に解ることだが、近頃殊に頻繁に成つた此の氣の變り易い衝動を彼に對する盲目的な、理由のない憎惡に歸して居た。決して惡意から來るのではない。何となれば、反對に、彼女は彼を尊敬して、尊重もして、心から愛して居た。それを又彼も知つて居たからだ。従つてこれは何うしても一種無意識的な、時としては彼女自身も制御することの出來ない憎惡から來るものに相違ない。

彼は黙つて背後に立つて居たお婆さんの手に茶碗を渡した。それから格子の扉を開けて、招ばれないのに、セミオン・ヤコヴレーギーチの私室へ這入つて行つた。そして、衆皆の見る前で室の真中に跪いた。想ふに、彼の正直な、感じ易い心は公衆の前でリザの粗野な、翻弄するやうな出來心のために、心の底迄傷つけられたのだ。彼は又あれ程自分の主張した彼の不面目を見ては、彼女自身も恥ぢるだらうと想像したのでも有るのだ。勿論、彼の外

には何人もそんな真正直な、危険の多い手段に依つて、此女を理性に連れ戻さうと夢みるやうなものも有るまい。彼は例に依つて眞面目な顔をしながら、にやりともせず、跪いて居た——長く、丈高く、拙劣に、可笑しな風體をして。が、何人も笑はなかつた。思ひ掛けない此所業が一行の上に痛ましい感動を與へたのだ。誰も彼もリザを見遣つた。

「油を塗つて遣れ、油を！」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは呟いた。

リザは急に眞蒼に成つて、聲を上げながら、格子戸を抜けて飛び込んだ。眼にも溜らぬやうなヒステリイ性の光景が續いた。彼女は両手で男の臂を引張りながら、一生懸命に抱き起さうとした。

「起きて下さい！起きて下さい！」と、彼女は氣でも狂つたやうに叫喚いた。「直に起きて下さい、直に！如何して貴方はまあそんな？」

マヴリーキイ・ニコラーエギーチは床から起上つた。彼女は男の兩腕を臂の上で掴みながら、凝乎と相手の顔を見詰めて居た。其眼には恐怖の色が見えた。

「あゝ、お前方は横目を使ふ人間だな」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは再び繰返した。

彼女は漸とマヴリーキイ・ニコラーエギーチを格子の此方へ引張つて来た。一行の中には何となく不安の色が深つた。恐らく其形勢を緩和しようと思つたので有らう、例の貴婦人は強ひて微笑を装ひながら、三度目に聖者に向つて、耳を劈くやうな高聲で呼び掛けた。

「もし、セミオン・ヤコヴレーギーチさま、何とか私に言つて下さいませんか。私は貴方にいろんな事をお願いしようと思つて居るのですよ。」

「此阿魔を——此阿魔どもを抛り出せ」と、セミオン・ヤコヴレーギーチは不意に彼女の方へ振向きながら、粗奔な言葉附で、恐ろしくはつきりと發音した。一行の婦人連は泣聲を立てながら、我先きに表へ遁出した。紳士どもも彼等を護衛しながら、どつと賑やかな笑聲を上げた。斯くの如くにして、セミオン・ヤコヴレーギーチの訪問は終つた。

が、其瞬間に於て、極めて不可思議な出来事が起つた。私が此遠征をこんなに委しく書いたのも實は其爲で有つたのだ。

衆皆先を争つて飛出した時、リザはマヴリーキイ・ニコラーエギーチの手に支へられながら、扉口の押合ひへし合ひに思はずニコラーイ・フシエヴォロードギーチに突當つた。實際、二人はあの日曜日に彼女が氣絶して以來、一度ならず他所で會ふには會つたが、互に近づいたこともなければ、物を言合つたこともないのだ。私は彼等が扉口で一緒に成つたのを見た。私は二人ながら一瞬間立停つて、妙な風で互に顔を見合せたやうに想つた。が、人込みの中だから實際能く見えなかつたかも知れない。一方では又、リザがニコラーイ・フシエヴォロードギーチを腕め着けながら、手を相手の顔の邊りまで振上げた。で、若し相手が素疾く身を退かなかつたら、屹度顔を殴られたらうなどと眞面目に言ふものも有つた。恐らく彼女は相手の顔の表情、若しくは微笑の仕方が氣に入らなかつたので有らう。特にマヴリーキイ・ニコラーエギーチとあんな光景を演じた後だから、そんな事迄氣に成るのだ。私は自分ちや何にも見なかつたことを白狀しなければ成らぬ。が、他の者は皆見たと言ひ張つた。尤も、あんな人込みの際だから、其中の或者は見たにしても、皆見る譯はない。で、私も當座は信用しなかつた。但しニコラーイ・フシエヴォロードギーチが歸る途すがら稍醒めた顔をして居たことだけは、私も記憶して居る。

同じ頃、或は確か同じ日に、到頭ステバイン・トラフイ・モーギーチとブルヴァー・ベトロヴァナとの會見が行はれた。彼女は永い間此會見を心に蓄へて居た、又それを以前の友達に言つて遣りもした。が、如何いふ理由か、それ迄延ばして置いたのだ。此會見はスクヴァーレジュニキで行はれた、彼女は非常に昂奮しながら其別荘へ遣つて來た。其前晚、お祭は州會議長の邸で開くといふことに到頭決定された。が、性急なブルヴァー・ベトロヴァナは、誰が何と言つても、其後直にスクヴァーレジュニキで個人としての饗宴を開く、そして再び町中の人々を招待して見せると、即座に決心した。其上で何方の邸が好いか、客を饗應す上にも、舞踏會を開くにも、何方により多くの趣味が有るか、皆自分々に決定したら可いのだ。彼女は宛然舊のブルヴァー・ベトロヴァナではなかつた。最うすツかり變つて仕舞つた。ステバイン・トラフイ・モーギーチの所謂近寄り難い「上品な貴婦人」は影を隠して、極めて凡庸な、出來心の多い、社交的な婦人がそれに代つた。が、恐らくそれは只表面だけのことも知れない。彼女は空の別荘に着いた時、先づ忠實な老執事のアレキセイ・エゴリーイチと、世間を見歩いて、特に裝飾に長けて居るフォームシユカの二人を伴れて、家中の室々を見廻つた。三人寄つて熟議を始めた、何んな家具を町の邸から取寄せようか、何んな物を、何んな畫を取寄せて、何處にそれを置いたら可からうか、暖閣や花卉は如何したら一番有効に用ひられるだらうか、新しい帷帳は何處に懸けて置かうか、茶葉室は何處にしようか、一つにしようか二つにしようかなどと。で、見よ、こんな大騒ぎの最中、彼女は不意にステバイン・トラフイ・モーギーチを招び寄せようと想ひ着いた。

後者も永い以前から此會見の手紙を貰つて、それに對する準備もして居た。彼は又毎日左様いふ急な召喚を心待ちに待つても居た。彼は馬車に乗つた時、胸に十字を切つた。彼の運命はいよく決せられるのだ。で、別荘へ行つて見ると、彼の友は大きな客間の稍退んだ所に、小さな大理石の卓子を前にして、手にペンと紙片とを持ちながら腰掛けて居た。フォームシユカは物差を持つて、廊下や窓の高さを測つて居た。それを又ブルヴァー・ベトロヴァナが傍から書取つて居た。彼女は仕事の手を休めないでステバイン・トラフイ・モーギーチの方へ點頭した。後者が何か口の中で挨拶らしいことを呟いた時、彼女は急いで手を與へた。で、矢張反方を向いたまゝ、手眞似で傍の椅子に坐らせた。

「僕は五分間許り「心を鎮めながら」待つて居た」と、彼は其後私に語つた。「僕は自分の前に二十年間知つて居た其女を見なかつた。萬事が終つたといふ絶對的確信が僕に勇氣を與へた、あの女自身をすら驚かしたやうな勇氣を與へた。僕は暫つて言ふがね、あの女も最後の一時間に於ける僕のストイシズムには驚いて居たよ。」

ブルヴァー・ベトロヴァナは不意にペンを卓子の上に置いて、ぐるりとステバイン・トラフイ・モーギーチの方へ振向いた。

「ステバイン・トラフイ・モーギーチさん、私達は用件に就いてお話をするのですよ。貴方又屹度例の熱烈な言葉や、いろんな文句を用意してお坐でせうがね、眞直に要點をお話した方が好かア有りませんか。如何お考へですな？」

彼女は今迄とは違つた態度に出ようとして、餘りに急いで居た。で、これからが如何なるのか。「まあ黙つて、私の言ふこと聽いて被坐しやい。其後で貴方も仰有つたら可いでせう、尤も貴方から私に言ふことが有らうとは存じませんけれどもね」と、彼女はべらべらと早口に饒舌つた。「貴方に差上げる年金の千二百留布

は、私も貴方が生きて被坐しやる間は屹度支拂ふだけの神聖な義務が有ると思つて居ますよ。尤も神聖な義務といふ程でも有りませんが、單に契約に過ぎないのですからね。左様言つた方が一層實際的でせう、左様ぢや有りませんか。で、貴方のお心持次第で、契約書を認めて置いて可いのですよ。私が死んだ場合には——それもちやんと考へて置いたのですよ。が、貴方は目下私から住居と、召使どもと、それに貴方の生活費とを受けて被坐しやるでせう。それが金子に計算すると千五百留布許りに成りますね、左様ぢや有りませんか。私はそれに猶三百留布を加へて、總計で三千留布に致しますよ。それだけで貴方は一年足りませんか。餘り少くはなからうと思ひますね。又非常な事でも有つた場合には、又其様に足しますよ。それでですね、貴方は其お金子を受取つて、召使どもを返して下さい。そして、彼得斯堡でなりと、莫斯科でなりと、外國でなりと、乃至此處でなりと、私と一緒にさへなければ宜しいから、貴方のお好きな所で暮して頂きたいものです。解りましたか。」

「其口から同じ様に命令的に、同じ様に不意に、全然違つた要求をお出しに成つたのは、つい近頃でしたな」と、ステバーン・トラフイモーギーは緩やかに、悲しげな調子で判きりと言つた。「私はそれにも服従した……貴方を悦ばせるためにコサツクの舞踏も踊りました。Oui, la comparaison peut être permise. C'était comme un petit Cosaque du Don qui sautait sur sa propre tombe. (左様、此比較は許されるでせうね。眞個、彼自身の墓の上で踊るドン河の小さなコサツク人の様でしたよ)で、今は……」

「まあお待ちなさいッてば、ステバーン・トラフイモーギーさん」と、彼女は相手の言葉を阻んだ。「貴方は恐ろしく言葉数が多いのね。貴方は踊りやアしなかつた。それ處か、新しい襟飾をしたり、新しい手袋を穿めたり、香水を着けたり髪油を塗つたりして、私の許へ来ましたよ。私は斷言しますがね、貴方は御自分も非常に結婚がしたかつたのですよ。貴方の顔に左様書いて有りました。そりやア眞個見苦しい顔附でしたよ。あの時直に私がそれを言ひ出さなかつたのは、單に貴方の面目を潰すまいとする遠慮からですよ。が、貴方は心中に悦んで被坐したのでした。私やダーシに就いてあんな怖ろしいことを手紙に書いて遣りながら、其實結婚がしたかつたのでした。で、ドン河のコサツク人がそれと何の關係が有ります、何が墓なのです？ 私にはそんな比較は解らない。それ處か、貴方は大いに生きるのだ！ 生きられるだけ生きるのだ！ 私も悦んで居ますよ。」

「養老院ですか。」

「養老院で？ 年に三千留布も持つて、誰が養老院などへ行きますものか。あゝ、解りました」と、彼女は笑ひ出した。「ビョートル・ステバーノギーが一度戯談にそんな事を言つてましたよ。成程、あの話の養老院は一種特別のものでしたね。相應に身分のある人達のために拵へたものだと言ふぢや有りませんか。幾人も大佐が居れば、老年の將官も一人居る相ですよ。貴方がそれだけのお金子を持つて這入つて被坐しやれば、屹度大もてにもてよ、召使位附けて呉れますね。其處で貴方は勉強も出来れば、始終骨牌のお仲間も有りませうよ。」

「Pasons (最う止めませうよ)。」

「Pasons (止めませうよ)ですッて！」と、ブルグラー・ペトロヴナも稍退避いだ。「が、それなら、最うそれだけです。貴方も今後二人が別々に生活しなけりや成らぬと云ふことは解りましたでせうね。」

「で、それだけですか」と、彼は言つた。「此の二十年間から残つたものは、それだけですか。それが別離の言葉ですか。」

「貴方は恐ろしくそんな絶叫がお所好ですね、ステバーン・トラフイモーギーさん。そんな事は最う流行りま

せんよ。近頃の人間は皆簡単につけく言ひますからね。貴方は又何ぞと言へば二十年々々と仰有るのね。二十年の間互に虚榮心を交換して暮した、それだけちや有りませんか。貴方が私に書いて下さった手紙は皆私のためにお書きに成つたのぢやない、子孫に對してお書きに成つたのでせう。貴方は文章家ですよ。併し友人では御座いません。友情なぞと云ふのは只華やかな言葉ですよ。實際は——只泥土の投合ひっこをして来た……」

「あゝ！ 悉皆貴方御自分の言葉ではない！ 諷刺した文句ですよ。彼奴等は最う貴方にも自分等の制服を着せましたね。貴方は又それを悦んでお坐だ、日光の中に日向ほこりをしてお坐だ。ねえ貴方、貴方は何れだけ羹の碗を呉れたら、あんな奴等に貴方の自由を賣つてお遣りでしたか。」

「私も他人の文句を繰返すやうな鸚鵡ちや有りませんよ」と、ワルワラ・ベトロウナも佛としながら叫んだ。「御安心なさい、私だつて自分の言ふこと位幾許でも有つて居ますよ。貴方は又此の二十年間私のために何れだけの事をして下さいました？ 貴方は私が貴方のために註文した書物さへ拒んで私に見せなかつたぢや有りませんか。尤も、貴方のお友達でも見なげや、何うせ切らずに打捨つて有るんですがね。最初数年の間、私の指導者としていろいろお訊ねした時、何を貴方は私に與へて下さいました？ 毎も小説でせう、小説の外にもないぢや有りませんか。貴方は私の修養を嫉んで、それでそんな手段をお取りに成つたのでせう。で、其開始終業皆が貴方を笑つて居たのですよ。白状しますがね、私は始終貴方を批評家だと考へて居ました。又、批評家以外に何でもないのですよ。彼得斯堡へ行く途で、私は雑誌を出して一生をそれに捧げる積りだと貴方にお話した時、貴方は人を見くびるやうな眼で私を御覽なさいました。それから急に恐ろしく横柄に成つたのですよ。」

「そんな事はなかつた、そんな……私達はその時只迫害を怖れたのですよ。」

「いゝえ、其通りでした。それに、貴方はあの時分彼得斯堡ちや未だ迫害を怖れてでは有りませんでしたよ。でも、二月あの奴隷解放の報知が来た當時のことを記憶えて被坐しやいますか。貴方はあの時狼狽へて私の許へ走つて来て、遣りかけた雑誌は貴方と何の関係もない、若い者は只私に會ひに来い／＼したので、貴方に會ひに来たのぢやない、貴方は只此家の家庭教師に過ぎないので、未だ俸給を受取らないから同じ家に住んでるばかりだと、只今證書に書いて渡して呉れと私に御請求なさいましたね。左様ぢや有りませんか。貴方記憶えて被坐しやいますか？ 眞個、貴方は生涯他人とは違つて居ましたわね、ステバイン・トラフイモギーチさん。」

「そりやア只私が一時勇氣を失くした瞬間のことで、それも只二人だけの間でしたよ」と、彼は哀しげに呟いた。「ですが、只そんな些細な印象のために何も彼も振捨てし舞ふやうなことが出来ますか、そんな事が出来ますか。此の永い年月の後で、二人の間にそれ以外何にも残つて居ないと云ふやうなことが有りませうかね。」

「貴方は恐ろしく打算的なね。始終私が何か貴方に負ふ所でも有るやうに仰有るんだよ。貴方が外國から歸つて被坐した時は、私を見下して、一言も物を言はせないやうに偽さいましたのね。で、私が旅行から歸つて来て、聖母の印象を貴方にお話しようとした時は、私に耳を藉さないで、私が貴方と同じ様に感ずることが不可能でも有るやうに、襟巻の中からぢろ／＼私を見て笑つて被坐しやいましたのね。」

「そんな事はない。何うもそんな筈は有りませんよ。『M. oullier』(私は忘れませんでしたよ。)」

「いゝえ、左様でした」と、彼女は答へた。「で、最つと甚だしいのは、貴方自身何にも誇るに足るものを有つて被坐しやらないのですよ。あんな事は皆無意味です、貴方の空想です。今日あんな聖母の畫を見て感心するものは一人も、絶対に一人も有りませんよ。時代後れの老人でもなければ、あんな畫に時間を徒費するものは有りませ

んね。最う左様成つて仕舞つたのですよ。」

「左様成つた、と言ふのですね？」

「ええ、あんな晝は何の役に立ちませんよ。此瓶はこれでも水を注ぐことが出来るから役に立ちますよ。又此鉛筆はこれで何でも書けるから、これも役に立ちますよ。が、あの女の晝は自然界に於ける何んな顔よりも劣つて居るぢや有りませんか。まア林檎を晝いて、其傍に眞物の林檎を置いて御覧なさい。何方を貴方は取りますか。貴方だつて豈夫間違へは爲さらないでせう。私達の理論は皆こんな風に行くのですよ、何しろ自由研究の曙光が左様いふ理論の上にも照して來たのですからね。」

「成程、成程。」

「貴方は妙に笑つて被坐しやるのね。で、貴方は慈善に就いても私に何と言つて被坐しやいましたか。が、慈善から導かれるやうな享樂は傲慢で不倫極まる享樂ですよ。富有な人間の富に於ける、權利に於ける享樂、貧乏人と自分との地位の比較から來る享樂ぢや有りませんか。慈善は與へる者も取る者も均しく腐敗させるんですよ。最つと甚だしいのは、慈善其者の目的すら達しられない、そんな物は只貧乏を増すばかりですからね。働くことの嫌ひな親どもが慈善家の周圍に集つて來るのは、恰度博奕打が一儲けしようと思つて賭博臺の周りに集るのと同じことぢや有りませんか。而も彼等に投じて遣る小錢は百分の一にも足りませんよ。貴方は生涯に澤山恵んだことが有りませんか。考へて見たら、一留布もないでせう。まア最近には何時恵んだことが有るか想出して御覧なさい。二年前ですか、それとも四年前ですか。貴方は大きな聲ばかりして、其實何にも爲ないのですよ。あゝ、私は何を言はうとしたのだろ——慈善なぞといふものは法律で禁じたら可いのですよ。ええ、今の儘の社會狀態でも——新しい

政體の下には、貧乏人などは決して有りませんからね。」

「まア何と云ふ寄せ集めの思想でせう？ それぢや、貴方は最う新しい政體まで來たのですね？ 神様よ、何卒此の不幸な女をお助け下さい！」

「ええ、左様ですとも、ステバーン・トラフィモーギーチさん。貴方は注意して私から新しい思想を隠して置いたのですね、今日日ぢや何人でも知らないものはないのに。そして、貴方は私の上に權力が振ひたいばかりに、單に嫉妬の念から左様したのですね。お蔭で、今ぢやあんなユリヤのやうな女でさへ、私の前に百里も出て居ますよ。が、今は私の眼も開いた。ねえ、ステバーン・トラフィモーギーチさん、私は出来るだけ貴方の辯護もしたのですよ。併し貴方を悪く言はないものは一人も有りませんからね。」

「澤山です！」と、彼は椅子から立上りながら言つた。「最う澤山です！ 私も最う後悔より外に貴方にお願ひすることは有りませんよ。」

「最些つと坐つて被坐しやい、ステバーン・トラフィモーギーチさん。私は未だ貴方にお訊ねすることが有りますからね。貴方は例の文學會で何か朗讀するやうに招待されて居るのをお聞き及びでせうね？ あれば私が都合して上げたのですよ。何を讀まうとして被坐しやるか話して下さい。」

「如何して、あの女王の中の女王、人類の理想たるシクストゥス法王の聖母に就いて朗讀する積りですよ。それも貴方のお考へに據れば、洋盃や鉛筆にも劣つて居るのですがね。」

「ぢや、貴方は何うしても歴史的の題目ぢやお話しに成らないのですね」と、ブルワラー・ペトロウナは吃恐したやうに言つた。「が、それぢや何人も貴方の朗讀など聽いてやしませんよ。貴方は何うしてもあの聖母が忘れ

ないのですね。衆皆を睡らせる積りでせうよ。ねえ、ステバーン・トラフイモーギーチさん、私は眞個貴方の利益を思つて言つてゐるんですよ。若し貴方が西班牙の歴史から中世紀の宮廷生活でも題目に取つて、短くて興味の有るお話を爲すつたら、いえ、最つと好いのは、何か面白い逸話に貴方御自身の警句を捏ね合せてお話しなすつたら、又全然話が違つて来ると思ひますね。中世の西班牙には立派な朝廷が有りましたね、貴婦人も、御存じでせう、あの毒殺の歴史も。カルマーチノフさんもね、貴方が西班牙の歴史から何か興味の有る朗讀が出来なけりや、餘程可訝しいと仰有つてましたよ。」

「カルマーチノフ！あの何にも書くことなく成つた馬鹿が——私の題目を捜して呉れるんですつて！」

「カルマーチノフさんと云へば、殆ど帝王のやうな理性を有つた方ちや有りませんか。貴方は眞個お口が過ぎますよ、ステバーン・トラフイモーギーチさん。」

「貴方のカルマーチノフは最う自分の時代を通り越して仕舞つた、意地の悪いお婆さんですよ。ねえ貴方、貴方は何の位前からあんな奴等の奴隷に成つて居るのですか。あゝ神様！」

「今だつて私はあの人の横風な態度には堪へられませんよ。ですが、私は只あの人の理性を尊敬するのですよ。繰返して申しますがね、私も出来る限りは貴方を辯護したのですよ。何故又貴方は飽迄人の物笑ひに成つたり、可厭がられたりしようと爲さるのですか。そんな事をするよりも、舊時代の代表者として威嚴の有る微笑を漏らしながら演壇にお立ちなさい。そして、貴方の才氣に富んだ話振で、二つ三つ逸話を話して遣つて下さい。時には貴方でなけりや言へないやうな事を仰有ることも有るんですよ。今は最う貴方も老人で、過去に屬して居るのですが、實際あの人達の後ろへ取残されて居るのでは有るが、而も貴方は御自分で微笑を漏らしながら、前置の中でそれを

認めたら可いちや有りませんか。そしたら衆皆が貴方を愛嬌の有る、人の好い、才氣に富んだ過去の遺物だと見て呉れるでせう……一言にして言へば、古い香味の有る人だと、そして、少くとも自分が是迄有つて居た思想の有らゆる矛盾を認識する位の程度には進歩した人間だと。さアお願ひですから、私の言ふことを聽いて下さい。」

「ねえ、最う澤山です。最う何にも言つて下さいませぬ。私には出来ない。私はあの聖母に就いて語りますよ。そりやア彼奴等を皆粉砕するか、それとも私一人潰されるか、其處ン所は判らないが、兎に角暴風雨を起して見せますよ。」

「確かに貴方一人が潰されるのですよ、ステバーン・トラフイモーギーチさん。」

「ええ、それが私の運命ですよ。私は卑しむべき奴隷に就いて、手に鉄を持ちながら第一番に梯子を登つて、平等と、嫉妬と……消化との名に依つて、神聖な理想の名書を片々に引裂かうとする、臭い、墮落した阿諛漢に就いて語らうと思つてますよ。私の呪詛をして彼等の頭上に轟かしめよ、それから——それからは……」

「癡癡病院ですか。」

「多分左様でせう。が、私が勝利を得るか、一敗地に塗れるか。何れにしても私は私の養を取上げますよ。乞巧の養を取上げますよ、私は盡く自分の財産と、所有物と、有らゆる貴方の賜物と、年金と、將來の恩澤のお約束とを捨てよ、商人の家に家庭教師と成つて一生を果てるか、それではけりや何處かの溝の中で餓死でもするために裸足で行きますよ。私はこれだけ言つた。Alca Jacta est. (骰子は投げられたり矣)。」

彼は再び立上つた。

「私も數年前から左様思つてましたよ」と、ワルヴラ・ペトロヴナも眼を閃かしながら立上つた。「貴方の生涯

の目的は只私と私の一家を譴誣して恥辱を見せるに有るんだと。商人の家に家庭教師に成るんだとか、溝の中で餓死するんだとか云ふのは、一體如何いふ積りですか。只悪意ですよ、譴誣ですよ、其外に意味はない。」

「貴方は始終私を輕蔑して被坐した。併し私は昔の騎士のやうに、私の貴婦人に對して忠實に死んで見せますよ。貴方の好い評判は私に取つて何よりも大切なものでしたからね。私は今後貴方から何物も頂かない。が、利害の念を離れて貴方を崇拜する覺悟ですよ。」

「何といふ馬鹿な言草ですね。」

「貴方は一度も私を尊敬して下さりなかつた。私にも弱點は澤山有る。左様だ、私は貴方の粟を喰つて生活して来た。が、他人は何とも言はず言へ、單にそれだけが私の目的ぢやなかつた。左様成つたのは自然の成行ですよ。私にも能くは解らない……が、私は始終二人の間には飲み喰ひ以上に何か高い或者が有ると想像して居た。私も決して、聽いて下さい、決して無賴漢ぢやない。で、私も萬事を好くするために出て行くのですよ。私も此の晩い、晩秋の空に家を出て行くのだ。霧は野原の上に横はつて、老年の寒い霜は行手の途の上に置く。風は間近の墓から吹いて来るのだ……が、矢張行くのだ、新しい道に行くのだ。」

「わが夢より生れし信仰と、淨き愛と炎に充たされて。」

あゝ、わが夢よ、さらば！二十年！ Alca Jacta est (骰子は投げられたり矣)。」

彼の顔は不意に湧出した涙に濡れた。彼は帽子を手を持った。

「私には羅旬語など解りませんよ」と、ウルヴラ・ペトロウナは一生懸命に平氣を装ひながら言つた。

誰か知らむ、恐らくは、彼女も今殆ど泣きたいやうな氣がしたのだ。が、憤怒と自尊心とは再び勝ちを制した。

「私にも一つ貴方の仰有ることが皆子供らしい言つて見づくだといふことだけは解つて居ますよ。貴方にはそんな威嚇を實行するだけの氣力が無い、そんな物は皆利己主義の固塊ですよ。貴方は何處へも被往しやらない、商人の家へも被往しやらない。貴方は矢張年金を貰つて、金曜日にはあのやくざな友達を集めながら、私の手の上で平和に世を終りなさいませよ。左様なら、ステバン・トラフイ・モーギーチさん。」

『Alca jacta est (骰子は投げられたり矣)』と、彼は彼女の前に深いお叩頭をした。そして、感情の昂奮に死んだものややうに成つて、我家へ戻つて来た。

第五章 ピョートル・ステパーノギーチの多忙

祭の日取はいよく決定された。それと共にフォン・レムブケはいよく懺悔に成つた。彼は妙な、不吉な豫想にばかり悩まされて居た。それが爲にユーリヤ・ミハイロヴナさへ終ひに心配し出した。實際、物事が皆満足に行かなかつた、吾々の温和な前知事は州のいろんな事務を稍亂雑にして残して置いた。そこへ持つて来て、近頃虎列刺が流行し出した。各所に容易ならぬ家畜の疫病が突發した。夏以來町にも村にも火事が頻繁に起つた。同時に百姓どもの間では放火の噂がだん／＼勢を得て来た。窃盜事件も平常とは二倍も多く成つた。が、こんな事は普通有勝ちなことで、他に最つと重要な理由がなかつたらアンドレイ・アントノーギーチも勿論心の平靜を援されるやうなことはなかつたらう。彼は其時迄實際快活に振舞つて居たのである。

で、ユーリヤ・ミハイロヴナを一番驚かせたのは、彼がだん／＼沈黙に成つて、可訝しいことには、日に／＼隠立てをするやうな容子の見えることであつた、而も、彼が何をそんなに隠すことが有るか想像も着かないのだ。尤も彼は滅多に夫人に反抗するやうなことはない、大抵は黙つて彼女の言ふが儘に成つて居た。例へば、彼女の使喚の下に、知事の権力を強大にするといふ目的から、随分危険な法則を無視したやうな、二三の整理が行はれた。同じ目的のために犯罪まで赦免と成つた二三の不吉な例も有つた。即ち西伯利亞の監獄へ送られなくちや成らぬ筈の人々が、單に彼女が主張したために、却て昇進の恩命に接した。何れ後に出て来るが、或種の訴訟や審問は熱慮

の上系統的に見て見ぬ振をされた。フォン・レムブケは何でも批准するばかりでなく、執務上にも、一たび夫人が自分の領分として極めた部分へは口出しさへ爲なかつた。左様かと思ふと、時としては又「極めて些細な事件」にも強情に反抗して、ユーリヤ・ミハイロヴナを驚かせた。想ふに、彼も數日間沈黙を續けた後では、一寸位反抗して息が吐いて見たいのだ。不幸にも、ユーリヤ・ミハイロヴナは平常洞觀の明を矜つて居ながら、此の穩當な人間の穩當なきちようめんさ加減を理解することが出来なかつた。あゝ、彼女はそれに對して手加減をするだけの考へが附かなかつた。それが又多くの不幸を生ずる根源であつた。

處で、私には書けないことがいろいろ有る。又、實際私は左様いふことをする地位にも居ないのだ。今舉げたやうな州の治蹟を論ずるのも、本來私のすべきことではないのだ。で、私は全然そんな政治上の見地から此問題に觸れることは止めた。此年代記には、別に私の執るべき仕事があるのだ。加之、過日來吾々の州のために任命された審問委員の手で、いろんな事が白日の前に曝されるで有らう。それも間もないことだ。尤も、或程度の説明は省略し難い。

で、ユーリヤ・ミハイロヴナに歸つて述べやうなら、此の憐れな夫人——私は彼女に對して大層氣の毒に感じてる——は、頭から自分で決めて懸つたやうな、あんな猛烈な、突拍子もない手段を取らないでも、彼女を誘ひ惹附けたやうなもの——名聲だとか威權だとか——は皆手に入れることが出来たのだ。が、ロマンティックなものに對する誇大した情熱からか、それとも若い時餘りに屢々希望の凋落した所爲か、何方か知らないが、兎に角彼女は運命の轉變に會した時、急に自分が撰まれたものゝ一人で有るやうな、殆ど神から油を塗られた一人で有るやうな、そして、其人の「頭の上には燃える火焰の舌が輝いて居る」やうな氣に成つた。此火焰の舌が不幸の根源に成

つたのだ。何と成れば、それは要するに何んな婦人の頭にも似合ふやうな束髪とは違つて居たからで有る。が、世の中にそれを婦人に説得する位困難なことはないのだ。それに反して、婦人の幻影を焚き附ける側に廻つたら、何んな者でも成功疑ひなしで有る。處で、衆皆が競争してユリーヤ・ミハイロヴナの幻影を焚き附けようとしたものだ。憐れな女は忽ちにして互に撞着する影響の玩弄物と成つて仕舞つた。それで當人は飽迄自分の獨創を信じて居るのだからお目出度い。此時に於ける彼女の短い期間の支配下に、精巧な連中は皆彼女のお心好しを利用して自ら肥したものだ。又此の一人合點の獨創の下には、何れだけの混亂が含まれて居たことであらう。彼女は一時に貴族的要素と、大地主制度と、知事の権力の増大とに、又民主的要素と、新しい改革や主義と、自由思想や社會主義的概念の斷片とに、又貴族的客間の正格な調子と、彼女を取巻く若者どもの自墮落な、殆ど居酒屋とも云つて可いやうな風習とに心を惹かれて居た。彼女は「幸福を與へる」ことを、調和すべからざるものを調和することを、換言すれば、彼女自身の人格の崇拜の中に有らゆるものを統一することを夢想して居た。彼女は又寵人を持つて居た。彼女は特にビョートル・ステバーノギーチを寵愛したが、男の方でも時々極めて粗大な阿諛を敢てしながら、彼女を纏つて居た。が、彼女は最一つの理由で彼に心を惹かれて居た。それが又驚くべきもので、彼女の性格の特徵を成して居る。即ち彼女は始終彼が政府に對する陰謀を内通して呉れるものと信じて居たのだ。そんな事は想像するさへ困難で有るが、事實左様だから仕方がない。彼女は何かの理由から此州の中に虚無黨の徒黨が隠れて居るものと想像して居た。或時は沈黙に依つて、或時は又故と暗示を與へて、ビョートル・ステバーノギーチは彼女の此の奇的烈な考へを煽るやうにした。彼女は彼が露西亞に於ける有らゆる革命の兒と交通して、同時に心から彼女に歸依して居るものと想像して居た。陰謀を發見して、政府の感謝を受けて、華々しい出世をして、青年どもを

「親切」で手懐けて、彼等を極端から救つて遣ると云ふやうな、左様いふ夢想が、と彼女の幻想的な頭の中に並存して居た。彼女はビョートル・ステバーノギーチを救つた、彼を征服した——これに就いては、何かの理由から堅く確信して居た——これからも悉皆救つて遣るのだ。一人も、一人も死んでは成らない。彼女が皆彼等を救つて遣るのだ、彼女が彼等を拾ひ上げて遣るのだ、彼女は最高の正義のために働くのだ、恐らくは後世の批判と露西亞の自由主義とは彼女の名を祝福することであらう。而も陰謀は忽ち發見せられるのだ。畢竟有らゆる利益が一時に來る譯で有る。

が、それにしてもアンドレイ・アントノギーチが祭の前に最少し快活にして居なければ困る。如何かして氣を引立て、遣りたいものだ。彼女は此目的のためにビョートル・ステバーノギーチを送つた。彼が一番好く心得て居る慰藉の手段に依つて、恐らくは未だ何人も知らないやうな一種の報告をすることに依つて、相手の沈鬱を救つて遣つて呉れるだらうと云ふのだ。彼女は彼の巧妙な手段に心から信用を置いて居た。

ビョートル・ステバーノギーチがフオン・レムブケの書齋を訪れなく成つてから可成久しい。彼は相手が最も強情な氣分に成つて居る時突入して行つた。

二

フオン・レムブケが手古摺つて仕舞ふやうな事件が後から後へ起つて居た。ビョートル・ステバーノギーチが、先頃士官連と一緒に大騒ぎをして來た地方の町で、或少尉が上官から譴責を喰つた。それも大勢の前で、たか遣られたのだ。其少尉は彼得斯堡から來たての青年で、始終むつとりとして押黙つた、身丈が低く、強壯で、紅

い頬邊をして居るが、何處か威かめしい風采を具へて居た。彼は此譴責を怒つた。不意に傍に居る者を悉皆吃驚させるやうな、頓狂な叫聲を發しながら、野猪のやうに頭を下けて、相手の士官を目蒐けて突進した。そして、全身の力を罩めて相手の肩に喰ひ着いた。傍の者は漸くそれを引離した。想ふに、其男は氣が狂つたのも有らう。兎に角、彼が近頃眞實とは思はれないやうな、突飛な眞似を爲い／＼して居ることが知れた。例へば、彼は宿の主人の所有する偶像を二つ窓から抛り出して、其一つを斧で敲き碎した。彼は又自分の室の讀經臺に似た三つの臺の上に、フォークト、モレシヨット、ビュヒネル三人の詩集を載せて置いて、其前に教會で點すやうな蠟燭を上げるのを常とした。其部屋で發見された書物の數から推して、彼が大した讀書家で有つたと云ふことが想見された。若し彼に五萬法の金子が有つたら、彼は恐らくヘルチエンが其述作中にユーモラスな態度で暗示した一士官候補生のやうに、船に乗つてマルクイサスの島へ押渡つたに違ひない。彼が捕縛された時、衣囊や宿の部屋の中から極めて猛烈な革命の檄文が發見された。

そんな檄文などは詰らないものだ。又私の考へから云へば取るにも足らないもので有る。私どもは随分數々の檄文を見た。加之、此檄文は新しいものでもなかつた。後で判つた通りに、X州で配布されたものと同一の物で有つた。六週間前に、其地方並びにそれに隣接した州を旅行したリープティンは、其時其處で恰度同じ紙片を見たと言した。が、一番アンドレイ・アントノーギーチの心を脅かしたのは、同じ頃シュビーグリン工場の監督が少尉の衣囊に發見されたものと恰度同じ紙片を二三東警察へ差出したことだ。其末は夜間こつそり工場の中へ抛り込まれたので、未だ開けてもなければ、職工も未だ一人としてそれを見る隙はなかつたのだ。些細な事件では有るが、アントレイ・アントノーギーチは深く考へ込んで仕舞つた。其形勢が極めて不愉快な、複雑な光に於て、彼の前に現はれた。

恰度其頃此の工場には、最初吾々どもの噂の種子に成つて、後には彼得斯堡や莫斯科の新聞に迄とり／＼に掲載された、例の有名なシュビーグリン事件がそろ／＼醗酵し掛けて居た。三週間前に職工の一人が病氣に罹つて、亞細亞性の虎列刺で死亡した。それから數人が斃れた。町中が恐慌した。と云ふものは、該虎列刺はだん／＼近接して来て、恰度隣の州迄来て居た處で有つたから有る。此の不意の客人に對しては、出來得る限り満足な衛生的防禦手段が講ぜられて居た。が、此工場は富豪として知られ、且歴々の間に縁邊を有するシュビーグリン家に屬して居た處から、それとなく看過されて居た。處で、そんな事が有つたものだから、急に此工場は傳染病の温床で有る、工場それ自身が、特に職工の住んで居る區域が爪先も立てられない程汚れて居る、近隣迄虎列刺が押寄せて來なくとも、其處から突發しさうだと云ふやうな噂が人々の口端に上つた。勿論、即刻應急の手段は取られた。アントレイ・アントノーギーチは猶豫なく三週間内にそれを實施することを強硬に主張した。工場には大清潔法が行はれた。が、シュビーグリン家では何か知られない理由の下にそれを閉鎖した。シュビーグリン家の兄弟の一人は始終彼得斯堡に住んで居た。一人は工場に清潔法を行へといふ命令が下ると共に莫斯科へ行つて仕舞つた。監督は賃銀を支拂ふ責に任じながら、破廉恥にも職工どもを欺いたものらしい。職工どもはぶつ／＼不平を滾しながら、公平な支拂ひを請求した。そして、愚かにも警察へ訴へて出た。尤も、新聞が報道したやうな、大きな騷擾はなかつた。監督がアントレイ・アントノーギーチの許へ檄文を持參したのは、恰度其際で有つた。

ビョートル・ステバーノギーチは親しい友達か、家族の一人でも有るやうに、案内も乞はないで書齋へ飛込んで來た。それに彼はユーリヤ・ミハイローヴァの使命も持つて居た。彼を見ると、フォン・レムブテは顔を蹙めながら

ら、挨拶もしないで、卓子の傍に立停つた。其時迄彼は書記のブルームと二人限りで何事かを相談しながら、彼方此方と書齋の中を歩き廻つて居たのだ。此書記は彼がユーリヤ・ミハイロヴナの反対が有つたにも係らず、彼得斯堡から伴れて来た、舉止應對の拙劣な、ねち／＼した獨逸人で有る。ビョートル・ステバーノギーチが這入つて来たのを見ると、書記は扉口の所迄行つたが、出て行かうとはしなかつた。加之、ビョートル・ステバーノギーチには二人が何か意味有りけな眼眊せを交したやうにも想はれた。

『あゝ、私も到頭貴方を捕まへましたね。おい、此町の闇黙家の王様！』と、ビョートル・ステバーノギーチは聲を上げて笑ひながら叫んだ。そして、其手を卓子の上の檄文に置いた。『又一枚蒐集が殖ゑましたね、え？』

アンドレイ・アントノギーチは眞報に成つて腹を立てた。彼の顔は引釣るやうに見えた。

『構ふな、構ふと言ふに！』と、彼は憤怒に顔をながら嗚鳴つた。『君がそんな事を言ふ資格はないよ。え、君！』

『如何したんです 大分憤つて居られるやうですね。』

『あゝ、君に言つて置くがね、僕は今後は迄のやうな君の無作法を許して置かない積りだからね、何卒左様思つて呉れたまへ……』

『如何して、馬鹿な、此人は本當に憤つてるんだよ。』

『お黙りなさい、お黙りなさい』と、フォン・レムブケは絨氈の上に足踏み鳴らした。『君はそんな……』

此先如何成るか、神様でなけりや御存じ有るまい。嗚呼、これにはビョートル・ステバーノギーチも、ユーリヤ・ミハイロヴナですら想ひ及ばないやうな仔細が有るのだ。不幸なアンドレイ・アントノギーチは潜に細君とビ

ョートル・ステバーノギーチとの間を邪推して、此の四五日以来全然顛倒して居るのだ。一人居の際には、特に夜間に於ては、彼は何とも言はれない不愉快な瞬間を送つた。

『え、私はね、或人が二日間も打通して眞夜半過ぎ迄自作の小説を読んで聴かせて、それに對する相手の意見を徴したとすれば、其人は兎に角自分の行爲からして役目の上の關係など捨て居るのだと想ひましたよ……ユーリヤ・ミハイロヴナは友人として私を遇して下さる。それだつて、何も貴方がお腹立になるやうな理由はなからうと思ひますがね』と、ビョートル・ステバーノギーチは一種の威厳を纏ひながら言出した。『序ながら、此處に貴方の小説が有りますよ。』彼は青色の紙に包んだ、大きな重たい草稿を卓子の上に抛り出した。

レムブケは顔を赧らめながらまご／＼した。

『何處にこれが有りました？』と、彼は返上げて来る嬉しさを隠さうとして、一生懸命に骨を折りながら、おづおづ訊いた。

『如何でせう、此通りに包んで、机の抽斗の下に轉がつて居ましたよ。あの時私が自宅へ歸つて、何の氣もなく机の上に抛り出して置いたのが轉がり落ちたものと見えますね。一昨日床の掃除をした時、漸つと出て来ましたよ。だが、私もこれを読むのは眞個骨でしたね。』

レムブケは直様眼を床に落した。

『お陰で、私は二晩といふもの全然眠らなかつた。一昨日見附けだしたんですがね、それからずつと讀み續けたものですよ。私も晝間は隙間がないから夜間讀んだ。正直のところ餘り所好ぢやありませんね、斯う云ふなア私の物の觀方ぢやないが、そりやア如何でも好い。私は元々批評家ぢや有りませんからね。だが、私は所好ぢやない』

のだが、如何しても巻を措くことが出来なかつた……畜生ッ、何うも言語に絶して居るのでね！又随分滑稽味をふんだんに盛込んだものぢやありませんか、私は眞個笑はされちやつた！貴方はこつそり目立たないやうに人を笑はせることが旨いよ。第九章と第十章とは皆變愛問題ですね。此奴は私の領分ぢやないが、併し力強いものですよ。私はエグレーネフの手紙を見ちやア殆ど聲を上げて泣かうとした……眞個あれは感動させますよ、同時に貴方はあの男の虚偽的方面をも表さうとして被坐しやるがね。如何です、お手の筋でせう？だが、結末に到つては、全然反對ですね。一體如何いふ結論に導かうとしたのですよ。何だ、子供を生んだり、金子を儲けたり、昔ながらの舊い家庭的幸福の讚美ぢやありませんか、「二人は結婚して、其後永く幸福に暮した」——ねえ、これぢや堪りませんよ。貴方は讀者を魅するだけの力を有つてお坐だ、私ですら感服して本を措くことが出来なかつた位ですからね。だが、それだけに猶更不好ませんよ。讀書界はそりや依然として愚なものです。が、彼等を覺醒して遣るのが進んだ者の義務ぢや有りませんか。それなのに貴方は……併しまア好うがす、左様なら。此次はそんなに意地悪く爲さらないやうに願ひます。私も貴方に一言二言お話ししたい事が有つて来たのですがね、貴方がそんなに寄つても附けないやうな顔をしてらしちや……其間アンドレイ・アントノフは小説を取つて棚の本箱の中へ納ひながら、ブルームルに出て行くやうに目向せした。後者は長い、哀しげな顔をしながら出て行つた。「僕がそんなに機嫌の悪い顔をしてるかね、僕は只……いや、只一寸何したばかりだよ」と、彼は顔を盛めながら、打解けて卓子の前に座を占めた。まア下に坐つて、言ふことが有るなら話して呉れたまへ。ピョートル・ステバーノフ君、君に會つてから随分久しいものだね。只向後は何卒あんな風にして飛込んでだけは来て呉れたまふな……時として、用事をして居る場合には、何だからね……」

「私の態度は何時だつて同じですよ……」

「そりや解つてる、君が如何いふ氣でもない」と云ふことは解つて居るがね、時としては困ることが有るんだよ……まア坐つて呉れたまへ。」

ピョートル・ステバーノフは直様長椅子の上にならなく凭れて、兩足を踏み伸ばした。

〇 三

「何んな困る事が有るなさるのです？眞逆こんな話らない物ぢやないでせうね。」彼は顔で檄文を指示した。「そんな物なら、お所好なだけ持つて来て上げますよ。私も文州でそれと近附に成りましたからね。」

「君が彼處に居た時分にと言ふんだね？」

「勿論、居ない時に成り様が有りませんよ。何でも頂邊に斧が書いて有つたと想ひますがね。御免なさい」と、彼は其檄文を手を取つた。「左様だ、矢張此處にも書いて有りますよ。これです、全然同じ物ですよ。」

「左様、斧が書いて有る。可いかい、斧だよ。」

「ぢや何ですか、貴方は斧がそんなに怖いのですか。」

「いや、怖いことはない……何も怖がる譯ぢやないがね。此事件には……未だ其處に……いろいろな事情が有るんだよ。」

「何んな事情が？工場から出たといふことですが。へッへえ！ですが、あの工場ぢや今に職工どもが自分で檄文位書くやうに成りますぜ。」

「そりやア如何いふことだ？」と、フォン・レムブケは厳しい眼を向けた。

「何でも有りませんや。只貴方が彼奴等を好く監督したら可いんですよ。アンドレイ・アントノフ・ギーチさん、貴方は餘り温和し過ぎるのだ。貴方は小説を書かれるが、これは舊式な手段で遣附けなくちや不可ませんよ。」

「舊式な手段とは如何いふことだ？何か私に忠告して呉れることが有るのかい。工場には清潔法を行つた。僕が命令を下して、彼等が其通りに行つたぢやないか。」

「そして、職工どもは暴動を起すのでせう。彼奴等は一人残らず毆つて遣らなきや駄目ですよ。左様すりや、お仕舞ひでさ。」

「なに暴動？馬鹿な！僕が命令を下して、彼等はそれを實施したぢやないか。」

「えよ、それだから貴方は温和し過ぎるのですよ。」

「第一に、僕は君が考へて居る程温和な人間ぢやない。次には……」と、フォン・レムブケは再び激して來た。彼は此若者が何んな新奇な事を告げるかと、それを待ち構へながら、好奇心の下に努めて相手に成つて居るのだ。

「はよア、此處にも舊い馴染が居ますね」と、ビョートル・ステバーノギーチは算の下に成つて居る一枚の書類を引渡しながら、相手の言葉を遮ぎつた。矢張檄文のやうなもので、詩の體を成した、明かに外國で印刷されたもので有る。「あよ、これも私は請でおほえて居ますよ。矢張左様だ、「高き人格」と云ふんでさ。私は此人格と外國で近附に成りましたよ。何處からこんな物掘出しましたい？」

「君はこれを外國で見たと言ふのか」と、フォン・レムブケは熱心に訊いた。

「えよ、左様ですよ。四箇月前、それとも五箇月前でしたかな。」

「随分君はいろんな物を外國で見たのだね」と、フォン・レムブケは狡猾相に相手を見遣りながら言つた。

ビョートル・ステバーノギーチは委細構はず、其書類を開いて、高聲に讀み下した。

高き人格

彼の生れは名門に非ず、

平民の中に成長つて、

王者の嫉みに國を逐はれ、

東に西に彷徨ひ行きぬ。

彼は終に身を殉教者の

撰べる道に捧げつよ、

人に教へて廻りけり

自由を、愛を、平等を。

かくて暴動の起れる時、

彼は身を以て遁れたり

外國へ、鞭と牢獄と

絞首臺の刑を遁れむと――

而も人民は所在に蜂起して、

自由のために闘へり。

スモレンスクよりタスケントまで

人皆其學生の名を喚ぶよ。

今や時來つて、

ザアの政事は

新しき力の下に

やがて涙ふべきぞ、

教會や結婚や家庭と共に。

地の上の新しき國には、

富も財産も

皆齊し並に頌たるべし。

「貴方はこれをあの士官から獲たのですね、ええ？」と、ビョートル・ステバーノギーチは訊いた。

「ちや、君はあの士官も知つて居るんだね？」

「そりやア知つてますとも。私は二日間あの男と一緒に酒を飲んで廻つたものですよ。其時分から眞個狂人に成り相でした。」

「いや、あの男は多分狂人ぢやアないね。」

「あの男が他人の肩に噛み着いたから左様言はれるのですか。」

「併し何だね、君が前に此詩を外國で見たとして、其後あの士官の懐中に有つたとすれば……」

「何を馬鹿な！ねえ、アンドレイ・アントノフ・ギーチさん、貴方は私を檢べやうとして被坐しやるやうですね？アお聴きなさい」と、急に非常な威嚴を取繕ひながら言出した。「私が外國で見たものに關しては、私は既に辯解を與へた。そして、其辯解は満足なるものと認められた。又それでなければ、今頃かうして香氣に此町へ遣つて來ちや居られませんよ。私は自分に關する問題は最早解決されたものと考へて居る、従つて何人にも此上申開きをする義務は負んで居ない。それも私が密告者だからと云ふのではない、私は自分が爲たやうにしか爲ることが出来なかつたからですよ。私のことをユリヤ・ミハイロフナに紹介して寄越した方々が何も彼も御存じだ……そして、私を正直な人間だと認めて居られるのですよ。が、そんな事は如何でも可い、私は或眞面目な要件に就いて貴方に會ひに來たのだ。貴方があの煙筒掃除人を遠ざけられたのは、眞個好い鹽梅ですよ。アンドレイ・アントノフ・ギーチさん、此奴は私に取つて大切な事件ですね。私は貴方に一つ大きなお願ひが有るんで御座いますかね。」

「お願ひ 夫む、如何したと言ふのですか。先づ承はりませうよ、大分面白さうな話だね。白狀するが、君は實際今日僕を驚かせてばかり居るよ。」

フオン・レムブケは稍昂奮して居た。ビョートル・ステバーノギーチは足を斜ひに組んだ。

「彼得斯堡ぢや」と、彼は言出した。「大抵何も彼も饒舌つて仕舞ひましたがね、中には黙つて居たことも有りますよ。例へば、これでさ」と、彼は其の「高き人格」を指で敲いた。「と云ふのは、第一饒舌るだけの値打がないからですね。次に、私は只質問に答へたばかりですよ。私もこんな事件に差出口をする氣は有りませんからね。其處に

悪漢と事情に依つて止むを得ず口を開く正直な人間との區別が有りますよ。要するに、ま、そんな事は如何でも可いんですがね。が、今は……あの馬鹿者どもが何する今は……これが表面に現はれて、貴方の手に這入つた今はずね。貴方がこれに就いて悉く発見されるのは、私にも解つて居る——貴方も眼の有るお方ですからね。そして、貴方が何を爲れるかは前以て何人にも解らない。而もあの馬鹿者どもは未だ續いて居るとすれば、私は……私は……畢竟事實は斯うです、私は或人間を助けて下さいと貴方にお願ひに來た。其奴も馬鹿です、如何かすると狂人かも知れませんがね。が、其者の年少に免じて、不幸に免じて、人道の名に於て助けて下さいとお願ひするのですね……貴方も自分でお作りになる小説の中ばかりで、彼様人道的な譯ではないでせう！」と、彼は不意に苛々しながら露骨な諷刺で言葉を途切らした。

成程、此男は真正直で打切棒な、人道的感情の過剰から、恐らくは過度の感性から外交術に迂闊な男に違ひない。殊に如何やら智慧が足りなさ相だ——と、斯うフオン・レムブケの法外に鋭い眼は直に見て取つた。實際、彼は永い間これを疑つて居たのだ。特に先週中、夜間書齋に獨坐しながら、此男がユーリヤ・ミハイロヴナに取入つた何とも説明の着かない手段に對して、潜在曠志の炎を燃して居た間に、時々そんな事を考へて見たのだ。

「君は誰のことを頼んでるのだ。一體、如何いふ積りなんだい？」と、彼は自分の好奇心を隠さうとしながら、鷹揚に訊き返した。

「そりや……そりやア……えと糞ッ！ 貴方を信用したからつて、私の咎ぢやない！ 貴方を最も誠實な、特に物の解つた方と……即ち何を……えと糞ッ、理解することの出来るやうな方だと思つては、私が悪いのですか。」

可哀相に、此男は自分の感情を制敵することが出来ないのだ。

「兎に角、貴方もこれだけは理解して下さいさなくつちや不可ない」と、彼は續けて言つた。「私が其男の名を口にするのは即ち其男を裏切るもので有ると云ふことを理解して下さいさなくつちや——私は其男を裏切らうとして居る、左様ぢや有りませんか。え、左様ですか、左様ぢや有りませんか。」

「併し君が如何しても言出すだけの決心が着かなければ、僕には想像が出来ないね。」

「其處ですよ、貴方は毎時貴方の論理で人の足を縛つて仕舞ふのだ、畜生ッ……うむ、如何でも成れ……此の「高き人格」と云ふのは、此の「學生」と云ふのは……シャトーフですよ……それだけです。」

「シャトーフ？ シャトーフだと云ふのは如何いふ意味だい。」

「シャトーフが此中に書いて有る學生なんです。此男は此處に住んで居ます、以前は奴隸でした、最近頬邊を殴つた男ですよ。」

「あゝ知つてる、知つてる」と、レムブケは眼を剥きながら言つた。「だがね、一體あの男が何を爲たと言ふんだね？ 第一には、肝心な問題として、君は何を頼まうと言ふんだね？」

「私はあの男が助けて頂きたいのですよ、解りましたか。私は八年以來あの男を知つて居るので、まア友達の間柄です」と、ピョートル・ステパーノギーチはすつかり昂奮しながら叫喚いた。「が、私は自分の過去をお話しなければ成らぬといふ義務は負はない積りだ」と、彼は手を横に振りながら附加へた。「要するに、何でもない事なんです。三人と半分の事件なんです。外國に居る者も加へたら十二人位に成りますかな。が、私の手頼に思ふのは、貴方の人道と聰明に有るのですよ。貴方は此事件が眞個……不幸のために、打續く不幸のために狂人に成つ

た男の愚劣な夢に過ぎない、決してそんな出来もしない政事上の陰謀といふやうなものぢやないと云ふことを理解もして下されば、又それを青天白日の下に立證しても下さいませう？」

彼は殆ど息も續けない位で有つた。
「ふむ。で、其男が此の斧を書いた檄文の責任者だといふことは解つたがね」と、レムブケは鷹揚に結論を下した。「只、其男一人が關係したものだとなれば、如何して此處にも、X州に於ける諸地方にもそれを振撒くことが出来たらうね……殊に何處からそれを手に入れたものだらう？」

「が、前にも言つた通り、高々四五人位しか關係した者はないのですよ、それとも十二人位居ましたかね。何分私には解りませんよ。」

「君が知らない？」

「何うして私が知つてますものか——えゝ畜生ッ！」

「だが、君はシャトーフが徒黨の一人だといふことを知つて居たぢやないか。」

「あゝ！」と、ビヨートル・ステバーノギーチは相手の心の底迄見抜くやうな、鋭い洞觀力を避けるやうに手を振りながら言つた。「宜しい。では、何も彼も言つて仕舞ひませう。檄文に就いては、私は何にも知らない——絶對に何にも知らない。畜生ッ、何にも云ふのは如何いふことだか知つてますか……で、あの少尉は勿論として、恐らくはシャトーフも其一人でせう、他に又何人が加はつて居たとして、まあそんな物ですよ。それだけで悉皆ですよ……が、私はシャトーフのためにお願いに來たのだ。何卒あの男を助けて遣つて下さい。此詩はあの男の、あの男自ら作つたもので、あの男の手に依つて外國で出版されたのですからね。私が確に知つてるのはこれ

だけです。が、檄文に就いては、私は實際何にも知らない。」

「此詩があの男の作だとすれば、宣言書も矢張左様の筈ぢやないか。併し君がシャトーフを疑ふに就いては何か證據が有るのかい。」

ビヨートル・ステバーノギーチは堪忍袋の緒を切らした人のやうな態度で、衣囊から手張を取出して、其中から一枚の書狀を抜出した。

「證據は此處に有りますよ」と、彼はそれを卓子の上へ抛り附けながら叫んだ。

レムブケは其書狀を開いて見た。それは六箇月前に此處から外國に居る何者かへ宛てて送られたもので有つた。短い手翰には、只二行だけ走書きして、

「此處では「高い人格」を印刷することが出来ない。實際僕は如何することも出来ないのだ。何卒外國で印刷して呉れたまへ。イブリン・シャトーフ。」

レムブケはぢろくくと相手を見遣つた。ブルヴァー・ベトロヴァナが嘗てあの人は時々羊のやうな表情をすると言つたのは、眞個當を得て居た。

「御覽なさい、此通りですよ」と、ビヨートル・ステバーノギーチは憤然として言つた。「あの男は此處で六箇月以前に此詩を書いた。が、此處ぢや秘密に印刷することが出来なかつたものだから、外國で印刷するやうに頼んで遣つた……火を睹るよりも明白ぢや有りませんか。」

「成程、それは明白だ。が、誰に宛てて此書を送つたものだらうね？其點が未だ明らかぢやアないよ」と、フォーン・レムブケは随分輕妙な反語を含ませながら言つた。

「何うして、そりやア勿論キーリロフですよ。此手紙は外國に居るキーリロフに宛てて書かれたものですよ……そんな事位貴方は御存じの筈だ。故と私の前で知らないやうな顔をして被坐しやるのでせう。だから、此方で弱つちやふんだ。え、屹度貴方は此詩のことも、何も彼も疾くから御存じなんだ。でなけりや、如何してこれが此卓子の上に有るのです？ 兎に角、此手紙は貴方の手に入つたのだ。それなのに、如何して貴方は私を苦しめるんですよ。」

彼は熱に浮かされたやうに。半巾で額の汗を拭つた。

「そりやア僕も少許は知つてるさ」と、レムブケは手際よく受け流した。が、其のキーリロフといふのは一體何者だい？」

「近頃此町へ遣つて来た土木の技師ですよ。スタフロイギンの介添をした男で、狂人ですよ、癡癡患者ですよ。例の少尉は一時的の發作に陥つたものかも知れないが、此のキーリロフに到つては正真正銘の狂人でさ——え、それだけは私が保証しますとも。あ、アンドレイ・アントノフチさん、政府も此徒黨の連中が何んな人間で出来上つて居るかを知つたら、恐らく彼等の上の指を加へるだけの勇氣は有りますまいよ。あの連中は一人残らず皆癡狂院へ送られる奴でさ。私は瑞西でも集會で好く彼奴等を見届けて置きましたよ。」

「其處から此處の運動も指揮して居るのだらう？」

「如何して、誰が指揮するのです？ 三人半ぢや有りませんか。眞個、彼奴等のことを考へると可厭に成つて仕舞ひますよ。又、此處に何んな運動が有りますか。機文ですか。又、何んな連中が徒黨しましたか。頭の變に成つた少尉に二三の學生と！ 貴方も物の解つた方だ、何卒此質問に答へて下さい。何故身を持つた眞面目な連中がそ

れに加はらないのですか。何故皆學生や二十一二の生半可な青年ばかりですか。それも決して数は多くないのだ。まア何萬といふ獵犬が彼奴等の跡を追掛けてまさ。ですが、何れだけの人数を嗅ぎ出しましたか。七人ですか。眞個可厭に成つて仕舞ひますよ。」

レムブケは注意して聽いて居た。が、「君もお伽話ぢや、驚を飼はれないよ」と云ふやうな顔附を装つて居た。

「だがね、君は此手紙が外國へ送られたと言つたらう。が、何處にも宛名がないぢやないか。如何して君はそれがキーリロフへ宛てて送られたものだと言ふことを知つたのだい、而も外國へ……それに……それに……それに、實際これがシャトーフ君の手に成つたと云ふことも？」

「ぢや、何でも可いからシャトーフの書いた物を持つて来て、これと較べて御覽なさい。貴方の政廳にも何かあの男の書いた署名が有るでせう。又これがキーリロフに宛てたものだと言ふことは、キーリロフ自身當時それを私に見せたのですよ。」

「ぢや、君自身何だね……」

「勿論、私自身左様でしたよ。彼處ぢや私もいろんな物を見せられましたよ。此詩に關しては、ヘルチエンがシャトーフの未だ外國に彷徨いて居た時、あの男に會つた記念として、謂はど讃歎若しくは推獎の意味で書いて渡したもんだと云ふことですがね、え、畜生ッ……で、シャトーフは「これがヘルチエンの自分に對する意見だ」と言はむばかりに、青年の間に觸れ廻したもんですよ。」

「はアア！」と、レムブケは漸と其眞相が解つたやうに感じながら叫んだ。「僕が知りたいと思つて居たのは其處だよ。機文なら兎に角解つて居るが、此詩に何の目的が有るだらうと思つてね。」

「で、最うお解りに成つたでせう。私は又何のために斯んな事を喋舌つて居たのだ！ねえ、シャトーフだけは何卒私のためだと思つて助けて下さい、他の奴等は如何でも可う御座います——ええ、キーリロフだつて、此男は今フィリポフの家に閉籠つて隠れて居ますがね。あの家にはシャトーフも泊つて居ますよ。彼奴等は私が戻返りを打つたと云ふので憎んで居ます……ですが、シャトーフだけは約束して下さい。左様すりや、他の連中は私が一網にしようとして居ますよ。私は役に立ちますよ、アンドレイ・アントノフ・ギーチさん。九人か十人上りや、あの仲間はそれでお仕舞ひだと思つて居ますがね。私は自分自身のためにも彼奴等を見張つて居るんですよ。先づ三人は判つて居るでせう、シャトーフとキーリロフに、例の少尉と。他の連中もちやんと眼を着けて居ますよ……それに、私も餘り眼は利かない方ぢやありませんからね。ええ、屹度X州の場合と同じ事ですよ。大學生が二人にギムナチウムの生徒が一人、二十臺の貴族が二人と、一人の教師と、酒のために半分狂氣に成つた六十餘りの大佐が一人、人機文と一緒に捕まつたばかりでさ。それで悉皆でしたよ——安心して被坐しやい、それで悉皆でしたよ。それで悉皆と云ふのは眞個驚きましたね。が、私も六日間は待つて貰はなくちや成らない。勘定をして見たが、何うも六日より少くちや駄目ですよ、貴方も此處一つ手柄を立てようと云ふ思召があるんなら、六日間は静乎として居て下さい。左様すりや、私が一つの石で鳥を悉皆殺して上げますよ。だが、シャトーフだけは勘辨して下さい。私はシャトーフのために願つて居るんですよ……一番好い工夫は、あの男をこつそり此處へ、友達のやうな風で此書齋へ連れて来るんですよ。それから明らさまに事實を枉げないで、あの男に訊くんですよ。あの男は屹度貴方の足下に身を投伏して、涙に暮れますよ、左様いふ心の張詰めた、不仕合せな男でさ。何しろあの男の細君はスタッフローギンと墮落ちしたんですよ。あの男に少許親切にして遣つて御覽なさい、何も彼も言つて仕舞ひますよ。です

が、六日間は待つて下さい……殊に、殊に肝心なのは、ユーリヤ・ミハイロフナには何にも仰有つちや不可ませんよ。秘密ですからね。此秘密が保てますかな。」

「なに？」と、レムブケは眼を圓くしながら叫んだ。「君は此事に就いて未だユーリヤ・ミハイロフナに何にも話さないと言ふのか。」

「あの女に！如何いたして！ええ、アンドレイ・アントノフ・ギーチさん。私はあの方の友情を重んじて居れば、又あの方を非常に尊敬もして居ます……が、要するにそれだけです。私だつてそんな大間違ひはしませんや。私もあの方に反抗はしない、御存じの通り、あの方に反抗するのは危険ですからね。尤も、一言位はあの方にも漏らしたか知れない、左様いふ事が所好ですからね。が、貴方にお話したやうな、人の名前を告げるのだ、又は大切な事を打明けるのだといふことは——ねえ、閣下！私は何故貴方に訴へて居るのだ！兎に角、貴方は舊式ながら職務上の堅實と經驗とを具へた人物だからですよ。貴方は人生を見てお坐だ。加之、貴方は彼得斯堡の經驗から、こんな事件は何んな複雑な點でも諳でおほえて被坐しやるでせう。が、あの方に例へば此の二人の名を話して御覽なさい、何んな大騒動が持上るか知れませんか……御存じの通り、あの方は彼得斯堡を駭かせることが所好ですからね。いや、あの方は眞個頭が熱し過ぎて居ますよ。」

「左様、妻には左様いふ傾向がないでもない」と、アンドレイ・アントノフ・ギーチは此の無作法な男がユーリヤ・ミハイロフナに對して勝手な批評を下すのを憤りながら、同時に何處か満足しながら呟いた。が、ピョートル・ステバーノフ・ギーチはそれでも未だ充分でない、最少レムブケの心に阿諛つて、完全に此男を征服して置かねば成らぬと思つた。

「眞個其通りですよ」と、彼は直に附け入った。あの方は天才でも有れば、藝術的な女性でも御座いませう。だが、あの方は折角網にかかりかけた燕を追ひ散して仕舞ひますよ。六日は倍置いて、六時間でも静乎として居ることが出来ないでせうからね。え、アンドレイ・アントノフ・ギーチさん、貴方も六日の間女性を縛つて置かうなぞとは想ひなさるな。私も却々経験が有るでせう、かう云ふ事に懸けてはね。私はいろんな事を知つてますよ、貴方も私がいろんな事を知つてる奴だとは認めて下さるでせう。私は戯談に六日間待つて下さいとお願ひするのではない、一つ目的が有ればこそですよ。」

「僕は聞いたがね……」と、レムブケは自分の考へを其儘言ふのが憚られた。「僕は君が外國から歸つた時……謂はど悔恨の形式に於て、或方面に何やら申立を爲れたといふ話を聞いたがね。」

「え、そんな様な事も有りましたよ。」

「勿論、深くそれを追窮する譯ではないがね……が、何うも君は始終それとは全然反対な態度で僕に話を居たやうに思ふがね——例へば、基督教の信仰に就いても、社會制度に就いても、政治問題に就いても……」

「成程、私はいろんな事を言ひました、今でも言つて居ます。だが、左様いふ思想はあの馬鹿者どもが違るやうに、直に適用せられべきものぢや有りませんよ、其處が肝心です。上官の肩に咬ひ着いたつて何に成りますか。貴方も私と同意見ぢや有りませんか。只貴方は時期が尙早いと仰つた様ですがね。」

「僕が君に賛成して時期尙早と言つた時には、左様いふ積りぢやなかつたよ。」

「だが、貴方は一語々々考へて物を仰有るね、へ！貴方は眞個用心深い方だよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは不意に滑稽な調子で言出した。「ねえ、先生、私は貴方といふ人を知りたいと思つたのですよ。ですから、

私も本音を出して見たのです。私がそんな風にして知つたのは貴方ばかりぢやない、大勢有りますよ。想ふに、私は先づ貴方の性格を知らうと思つたのですね。」

「で、僕の性格は如何だと言ふんだね？」

「如何つて、そんな事は御心配に及びませんよ」と、彼は再び笑ひ出した。「ねえ、我が親愛なる尊敬すべきアントレイ・アントノフ・ギーチさん、貴方も却々精巧だがね、未だあれには成つて被坐しやいませんよ、又永久に成ることは有りますまい、解りますか。大抵解るでせう。私は外國から歸つて來た時或方面に申立をしましたかね、實際又或信念を有する人間が、何故自己の眞面目な信念のために働くことが出来ないかを知らないですよ……が、彼處の何人も未だ私に貴方の性格を研究せよなどと吩咐したものはない、私も亦あの連中のためにそんな仕事を引受けた覚えもないのだ。まあ考へて御覽なさい、私は貴方にあの二人の名を指す必要はないのですよ。眞直に彼處へ行けば行かれたのだ、彼處ですよ、私が最初に申立をした所ですよ。で、若し私が財政上の利得のために、又は何か私自身の利益のために骨を折つて居るのだとすれば、そんな事をするのは私に取つて餘り割の好い勘定ぢや有りませんね。斯う成りや、大本營では貴方にこそ感謝すれ、私に感謝する筈は有りませんからね。私は單にシャトーフのためにこれを言つたのだ」と、ビョートル・ステバーノギーチは應揚に附け加へた。「シャトーフのために二人の友情のために……が、貴方が筆を取つて彼處へ上申せられる時、私のために一言費して下さつた處で……別段抗議は申込みませんよ、へ、へ！ですが、最う左様なら、私も餘り永くお邪魔しては濟まない。斯んなにお饒舌をする必要は有りませんからね」と、彼は稍追従らしく言ひながら、長椅子から立上つた。

「いや、それ處か、僕は此事件が謂はど決定した形を取るに到つたのを喜んで居るよ」と、フォン・レムブケも

亦立上つた。彼は明かに最後の言葉に動かされたらしく、頼りにこゝくとして居た。「僕は君の骨折に多く負ふ所があるのを認めるよ。で、僕も君の熱心を上申して、出来るだけ君の便宜を計ふやうにするから、左様思つて居て呉れたまへ。」

「六日間——六日間延ばして頂くといふのが肝心な問題ですよ。兎に角、貴方も六日間静乎として居て下さらなきや不可ませんよ、其處がお願いですからね。」

「宜し。」

「勿論、私は貴方の手を縛らうとはしない。そんな事が如何して出来ませう！貴方は確乎眼を開いて居なくちや成らないのだ。が、只時期の到らない間に彼奴等の巢を騒がせてだけは下さるな。其點は貴方の思慮と經驗とに信頼しますよ。併し貴方は未だ外に無数の獵犬を用意して被坐しやいませうね、はよ！」と、ビョートル・ステバーノギーチは青年の快活と無責任とを以て放言した。

「左様いふ譯でもないさ」と、レムブケも愉快相に應へた。「若い者といふものは何うも背後にいろんな物が用意されて居るといふやうな偏見を抱き勝ちなものだよ……で、序ながら一言訊いて置きたいがね、此のキーリロフがスタフロロギンの介添で有つたとすれば、あのスタフロロギン君も亦……」

「スタフロロギンが如何したんですつて？」

「いや、あの二人が左様いふ友人で有つたとすればと言ふのだよ。」

「あゝ、いや／＼／＼！そりや間違ひだ、貴方も精巧だが、それだけは大間違ひだ。實際駭きましたね。私は此事に就いちや貴方の方へも何か報知が有つたものと思つて居ましたがね……ふむ……スタフロロギン——そり

や全然反對ですよ、全然…… Avis au lecteur. (御注意迄にね。)

「君はあねだと言ふのかい。左様いふ事が有るのかね」と、レムブケは疑はし相に言葉を切つて言つた。「尤も、ユーリヤ・ミハイロヴナは彼得斯堡からの噂だと云ふので、あの君が或種の訓令の下に行動してゐるのだと云ふやうなことを言つて居たがね。」

「私はそれに就いちや何にも知りません。えゝ、何にも知りませんとも。左様なら、Avis au lecteur (御注意迄にね。)」不意に、又明白にビョートル・ステバーノギーチは其問題に觸れることを拒んだ。そして、扉口の方へ斷出した。

「一寸待つて呉れ。おい、ビョートル・ステバーノギーチ君」と、レムブケは後から喚んだ。「最一つ一寸した事件が有るのだよ。別に永く引張つては置かないからね。」

彼は机の抽斗から一枚の封筒を取出した。

「此處に一つ同じやうな事件が有るんだよ。僕が何んなに君を信用して居るかを承知して貰はうと思つて、これを見せるんだがね。まア君の説は如何だね？」

封筒の中には、フォン・レムブケに宛てた妙な匿名の手紙が入つて居た。而も昨日受取つたばかりだ。ビョートル・ステバーノギーチはそれを讀み下しながら、當惑さうな容子が明々と見えた——

「知事閣下——これが閣下の位階である。此處に私は有らゆる顯官の生命と祖國との上に企てられた陰謀をお知らせしたい。其陰謀は着々發展して居るので有る。小生自身長年の間絶えずそれを傳播して居たのだ。他に無神論も有る。暴動は將に起らんとして、何萬枚といふ檄文も配布された。豫め警察の手でそれを没収するに非ざれば、

一枚毎に何百といふ人数が舌を出しながら走つてそれに加はらうとして居る。何となれば、彼等は莫大な利得を約束されるからだ。人民といふは馬鹿なもので有る。それに火酒も有る。人民は誰彼の差別なく罪ある者として攻撃する、虐殺する。私は彼方に恐れ此方に戦きながら、全然自分の知らない事のために後悔する。何となれば、私の事情は彼等と同一であるから有る。若し閣下にして祖國及び教會と偶像とを救ふために内通を望まれるならば、小生はそれを爲し得る唯一人で有る。が、小生も秘密警察から直に電報で赦免を得るといふ条件の上でなければ出来ない。小生一人で宜しい、他の者は皆相當の處刑を受くべきだ。合圖として、毎夜七時に門番の窓へ蠟燭を出して置いて下さい。それを見れば、小生は彼得斯堡から伸ばされた慈悲深い手を信じて、それを接吻に参りませう。が、最一つ小生は年金を得るといふ条件が欲しい。それがなければ、小生は今後如何して生活しませう？閣下もそれを惜しいとは思召されまい、閣下に取つては勳章を意味して居るのですからね。閣下も御用心なさい、首を返取られますよ。

閣下の熱誠なる絶望的下僕として、閣下の足下に跪くものは

悔恨せる自由思想家匿名氏。

フォン・レムブケは此手紙が昨日空にして置いた門番の室に残して有つた旨を説明した。

「で、貴方は如何お考へです？」と、ビョートル・ステバーノギーチは殆ど突かざるやうな権威で訊いた。

「僕は只人を調戲ふやうな了簡の落首に過ぎないと思ふよ。」

「恐らく左様でせうね。貴方に對して鹿を馬と欺くことは出来ませんよ。」

「殊にこれは馬鹿なものだからね。」

「從來も貴方はこんな物を受取られたことが有りますか。」

「一度か二度、皆匿名の手紙だがね。」

「えよ、そりや署名する氣遣ひは有りませんや。文體は違つて居たのですか、書體は違つて居たのですか。」

「左様だ。」

「で、矢張こんな馬鹿げた文句ですか。」

「あよ、それにね……實に卑劣なんだよ。」

「從來もこんな手紙が来て居るとすりや、これも矢張同じ物ですな。」

「特にこれが實際愚だからよ。あの連中は教育も有るから、こんな愚な書方はしないだらうからね。」

「勿論ですとも。」

「が、實際誰かど内通しようとして居るのだつたら、如何したものかね。」

「そんな筈は有りませんよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは打切棒に言ひ切つた。「秘密警察から電報とは如何いふ積りですか、えよ、年金とは？こんなのは明白に調戲ふんですよ。」

「左様だね」と、レムブケは稍恥らひながら同意した。

「ねえ、如何です。此手紙を少時私にお預けなさいませんか。貴方の代りに、私が差出人を見附け出して上げますよ。えよ、他の連中を狩出すよりやぐつと容易いですよ。」

「お持ちなさい」と、レムブケは稍躊躇しながら、それでも承諾した。

「誰かにこれをお見せなさりやしませんか。」

「左様思はれるかね。いゝや。」

「ユーリヤ、ミハイロウヴァにも。」

「如何して、そんな事をして堪るものか。君も後生だから彼女には見せて呉れるな」と、レムブケは心配しながら叫んだ。「彼女は面喰つて仕舞ふよ……それから僕に對しても恐ろしく痲癩を起すからね。」

「成程、最初に引捕まるのは貴方でせうね。あの方は屹度貴方が悪いから人民もそんな手紙を貴方に對して送るのだ、貴方自身書かせたやうなものだと仰有るよ。女の論理はそんな物ですからね。では、左様なら。屹度一兩日の間に手紙の主を連れて来てお目に懸けますよ。何よりも先の約束をお忘れなさいやうに、好うがすか。」

四

ピョートル・ステバーノギーチは決して馬鹿な人間ではない。が、囚人のフェツカが「あの人は自分で人間を拵へます、そして拵へた人間と一緒に暮して行く」と言つたのも、確に當つて居た。彼はレムブケが兎に角六日間だけは安心して居るに違ひないと十分信じ切つて知事の許を辭し去つた。又此の六日間は彼自身のために絶対に必要なのだ。が、それはアンドレイ・アントノギーチを全然愚鈍漢と決めて仕舞つた事實の上に打建てられた、間違つた観念で有つたのだ。

凡て病的に邪推深い人間と同じく、アンドレイ・アントノギーチは何か確實な基礎の上に立ち得たと思ふ瞬間には、毎も法外に信用してにこ／＼して居た。新しい事件の轉換が新しい一種の複雑と面倒とを加へたにも拘らず、最初は寧ろ有利なものとして彼に映じた。兎に角、従前の疑惑は地に落ちたのだ。加ふるに、彼は五六日以来非常

に勞れて、知らず／＼精神を擧げて休息に憧れた程、疲憊した、手頼ない状態に有つた。而もあゝ！彼は再び不安に陥つた。彼が彼得斯堡で費した永い年月は彼の心に痕跡を残さずには止まなかつた。彼は官人として見た「新しい青年」の歴史に通ずるばかりでなく、其の秘密の歴史にも通じて居た——彼は物所好な男で、革命の機又なども聚めて居た。尤も一語と雖もそれが解るのではなかつた。で、彼は今や森の中で道を失つた人のやうな氣がした。有らぬる本能は彼に告ぐるに、ピョートル・ステバーノギーチの言葉には全然矛盾した、常規に外れた、奇怪な或物が有るといふ一事を以てした——「尤も、此の「若い青年ども」の間には何が起るか知れたものでない、彼等の間に行はれて居ることは悪魔だけが知つて居るのだ」とは云へ、彼は出口も知らず考へ込んで仕舞つた。

此時、不意にブルメルが扉口から顔を突出した。彼はピョートル・ステバーノギーチが訪問して居る間、始終遠くへも行かずに待つて居た。此のブルメルと云ふ男は實際アンドレイ・アントノギーチの遠い縁者に當つて居たが、其の親族關係は注意深く臆病に隠して置かれた。私は此處に此の無意味な男のために一言を費すことを讀者に乞はねば成らない。ブルメルはあの不思議な、所謂「不幸な」獨逸人の階級に屬して居た。それは決して彼の才能が足りないために不幸なのではない、單に——只單に「不幸」なのだ。アンドレイ・アントノギーチは始終彼に對して感動的な同情を寄せて居た。で、自分の官等が上るに伴れて、始終自分の下役に引上げるやうにして居た。が、ブルメルは決して幸福ではなかつた。彼が任命された後で、其地位が廢されたり、又は新しい長官が其省へ赴任して來たりした。一度などは過誤の下に、他の人民と共に殆ど收監され相に成つたことも有つた。彼は几帳面な人間で有つた。が、餘りに几帳面で憂鬱なために、却ていろ／＼損をした。身丈の高い男で、赤い髪の毛をして居た。稍前屈みで、憂鬱で、感傷的でも有つた。すっかり人生に敗けて居るにも拘はらず、なかく／＼頑固

で上官の言ふことも聞き容れなかつた。アンドレイ・アントノフ・ギーチに對しては、彼も、細君も、家族の者どもも、永年の間敬虔な服従の念を抱いて居た。アンドレイ・アントノフ・ギーチの外は何人も此男を好かなかつた。ユーリヤ・ミハイロフナは最初から此男を免職させようとして居た。が、何うも所天の頑固には打勝たれなかつた。それが最初の夫婦喧嘩の原因でも有つた。二人が結婚して、未だ蜜月に出て居る間、彼女が初めてブルーメルと出會した時から始まつた。それ迄此男は親族關係の不面目な祕密と共に注意して彼女から隠されて居たのだ。アンドレイ・アントノフ・ギーチは兩手を前に組合せながら彼女に願つた、二人が子供の時から友情を感傷的に語りもした。が、ユーリヤ・ミハイロフナは永久に自分の身が汚されたやうに感じた、其結果氣を失ひさへした。それでも、フォン・レムブケは一寸も退かうとはしなかつた、世界の何物に代へてもブルーメルは捨てまい、彼とは別れまいとした、終ひには彼女の方で驚いて、止むを得ず其儘ブルーメルを差措くことにした。が、同時に親族關係は出来る限りに於て、前よりは一層注意深く隠して置かなければ成らぬことに決定された。それからブルーメルの名前と父祖名も變ぜられることに成つた。如何いふ都合かして、彼も亦アンドレイ・アントノフ・ギーチと稱ばれて居たから有る。ブルーメルは此町で獨逸人の藥劑師一人の外、何人も知合がなかつた、何人も訪ねなかつた。そして、自分の習慣通り、寂しくも容畜に暮して居た。彼は以前からアンドレイ・アントノフ・ギーチの文學道樂を知つて居た。大抵此男が喚び寄せられて、二人限りの座で自作の小説を讀んで聞かされたものだ。彼は六時間も打通して棒の様に跪坐りながら、大汗を掻いて、一生懸命眼を覺まして、にこ／＼して居るやうに努めて居た。自宅へ歸ると、彼は足の長い瘦せた細君に向つて、恩人の露西亞文學に對する不幸な弱點を愚痴りながら、溜息を吐き／＼した。

アンドレイ・アントノフ・ギーチは苦し相にブルーメルを見遣つた。

「ブルーメルか、お願ひだから少時一人にして置いて呉れ」と、彼は昂奮しながら遽てよ切出した。ビョートル・ステパーノフ・ギーチのために妨げられた従前の對話を再び始めるのが、明かに避けたいのである。

「で、これは少しもばつと爲せないで、極めて祕密の裡に處置することも出来ますよ。貴方は全權を有つてお坐ですからね。」ブルーメルは前へ乗り出すやうにして、だん／＼小刻みにアンドレイ・アントノフ・ギーチの傍へ近寄りながら、恭々しげに、乍併頑固に何事かを主張した。

「ブルーメル、君は餘り僕のことを思つて、僕のために盡さうと心配して居て呉れるものだから、僕は君に會ふと、始終氣が揉めてはらく／＼するよ。」

「貴方は始終氣の利いたことを仰有る。そして、御自分の仰有つた警句に満足して、平和に眠られる。が、それだから貴方は始終損をして被坐しやるのですよ。」

「ブルーメル、僕は今それが間違ひだといふことが判然解つたのだよ、全然間違ひだね。」

「あの嘘吐きの邪曲な、御自分でも疑つて被坐した若者の言葉からちや有りませんか。彼奴は貴方の文學上の才能を稱讚して、お詔諛を使つたものだから、貴方のお氣に入つたのでせう。」

「ブルーメル、君には何にも解つて居ないのだ。君の計畫は眞個亂暴だよ。そんな事をしたところで、何にも發見することは出来なからうし、徒らに騒動を起して世間の物笑ひを買ふばかりだね。それに、ユーリヤ・ミハイロフナが……」

「いや、屹度何も彼も發見することが出来ますよ」と、ブルーメルは胸に右の手を置きながら、斷乎として相手

の傍へ近づいて行つた。朝早く不意に搜索を行ふのですよ。勿論あの個人其上には十分保護を加へて、法律に依つて規定された有らゆる形式を守つた上で遣るのですね。リヤムジンだの、テリヤートニコフだのいふ若い連中は、皆私どもが目蒐けて居るものを悉く発見するだらうと保證して居ますよ。あの連中も始終あの家へ出入したものだ相ですが、一人としてヴェルホーゼンスキイ氏を好く言ふ者は有りませんよ。スタフローギン夫人ですら從來與へて居た恩恵を公然謝絶した相ですからね。有らゆる正直な人間は——此町に左様いふ人間が一人でも有るとすれば——不信心と社會主義的思想の温床は始終彼處に有つたといふことを確信して居ますよ。あの男は有らゆる禁制の書物を持つて居ます、リリーエフの「反省」だの、ヘルチエンの著作だのと……必要の場合には、私は其目錄を提供することが出来ますよ。」

「馬鹿な？ そんな書物なら何人でも持つて居るよ。ブルーメル、君は如何してそんなに馬鹿になつたのかい。」

「それから澤山の機文も」と、ブルーメルは相手の言葉を耳に入れないで續けた。「屹度新しい機文も発見するこゝとが出来ませうよ。何うもあの若いヴェルホーゼンスキイは怪しう御座いますね。」

「だが君、親と子と混同しちや不可ないよ。あの二人は元來仲が好くないんだからね。息子は明らさまに親父を嘲笑して居るよ。」

「そりやア只假面ださ。」

「ブルーメル、君は飽迄僕を苦しめようと云ふのかい。考へても見たまへ、あの人も此町ちや随分重んぜられて居る人物だよ。元は大學教授として有名な方だ。で、若しあの人が叫喚き出したら、町中に嘲笑の聲が起つて、何れも彼も滅茶苦茶に成つて仕舞ふだらうよ……それに、ユーリヤ・ミハイロヴナの思惑も考へて見たまへ。」

ブルーメルはいよく前へ乗出すばかりで、相手の言葉など聴いては居なかつた。

「あの人は只講師ですよ、講師に過ぎないので、それも低い位地で退いたのでさ。」彼は自分で自分の胸を打つた。「あの人は動章だつて一つも持つては居ない。而も政府に對する陰謀の疑ひが懸つて免職されたのですよ。一時は秘密監視の下に有つたのですが、恐らくは今でも左様だらうと思ひますね。で、今露顯した暴動を眼中に置いて言へば、私の言ふやうに爲さるゝのが貴方の義務ですよ。貴方は眞の犯罪者を見通して、折角功を樹てる機会を失ふのだ。」

「ユーリヤ・ミハイロヴナが！ さア彼方へ行つて呉れたまへ。ブルーメル」と、フォン・レムブケは次の室から夫人の聲を聞き附けて、不意に叫んだ。

ブルーメルもどきりとした。が、少しも退避がなかつた。

「何卒許して下さい、兎に角私に許して下さい」と、彼はいよく固く胸の上に手を壓附けながら言ひ張つた。

「彼方へ行つて呉れ！」と、アントレイ・アントノフ・ギーチは叱責した。「君の好い様に爲たまへ……後で。あ、到頭！」

帷幄が上つて、ユーリヤ・ミハイロヴナが其處へ現れた。彼女はブルーメルを見て、此男が目の前に居るだけで、彼女に對する一種の侮辱でも有るやうに、一目ぢろりと見遣つたまふ、思ひ上つたやうに、靜乎と其處に立つて居た。ブルーメルは何とも言はないで、恭々しげに低く頭を垂れた。そして、身體を二重に折つて兩手で自分の身を庇ふやうに爲ながら、扉口の方へ出て行つた。

實際アントレイ・アントノフ・ギーチの癩癩まぎれの最後の言葉を直に自分の請求が容れられたものと取つたため

か、それとも、餘りに自分の努力が成功の冠に飾らるべきを信じたために、恩人に手柄を立てさせようとして、少許遣り過ぎたのか。兎に角後で解るやうに、此の知事と屬官との對話は吃驚するような結果を齎した。人々は笑ひながら、取りぐくに噂を仕合ひ、ユリヤ・ミハイロヴナは火の様に忿つて、所天に喰つてかよつた。其結果アンドレイ・アントノフ・ギーチは此危急の秋に際して、いよく憤れな不決斷の状態に陥つて仕舞つた。

五

ビョートル・ステバーノフ・ギーチには忙しい日でも有つた。フオン・レムブケの邸を出て、バガヤウレンスキー街へ急いだが、ニコフイ街を過ぎると、カルマーチノフの泊つて居る家の前を通つた。彼は不意に立停まつて、にた／＼笑ひながら家の中へ這入つて行つた。召使は「御主人様は最う貴方をお待兼ねて御座います」と告げた。それを聞いて、彼は別段前日に來るとも言つて置かなかつたのだから、大層悦んだ。

が、此大文學者は實際今日ばかりでない、昨日も、一昨日も彼を待つて居た。三日前に彼は「Mora (多謝)」の草稿——彼がユリヤ・ミハイロヴナの文學會で朗讀しようとして居たもの——を彼に渡した。こんな事をしたのは、相手の機嫌を取るやうな下心が有つたからで、此大作を前以て讀まされると云ふことが若者の虛榮心を満足させるだらうと信じて居たのだ。ビョートル・ステバーノフ・ギーチは以前から此の尊大な、少數の人の外には近づき難いやうな紳士が、此の「政事家の知識」をも具へた文學者が、單に、而も熱心に彼に取入らうとするのを見て取つて居た。想ふに、此若者はカルマーチノフが自分を露西亞に於ける全革命運動の首領と迄は思はずとも、少くとも、最も深く露西亞の革命運動の祕密に參した一人で、青年の間には非常な勢力を有するものと考へて居るのを十分觀取

して居たのだ。此の「露西亞に於ける最も賢い人」の心的状態はビョートル・ステバーノフ・ギーチの興味を惹いた。が、或理由から、今日迄近づくことを避けて居た。

此の大文學者は自分の姉の家に泊つて居た。其姉は或侍従の妻で、此近隣に所領を有つて居た。姉の所天も二人ながら此の有名な親戚に對して甚深い敬意を拂つて居た。が、残念なことには、彼が訪問の期間、二人とも莫斯科に泊つて居た。其結果彼を接待の役は侍従の貧乏な親戚で、永年の間此家族と同棲しながら家政を見て居る或老婦人の上に落ちて來た。カルマーチノフが到着してからといふもの、家中の者は皆爪先で歩くやうにした。老婦人は殆ど毎日の様に、彼が熱く眠つたとか眠らないとか、何を喰べて頂いたとか、そんな様なことを莫斯科へ知らせ遣つた。一度などは、市長の屋敷の午餐の後で彼が健胃劑を一匙取つたと云ふので、わざ／＼電報を打つた位だ。彼女は滅多に彼の部屋へ這入るだけの勇氣もなかつた。尤も、彼の方では無愛相で、用事の外には滅多に口を利かなかつたにもせよ、禮儀正しく彼女を遇つて居た。

ビョートル・ステバーノフ・ギーチが這入つて來た時、彼は赤い色の葡萄酒を半杯程飲みながら、朝のカツレッツを平けて居た。ビョートル・ステバーノフ・ギーチが此前訪ねて來た時にも、矢張此のカツレッツを喫べて居た。そして、訪客には何にも出さないで、其前でむしやく／＼平けて仕舞つた。カツレッツの後で、珈琲の茶碗が出た。皿を持つて來た従僕は燕尾服を着て、音のしない長靴を穿いて、白い手套を箱めて居た。

「はよ！」とカルマーチノフは卓布で口端を拭ひながら、長椅子から立上つた。そして、にこ／＼笑ひながら傍へ接吻に遣つて來た——有名に成つた露西亞人の特徴たる一種の風習に從つたもので有る。が、ビョートル・ステバーノフ・ギーチも經驗上カルマーチノフが彼と接吻するやうな容子をして居ながら、實は只自分の頬を差出すばかり

だと云ふことを知つて居た。で、今度は自分の方でも同じやうにした、頬と頬とがべつたり出會した。カルマーチノフはそれに気が附いたやうな容子を見せなかつた。其儘長椅子の上に腰掛けて、相手にも自分に面する安樂椅子を俯めた。後者は直にそれへ掛けて、樂々と身を伸ばした。

「君も何か……何か喫べませんか」と、カルマーチノフは、何時になく、が、勿論慇懃な辭退を強請するやうな態度で訊ねた。ビョートル・ステバーノギーチはそれに應じて、直に「え、何か頂きませう」と言つた。何か自分の威嚴を傷つけられでもしたやうな驚駭の影が主人の顔を曇らせた。が、それもほんの瞬間で、彼は氣立ましく呼鈴を鳴らしながら召使を喚んだ。で、有らゆる彼の修養に似も違らず、二度目の食事を持つて来るやうに吩咐した時には、思はず驚すむやうな聲を高めた。

「君は何を喰べますか、カツレットか珈琲？」と、彼は最一度訊ねた。

「カツレットと珈琲と、それに最つと葡萄酒を持つて来るやうに命じて下さい、私は腹が空つて居りますからね」と、ビョートル・ステバーノギーチはぢろく／＼相手の服装を見遣りながら答へた。カルマーチノフ氏は眞珠貝の釦を附けた一種の室内服を着て居た。が、稍短きに過ぎて、心持好く出張つた腹と、どつしりした髯の曲線には好く釣合つて居なかつた。が、趣味は人に依つて違ふもので有る。膝の上には床まで達くやうな格子縞の膝被が載つて居た、室内は暖かだつたけれど。

「何處かお悪いのですか」と、ビョートル・ステバーノギーチは訊ねた。

「いや、何處も悪いことはないが、此時候に病氣にでも成つては困るからね」と、文學者は穩かな、紳士らしい、甘へた言葉では有るが、例のきい／＼した聲で答へた。「僕は一昨日から君のお出でを待つて居たよ。」

「何うして？ 別にお伺ひするとは言はなかつた筈ですがね。」

「いや、併し君は僕の草稿を持つて來たらう。あれを……讀みましたか。」

「草稿？ 何んな草稿ですか。」

カルマーチノフは恐ろしく驚いて仕舞つた。

「だが君、あの草稿を持つて來たらう、持つて來ないのか。」彼は驚きの餘り喰ふことも忘れて、ほんやり相手の顔を眺め遣つた。

「あ、あの Honjour (お早う) のことですか。」

「Merci (多謝) だよ。」

「あ、解りました。私はすっかり忘れちやつた。え、まだ讀みませんよ。何うも暇が有りませんか。如何したんだらう、衣囊には有りませんか……屹度自宅の机の上に置いて有るのだ。まア御心配なさいませぬ。何れ解りますよ。」

「いや、それよりも、直に君の部屋へ使を遣らう。失く成るかも知れない。それに盗まれる恐れも有るからね。」

「誰があんな物を欲しがりますものか。併し貴方は大分周章へて被坐しやるやうですね。何うして、ユーリヤ・ミハイロヴナから伺つた處に據ると、貴方は毎時五六通草稿をお作りになると云ふぢや有りませんか——一つは外國の公證人の許に保管され、一つは彼得斯堡に、一つは莫斯科に、それから一つは銀行へ入れて置かれるとか聞きましたよ。」

「だが、莫斯科は又焼けて、僕の草稿も一緒に焼けるかも知れないよ。いや、それよりも直に使を遣らう。」

「お待ちなさい。此處に有りましたよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは上衣の後ろの衣袋から草稿の束を取出した。少許皺に成りましたよ。如何でせう、私がお宅から持つて歸つてから、すつと手巾と一緒に衣袋に包まつて居たのですよ。眞個忘れちゃつた。」

カルマーチノフは遽て其草稿を引摺みながら、頁数を数へなど、鄭重にそれを検査して、悲しく自分の傍の別の卓子の上に一時それを載せて置いた。かうして一瞬間と雖もそれから眼を離すまいとした。

「何うも君は餘り本を読まないと見えるね？」と、彼は未だ自分を制馭することが出来ないで、思はず叱責するやうに言つた。

「いや、餘り澤山は読みませんよ。」

「特に露西亞文學に就いては……何にも？」

「露西亞文學ですつて？一寸お待ちなさい、私も何か讀みましたよ……「途中で」でしたか、「途上にて」でしたか、それとも「道の別れにて」でしたかな——何でもそんな様なことでしたよ。能くは記憶えて居ません。私もそれを讀んでから随分に成りますからね、五年も前ですか。何うも暇がありませんよ。」

少時沈黙が続いた。

「僕は此處へ來た時、衆皆に君が非常に聰明な人だといふことを吹聴して置いたよ。で、今ちや衆皆君のために狂氣のやうに成つて騒いで居るやうだね。」

「有難う」と、ビョートル・ステバーノギーチは靜かに答へた。

食事が持つて出られた。ビョートル・ステバーノギーチは非常な食欲でそれに向ひながら、瞬く間に平けて仕舞

つた。葡萄酒も呷れば、珈琲も飲み乾した。

「此野人は」と、カルマーチノフは相手が最後の肉片をむしやく喰べて、最後の一滴を飲み乾したのを横眼に見遣りながら考へた。「此野人は恐らく俺の言葉に刺の有るのが氣に觸つたのだ……で、此草稿も熱心に讀んだものに相違ない。只何か爲にする處が有つて嘘を吐いて居るのだ。が、恐らくは嘘を吐いて居るのではない、只心から馬鹿なので有らう。俺は寧ろ馬鹿なやうな天才が所好だ。此男は若い連中の間に、一種の天才で有るかも知れない。まア勝手に爲やアがれだ！」

彼は長椅子から立上つて、毎時食事の後でするやうに、運動の爲に、室の隅から隅へ何遍となく往き反りした。

「何時此町をお立ちですか」と、ビョートル・ステバーノギーチは紙巻煙草に火を點けながら、安樂椅子から訊いた。

「僕は實際土地を賣却に來たのだからね、そりやア代理人の腕次第だよ。」

「ですが、貴方は彼方で戦争後傳染病が流行るといふから遁けて被入したと云ふぢやありませんか。」

「いや、左様いふ譯でもないんだよ」と、カルマーチノフ氏は愛相の好い調子で言葉を續けながら、室の隅迄行くと右足でぐるりと快活に廻つて來た。「尤も、僕も出来るだけ長く生きて居る積りだがね」と、稍皮肉に高笑ひした。「吾々露西亞の貴族間には、有らゆる點に於て、忽ち精力を消耗して仕舞ふやうな癖が有るよ。併し僕は出来るだけ永く懸つて、消耗したいと思つて居るよ。で、これから養生のために外國へ行かうとして居るのだ。彼方ぢや氣候も好し、家も石で出來て居て、何も彼も堅固だからね。歐羅巴も未だ僕の生きて居る間位はあの儘續くだらうからね。君は如何と思ひだい？」

「そんな事が私に解りますものか。」

「ふむ。で、實際彼方で巴比倫が倒れるものとしても、そして、其倒壊が大いなるものとしてもだね——其點に於ては、僕は全然君に同意するよ。尤も、未だ僕の生きて居る間位は、あの儘續くだらうと思ふがね——が、此露西亞には倒れやうにも何にも倒れるものがない、まア比較的の話だがね。倒れるやうな石の家もない、悉皆泥土の中へ溶けて仕舞ふだらうよ。神聖な露西亞は、世界に於ける何物よりも抵抗力が少ないからね。露西亞の百姓は兎に角未だ露西亞の神様に依つて一緒に保たれて居る。が、最近の報告に據ると、露西亞の神様も餘り當に成らない、奴隷解放令以後殆ど生き残つては居ないのだよ。あの解放令は確かに此神様に非常な打撃を與へたのだね。加ふるに、今や鐵道が敷かれようとして居る、ねえ君……僕は最う露西亞の神様に信仰を繋いで居ないよ。」

「で、歐羅巴の神様は如何です」

「僕は何者をも信じないよ。だから露西亞の青年黨だと誇られて居るのだ。僕は始終青年の間の有らゆる運動に同情して来た、此處でも檄文を見せられたよ。總ての人があれを見て狼狽するのは、あの形式に恐怖して仕舞ふからだね。だが、其勢力は皆認識して居るよ。尤も、それを認識して居るとは自分ちや知らないだらうがね。總ての人は坂を轉がり落ちて居るのだ、又總ての人は何にも掴むものが無いといふことも以前から承知して居るのだ。僕は此露西亞が何んな事でも何等の抵抗なくして起り得るといふ點に於て、世界中で最も卓越した場所だといふ一點から見ても、あの祕密な傳道の成功を確信して居るよ。今や富有な露西亞人が争つて外國へ出て行く、年々それが増すばかりだと云ふのも、それで解つて居るぢやないか。單に直覺なんだね。船が沈没しようとする時、一番先にそれを見捨てるのは鼠だよ。神聖な露西亞は森の國、貧乏の國……又危険の國だね。上の階級は野心の有る乞食して居るよ。」

に充ちて居る一方に、大多數の人民は密閉した小舎の中に生きて居ると云ふ國柄だね、何人でも避難の道が有れば喜んでそれに就かうとして居る。只それを見せ遣りさへすりや可いんだ。未だそれに抵抗しようとして居るのは政府ばかりだよ。が、其政府が盲目滅法に棒を振ふから、自分自身の人民を打倒すのだ。最う此國では、何も彼も運命が定つて終りの日を待つて居るのだね。露西亞も此儘ぢや未來は無い。僕は獨逸人に成つた、又それを矜りとして居るよ。」

「だが、貴方は檄文のことを仰有り掛けたでせう。何も彼も言つて下さい、あれは如何お考へですか。」

「總ての人は檄文を怖れて居るよ、畢竟それだけ勢力が有るんだね。彼等は明らかに虚偽の假面を剥いで、吾の中に掴むべき何物もなく、據るべき何物もないことを證據立てる。總ての人が黙つて居るのに、彼等は聲高に語る。彼等に在つて最も力があるのは——其形式は別問題としてだね——彼等が直に眞理と顔を突き合わせる信すべからざる大膽に有るんだよ。直に事實と顔を突き合はせるといふことは、只現代の露西亞人にも出来ることである。否、歐羅巴では未だそれ程大膽に成つて居ない。彼處は意志の王國だからね、未だ據るべき何物かが有るんだよ。僕の見且つ判断し得る限りに於て、露西亞に於ける革命思想の全精髓は名譽の否定に有るんだね。彼様大膽に恐るゝ所なく發表するのは心持の好いものだ。否、歐羅巴に於ては、未だそれを理解して居ないのだ。それが又吾の争つて彼處に赴く所以でも有るがね。露西亞人に取つては、名譽の感覺などは餘計な負擔に過ぎない、又我國の歴史を通じて、始終大いなる負擔でも有つたのだ。「不名譽に著く公然の權利」は何物にも優して露西亞人を誘惑するんだね。僕は舊時代に屬して居る。従つて、白狀すれば、只習慣からでは有るが、矢張名譽に嚙ちり着いて居るんだね。僕が舊い形式を撰むのも、それが爲だよ。まア臆病からだとは言はれても仕方はないがね。人間といふも

のは、兎に角生命の有る間は生きて行かなくちや成らないからね。」
彼は急に言葉を途切らした。

「俺が饒舌つて居ると」と、彼は考へた。「此男は口を喋んで、ちろく俺を見て居る。此男は俺に直接に訊かせようとして遣つて来たのぢやないか。可矣、一つ訊いて遣らう。」

「ユーリヤ・ミハイロヴァは貴方が何んな策略を運らして、明日舞踏會で衆皆を驚かせようとして被坐しやるか、それを見附け出して来るやうに私に頼みましたがね」と、ビョートル・ステバーノギーチは不意に言出した。

「左様、明日は實際皆さんの驚くやうなことが有るよ、又確かに驚かせて見せるよ……」と、カルマーチノフは重々しく言つた。「が、其秘密は未だ君にも言ふまいよ。」

ビョートル・ステバーノギーチは強ひて聞かうともしなかつた。

「此町にシャトーフといふ青年が有る相だね」と、大文學者は不意に言出した。「僕は未だ其男を見たことがないのだがね。」

「え、好い人ですよ。あの男が如何したのです？」

「いや、何でもないがね。只あの男が何か言つて居たよ。スタフロギンの顔を殴つたといふのは其男ぢやないかね。」

「左様です。」

「で、スタフロギンといふのは——如何いふ人物かね。」

「私も能くは知らない。何でも放蕩家ですよ。」

カルマーチノフはスタフロギンを嫌つて居た。些とも彼を氣に留めて居ないやうな振をして居たからだ。

「其放蕩家はね」と、彼は含み笑ひをしながら言つた。「君等の檄文に書いて有るやうなことが起つた日には、第一番に首を絞められるだらうね。」

「恐らくは其前に」と、ビョートル・ステバーノギーチは不意に言つた。

「成程、それは左様だね」と、カルマーチノフは笑ひ止んで、眞面目な容子を装ひながら同意した。

「貴方は前にも一度そんな事を言はれた。私はそれを其儘あの男に取次いで置きましたよ。」

「何だと、眞逆君もそんな事を言やしないだらう？」と、カルマーチノフは再び笑ひ出した。

「あの男はそれを聞いて、若し自分が首を絞められるとすれば、貴方は百姓が打たれるやうに鞭で打たれるだけで澤山だらうと言ひましたよ。」

ビョートル・ステバーノギーチは帽子を取つて座から立上つた。カルマーチノフは別れに際して兩手を差出した。「で、若し君等の……計企んで居るやうな事が實行されるものとすればだね……」と、彼は猶相手の手を握

んだまよ、一種蜜のやうな甘い調子で、不意に言出した。「何時頃左様成るだらうね？」

「そんな事が私に解りますものか」と、ビョートル・ステバーノギーチは稍手暴く答へた。二人は凝乎と眼と眼を見合せた。

「例へばだね？ 多分？」と、カルマーチノフは一層甘い聲で言つた。

「貴方も土地を賣却して立退くだけの時間は有りますよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは一層暴らかに呟いた。二人は猶一層凝乎と顔を見合せた。

少時沈黙が続いた。

悪 靈

五二四

「五月の初めに始まつて、十月の末には終るでせうよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは不意に言った。

「僕は真面目に君に謝するよ」と、カルマーデノフは聲に力を籠めながら、相手の手を固く握った。

「彼奴も船から通れるだけの時間は有るよ、鼠め」と、ビョートル・ステバーノギーチは街の上へ駈出しながら考へて居た。「うむ、あの『偉大な知慧者』でさへ彼様深切に期日や時間を訊いて、俺の教へて遣つたことに彼様蒸々しくお禮を言はれて見れば、俺達も最う愚圖々々して居る處ぢやないよ」と、彼は歯ぎしりをした。「ふむ！だが、彼奴は實際馬鹿でもないよ……彼奴は只通けて行く鼠なんだね。彼様いふ人間は滅多に饒舌るものぢやない！」彼はバガヤールレンスキー街のフィリポフの家へ駈けて行つた。

六

ビョートル・ステバーノギーチは先づキーリロフの部屋へ行つた。彼は毎もの通り一人で居た。そして、其時は體操をして居た。即ち兩足を張つて、頭の上で妙な具合に兩腕を振廻すのだ。床の上には毬が落ちて居た。朝飯から未だ飲み乾さずに有つたお茶は卓子の上に冷たく成つて居た。ビョートル・ステバーノギーチは少時間の上になつて居た。

「君は大分身體の健康を氣にして居るやうだね」と、彼は進んで部屋の中へ這入りながら、大きな愉快けな聲で言つた。「だが、好い毬だね。ふむ、これは好く飛ぶ！何かい、これも體操のためかい。」キーリロフは上衣を被つた。

「左様、これも健康のためだよ」と、彼は無愛相に呟いた。「まあ坐りたまへ。」

「僕はほんの一寸立寄つたばかりだよ。だが、兎に角坐らう。そりやア健康も好いがね、僕は君に兼ての約束を想出して貰ひに来たんだよ。約束の時期がそろく近づいたからわ……或意味に於て」と、彼は何時になく不味い口の利き方をした。

「何んな約束だい？」

「如何したんだつて？」と、ビョートル・ステバーノギーチは稍退避した。

「約束もなければ義務もないよ、僕は何の點から見ても自分を束縛することは嫌ひだ。君は何か思ひ違ひをして居るんだよ。」

「で、君は如何爲ようと云ふんだね？」と、ビョートル・ステバーノギーチは飛び上つた。

「所好なやうに爲るのさ。」

「所好なやうに如何爲るのさ？」

「是迄と同じ事だよ。」

「そりやア如何取つたら可いのだ？君は前と同じ心持で居ると言ふのかい。」

「左様だ。只約束と云ふやうなものはない、又是迄もなかつた。僕は如何なる點でも自分を束縛することは嫌ひだからね。僕は自分の所好きなやうに爲て来た、又今でも爲ることが出来る。」

キーリロフは手短かに、又蔑すむやうに自分を説明した。

「左様だ、眞個其通りだ。君の心持さへ變らなければ、所好なやうに自由に爲て居て呉れたまへ」と、ビョートル

ル・ステバーノギーチは再び満足したやうな態度で腰を卸した。君は言葉の間違ひを気にするから困るよ。近頃随分怒りッほく成つたね。それだから僕は君に會ひに来るのを避けて居たのだよ。だが、君が忠實で有るだけはすつかり安心して居たがね。」

「僕は君が大嫌ひなんだよ。だが、安心して居るが可い——僕はそれを忠實、不忠實の問題だとは思つて居ないけれどもね。」

「だがね、君」と、ビョートル・ステバーノギーチは再び退避いだ。再び誤解を招かないやうに、最一度好く相談をして置かうぢやないか。仕事は精密を要するからね。それに君は始終僕を吃驚させてばかり居るんだからね。少許談話をして可い可い。」

「お話しよ」と、キーリロフは反方を向きながら言つた。

「君はすつと前から自殺しようと思つて居た……畢竟左様いふ考へが心の中に有つただね。左様言つても可いかい、間違つては居ないだらうね？」

「今でも同じ考へを有つて居るよ。」

「上等！で、何人もそれを君に強ひた譯ぢやないが、可いだらうね。」

「左様さ、何人からも強ひられた譯ぢやないよ。君は又詰らないことを言ふね。」

「成程、僕も馬鹿な物の言方をしたものだ。勿論、他人にそんな事を強ひるのは馬鹿な話だらうからね。で、先を續けるがね。君は組織變更以前の會員だつたらう。そして、君はそれを會員の一人に告白したね。」

「告白なぞしやしないよ、僕は只左様言つたばかりだ。」

「眞個左様だつたよ。そんな事を告白するのは馬鹿な話だからね。何が告白だ！君は單に左様言つたのだ。上等！」

「些とも上等ぢやないよ、君の話は廻り冗いからね。僕は君に僕自身の理由を説明する義務はない。又君などに僕の考へを理解することは出来ないよ。僕はそれが僕の觀念だから自殺しようと思つて居るのだ、僕は死を怖れたくないから……僕は君などにそれを理解して貰はうとは思はないから自殺するのだ。君は何が欲しいのか。お茶を飲むのかい。そりや冷たいよ。お待ち、他の茶碗を持つて来て上げるよ。」

ビョートル・ステバーノギーチは實際茶碗を取上げて空の茶碗を捜して居た。キーリロフは戸棚の傍へ行つて清潔な茶碗を持つて来た。

「僕は今カルマーチノフの許で食事をして来たのだ」と、客は自分から言出した。「それからあの男の話を聞いて、此處まで走つて来たものだから大汗を掻いちやつた、何うも咽喉が乾いて堪らないよ。」

「お飲みよ。冷めたい茶は好いものだよ。」

キーリロフは再び椅子に腰かけて、凝乎と部屋の間を見詰めて居た。

「仲間にはこんな考へが有つたやうだね」と、彼は同じ聲で續けた。「僕が自殺したら、それが役に立つだらうと言ふやうな、畢竟君等が此處で何かを仕出來して、其犯罪者が搜索される時、僕が不意に自殺して、何も彼も自分の仕業だと云ふやうな遺書を残して置けば、君等は最う一年位嫌疑を遁れることが出来るだらうと云ふんだよ。」

「兎に角數日間はね。一日が却々貴いからね。」

「宜しい。で、其爲に、衆皆僕が自殺するなら延ばして呉れるやうに頼んだ、僕は仲間で其日を決める迄待つて

も可いと答へた。何方にしても僕には同じ事だからね。」

「左様、だが君は僕の居ない所ぢや其遺書を作らないと云ふだけの義務を負ふたが記憶えて居るかい。それから露西亞ぢや、君は僕の……まア僕の言ふ通りに成ると——尤も、只其目的に關したことに限るのだがね。勿論、其他の事ぢや君が自由で有るのは言ふ迄もない」と、ビョートル・ステバーノギーチは口早に言ひ足した。

「僕はそんな義務は負はない、只同意したばかりだ。僕に取つては同じ事だからね。」

「宜しい。僕は君の自尊心を傷つけようとは決して思つて居ない。だが……」

「これは何も自尊心の問題ぢやないよ。」

「だが、君が旅行するために、百二十留布の金子が贖金された事を記憶えて居ないかい。君は其金子を取つたらう。」

「いや、そんな事はない」と、キーリロフは眞顔に成つて怒つた。あの金子は左様いふ條件で貰つたのぢやない。何人が金子のためにそんな事を爲るものか。」

「時としては爲る事も有るよ。」

「嘘を吐け！僕は彼得斯堡から手紙を送つた。そして、彼得斯堡で君に百二十留布を返した積りだ。君の手に渡したぢやないか……あの金子は君が自分で持つて居るのでなけりや、確かに彼處へ送り返された積りだ。」

「宜しい、宜しい、僕は決して反對する積りはないよ。あの金子は眞個送り返された。肝心なのは君が未だ同じ心持で居ると云ふことだからね。」

「全然同じ心持だ。君が来て、さア今だと言つて呉れたら、僕は皆實行して見せるよ。最う間もなくかね。」

「そんなに永くは待たせないよ……だが、僕等は其夜二人で遺書を作るのだが可いかい。」

「其夜でも可いよ。君は僕が檄文の責任を引受けなくちや成らぬと言ふのだね？」

「未だ他にも頼む事が有るのだ。」

「僕は何でも彼でも引受けようとは思はないよ。」

「ぢや、何を引受けたくないと云ふんだね」と、ビョートル・ステバーノギーチは再びたちくとした。

「僕が嫌ひなものさ、それだけだよ。僕は最うこんな話はしたくないがね。」

ビョートル・ステバーノギーチは自ら抑制して話題を變じた。

「では、他の話をするがね」と、彼は言出した。君は今夜僕等と一緒に来て呉れぬかい。今日はヴィルギンスキイの誕生日だがね。畢竟それに托言けて仲間の會合をするのだ。」

「僕が行かないよ。」

「何卒左様言はないで来て呉れたまへ、来て呉れなくちや不可ないよ。僕等の人数と顔附とで脅かして遣らなくちや成らぬからね。君は……まア一口に言へば、宿命的な顔をして居るよ。」

「左様見えるかね」と、キーリロフは笑つた。「宜しい、では行かう、併し僕の顔のために行くんぢやないよ。何時に始まるのだね？」

「あゝ随分早いよ、六時半だ。で、君は這入つて来て、下に腰掛けて、幾許大勢其處に居ても、何人にも物を言はないで、黙つて居て呉れるんだね。只鉛筆と紙とを忘れないで持つて来て呉れたまへ。」

「そりやア何に爲るんだい？」

「何うして、そんな事は如何でも可いちやないか。僕が特にお願いするんだよ。君は只黙つて下に坐つて、何人にも物を言はないで聽いて居れば可いんだ。時々何か備忘録を取るやうな風をしてね。なに、繪を置いて居たつて構はないのだよ。」

「馬鹿な！それが如何成るんだい？」

「如何だつて、君には同じ事ぢやないか。君は何を訊いても、始終左様言つて居たんだよ。」

「いや、それが如何成るんだい？」

「なに、結社の幹部で、莫斯科の検閲使が此處へ来る筈に成つて居るんだからね。僕は最う二三の連中に、如何かすると、今夜検閲使が遣つて来るかも知れないと云ふやうなことを言つて置いたのだ。で、彼奴等は君が検閲使だと思ふに違ひないよ。それに、君は三週間も前から此處へ来て居たのだから、彼奴等は一層驚いちはアね。」

「話らない手品だね。全體此結社にや莫斯科の検閲使などと云ふものは有りやしないぢやないか。」

「うむ、そんなものは無いとしてもだね、馬鹿な。そんな事は君の知つたことぢやないよ。又それが如何して君の迷惑に成るんだい？君自身も結社の一員ぢやないか。」

「ぢや、僕を検閲使にして置きたまへ。僕は黙つて坐つて口を噤んで居るよ。だが、紙と鉛筆とは持つて行かないよ。」

「又如何してだい？」

「僕はそんなことを爲たくないからだよ。」

ピョートル・ステバーノーチは本當に顔色が蒼醒める程怒つて仕舞つた。が、再び自ら抑制した。彼は立上つ

て帽子を取つた。

「彼奴は未だ君と一緒に居るかい」と、彼は不意に低い聲で言出した。

「左様だ。」

「左様か。僕が直に追出して遣るよ。心配するな。」

「僕は些とも心配してやしない。あの男は夜間此處へ来るばかりだ。お婆さんは義理の娘が死んで病院へ行つて居るからね。僕は最う二日も一人で居るよ。で、僕はあの男に板塀の中の板が一枚外れる所を教へて遣つた。あの男は何人にも見られずに其處から這入つて来るよ。」

「僕が直き彼奴を連れ出して上げるよ。」

「あの男は夜間泊る所が澤山出来たやうに言つてるがね。」

「そりやア嘘だ、皆彼奴を捜してるから、此處に居なけりや直に目附かるよ。君は彼奴と話をしたことが有るか
い。」

「左様、夜分にね。あの男は恐ろしく君を悪く言つて居るよ。僕は夜分あの男に黙示録を讀んで聞かせた。そして、二人でお茶を飲んだ。あの男は徹宵熱心に聽いて居たよ、非常に熱心に。」

「馬鹿な、君は又あの男を基督教に化しようとして居るんだね。」

「あの男はあの儘基督教徒だよ。心配したまふな、あの男は人殺しもするよ。君は何人を殺さうと思つて居るんだい？」

「いや、僕は其爲にあの男を要するのではない、最つと違つた事のために要するのだよ……で、シャトーフは

フエツカのことを知ってるのか。」

「僕はシャトーフとは話もしないし、會ふこともない。」

「あの男は怒つて居るのかい。」

「いや、僕等は喧嘩をした譯ぢやない、只互に避けて居るばかりだ。二人は亞米利加で餘りに永く一緒に寝て居たからね。」

「僕はこれから直にあの男に會ひに行く積りだ。」

「如何なりと。」

「スタフロロギンと僕とは十時に君に會ひに来ようと思つて居るがね。」

「あゝ可いよ。」

「僕は或重要な事をあの男に話さうと思つて居るのだ……で、僕に其事を呉れないか。君は最うそんな物要らないだらう？僕はそれで矢張り體操をする積りだ。何なら金子を拂つても可いよ。」

「いや、代は要らないから持つて行きたまへ。」

ビョートル・ステバーノギーチは毯を上衣の後ろの衣籠に押込んだ。

「だが、僕はスタフロロギンのために成らぬやうぢや何にも君に與らないよ」と、キーリロフは訪客を送り出しながら背後から呟いた。後者は愕いて相手を見遣つた。が、何にも言はなかつた。

キーリロフの最後の言葉は少なからずビョートル・ステバーノギーチを迷はせた。彼は未だ能く其意味が解らなかつた。が、シャトーフの部屋へ通ずる階段を上りながら、彼は一生懸命に當惑の色を隠して、愉快さうな顔附を

装つて居ようと努めた。シャトーフは自宅に居たが、身體の加減が好くないと見えて、着物を着たまゝ寢臺の上に横に成つて居た。

「いや、悪い所へ来たね！」と、ビョートル・ステバーノギーチは扉口から大きな聲で叫んだ。「實際病氣なのか。」彼の愉快さうな顔の表情は不意に消えた。彼の眼には憎惡の光が有つた。

「いや、決して」と、シャトーフは神經質らしく飛び上つた。「僕は決して病氣ぢやない。少許頭痛がするばかりだ。」彼は度を失つて居た。不意にこんな客の飛び込んで来たのが彼を愕かせたものらしい。

「君は僕が遣つて来た要件のためにも病氣などして居る處ぢやないぞ」と、ビョートル・ステバーノギーチは早口に、殆ど有無を言はせないやうに言出した。「兎に角坐らせて呉れたまへ。」彼は椅子に落着いた。「君は矢張り其寢臺に腰掛けて居た方が可いよ。それで宜しい。今夜ヴィルギンスキイの宅に、あの男の誕生日に托言して吾々仲間の會合が有るんだがね。いや、別に政事上の意味はない——そりや僕が其様にして置いた。僕は又ニコライ・スタフロロギンと一緒に行く積りだがね、勿論、僕は君が近頃の傾向を知つて居るから、彼處へ君を引張つて行かうとは思はないさ……尤も、只君に迷惑を掛けたくないと思ふからで、決して君が僕等を裏切るだらうと思ふからぢやないがね。併し事の成行上、君にも一つ出掛けて貰ひたいのだ、畢竟君が彼處で當事者に會つて、如何いふ具合にして君が此結社を去るか、又誰に君が今保管して居る物を渡したら可いか、それを一つ最後に決定して貰ひたいと思ふのだがね。なに、僕等は何人にも氣附かれぬやうにそれを相談する積りだ。僕は君を隅っこへ連れて行くよ。今夜はいろんな奴が遣つて来るが、誰にも彼にもそんな事を知らせる必要はないからね。白状するが、僕は君のためにこれで随分舌を揮つた積りだよ。が、今ぢやあの連中も承知したらしい。勿論、君が印刷機と有ら

ゆる印刷物を渡すといふ條件でだがね。それから君も所好な所へ行つて可いんだよ。」

シャートフは顔を盛めながら聴いて居た。一時神經質的に昂奮したのが全く痕を隠した。

「何人だか判らないが、そんな奴等に僕は辯解する義務は少しも認めないよ」と、彼は斷乎として言ひ切つた。

「何人も僕に自由を與へるやうな權利は有つて居ないよ。」

「いや、左様は行かないね。君にはいろんな事が委任して有る。随つて君が單に分離しようたつて、そんな權利はないよ。加之、君は未だあれに就いて明瞭な説明を與へないぢやないか。」

「僕は此處へ着くや否や手紙で僕の地位を明かにして置いた積りだ。」

「いや、餘り明かぢやなかつた」と、ビョートル・ステバーノギーチは徐かに言ひ返した。「僕は此處で印刷して貰はうと思つて、あの「高い人格」を君の許へ送つて寄越した。そして、其印刷物を必要の時期迄此處に保管して貰ふ積りで居た。又、あの二つの檄文も左様だね。處で、君は何とも説明の附かない曖昧な手紙を添へて、それを送り返した。」

「僕はあれを印刷することは斷然斷つたのだよ。」

「うむ、斷然とは言へないね。君は印刷することが出来ないとは言つて来た。が、如何いふ譯で出来ないのか、それは説明してない。」出来ないと云ふのと、「遣らうと思はない」と云ふのとは意味が違ふからね。單に君が如何の事情で印刷することが出来ないのだとも取れるぢやないか。實際又衆皆が左様取つた。そして、君はなほ結社との關係を續けて行く積りだと考へて居た。従つてあの連中は君に對して、再び何事かを委託しないとも限らない、其結果自分達を危ふくしたかも知れないだね。此處の連中は皆君が單に彼等を欺かうとしたのだ、従つて君は何

か重要な物を手に入れたら、彼等を裏切るかも知れないなぞと言つて居るよ。僕は力の限り君を辯護して置いた。そして、君の利益に成る證據物としてあの短い手紙を見せて遣つた。だが、あの二行を讀み直して見ると、あれは如何しても誤解を招く、如何してもあれが決定的な通告だとは思はれないね。」

「ぢや、君はあの手紙を大事にして持つて居たのだね？」

「持つて居たとて別條はないさ。此處にも持つて居るよ。」

「うむ、如何でも可いやうにしろ！」と、シャートフはかつと成つて叫んだ。「僕が彼奴等を裏切つたと思ひたりや思ふが可いさ——それが僕に如何なんだい？ 君等は僕を如何することが出来るか、まア見て居て遣らうよ。」

「君の名は手帖に記して置かれた上、革命の第一の成功に首を絞められるばかりさ。」

「畢竟君等が勝利を博して、露西亞を支配する時にと云ふんだね？」

「別に笑ふことはないよ。最一度言ふがね、僕は君のために辯護したよ。兎に角、悪い事は言はないから今日は出掛けたまへ。口先だけの自負心から、無駄な言葉を費すことはないさ。まア友達として別れた方が可いぢやないか。何れにしても、君はあの印刷機と、古い活字と、紙とを此方へ渡さなくちや不可ないよ——そこが相談すべき點だね。」

「行くことは行くよ」と、シャートフは何か考へて居るやうに頭を垂れたまゝ呟いた。

ビョートル・ステバーノギーチは自分の座から流盼に相手を見遣つた。

「で、スタフローギンも彼處へ行くのか」と、シャートフは不意に頭を擡げながら訊いた。

「確かに来る筈だよ。」

「はッア！」
 二人は又少時黙つて居た。シャトーフは苛々しながら蔑すむやうに笑つた。
 「で、君のあの卑陋な「高い人格」だがね——僕が此處で印刷しないと云つた——あれは最う印刷したのかいと、彼は訊いた。

「あゝ、偽だよ。」

「ヘルチエン自身君の寫眞帖に書いたのだと、中學生にでも信じさせようと云ふのだね？」

「あゝ、ヘルチエン自身書いたのだよ。」

二人は又三分間許り黙つて居た。到頭シャトーフは寢床から起上つた。

「此部屋を出て行つて呉れたまへ。僕は君と一緒に居たくないよ。」

「出て行く處だよ」と、ビョートル・ステバーノギーチは快活に言つて、直様立上つた。「只一言、キーリロフは目下部屋に一人で居るのかい。召使もなしに」

「一人だよ。さア出て行け、僕は最う君と同じ部屋に居るのが堪へられないよ。」

「うむ、何も彼も上等だ！」と、ビョートル・ステバーノギーチは街の上へ飛び出しながら愉快相に考へた。「今夜も屹度上等に行くだらうよ、だから堪へないや。悉皆願つたり叶つたりだ？露西亞の神様が俺を扶けて御座ると見えるね。」

七

彼は其日いろんな使ひ歩きに非常に忙しかつた、又恐らくは到る所成功もした。其晩の六時頃彼がスタフロロギンの家に立寄つた時、それが彼の満足らしい顔附にも表はれて居た。が、直には通されなかつた。スタフロロギンはマヴリーキイ・ニコラーエギーチと二人で書齋に閉籠つて居ると云ふのだ。此の報知は忽ちビョートル・ステバーノギーチを不安にした。彼は書齋の扉口に近く突立つたまゝ、訪客の出て行くのを待つて居た。對話は壁越しに聞くことが出来たが、言葉ははつきり解らなかつた。尤も、訪問は長かよらなかつた。間もなく椅子を曳くやうな騒々しい物音がして、急に聲高な話聲が聞えたかと思ふと、さつと扉口が開いて、マヴリーキイ・ニコラーエギーチは眞蒼な顔をして飛出して來た。彼はビョートル・ステバーノギーチに眼も呉れず、あたふた駈出して行つて仕舞つた。ビョートル・ステバーノギーチは直様書齋の中へ飛び込んだ。

私は二人の「競争者」の間に起つた此の短い會見の始末を報告せずには居られない。實際、現在の事情の下には、こんな會見は起りさうにもない。が、實際起つたのだ。

事の由來は斯うだ。ニコラーイ・フシエヴォロードギーチは午餐の後で書齋の寢椅子に凭れながら、午睡を食つて居た。處へ、アレキセイ・エゴリーイチが想ひ掛けない客の來訪を通じて來た。客の名を聞いて、彼は思はず飛上つた。最初は眞實とも思はなかつたらしい。が、間もなく唇の上に微笑が閃いた——思ひ上つた勝利と、同時に逆も信じられないやうな吃驚の微笑で有る。客のマヴリーキイ・ニコラーエギーチは這入つて來た時、此事情に驚かされたらしかつた。兎に角、彼は其儘前へ進まうか、それとも引返さうかと思ひ惑つたやうに、室の眞中に突立つて居た。スタフロロギンは直様顔の表情を一變して、眞面目な驚愕の容子を裝ひながら、一步客の前へ乗出した。客は主人の伸べた手を取らうとしなかつた。へどもどしながら椅子を動かして、一言も物を言はずに、主人

の言葉も待たないで、それに腰掛けた。ニコライ・フシエヴォロードギーチは斜に相手に面しながら、長椅子の上へ腰掛けた。そして、マヴリーキイ・ニコラーエギーチの顔を見詰めながら黙つて待つて居た。

「貴方は出来れば、リザベータ・ニコラーエヴナと結婚しませんか」と、マヴリーキイ・ニコラーエギーチは少時して、不意に言出した。殊に不思議なのは、言葉の調子から見ても、それが懇請だとも、推舉だとも、降伏だとも、命令だとも、何とも言へないことで有つた。

スタフロギンは尙且黙つて居た。が、客は言はうと思つて来たことを悉皆言つて仕舞つたと見えて、相手の返辭を待ちながら、凝乎と主人の顔を見詰めて居た。

「私の思ひ違ひでなけりや——尤も、今ぢや確かだと思ひますがね——リザベータ・ニコラーエヴナは最う貴方と婚約が出来て居るのでせう」と、スタフロギンは漸つと返辭をした。

「あゝ、婚約はちやんと出来て居ますよ」と、マヴリーキイ・ニコラーエギーチはツツきりと言つて退けた。

「貴方は……喧嘩でもしたのですか。言ひ過ぎたら御免なさいだがね。」

「いや、あの女は「私を愛しても居れば尊敬もして居る。」あの女が左様言ふのですよ。あの女は言葉は何物よりも尊いのですからね。」

「それに就いて毫も疑ふ處は有りませんよ。」

「ですが、あの女は結婚式の當日教會の祭壇の下からでも、貴方が喚びさへすりや、私も、何も彼も打捨つて貴方の許に走りますよ。」

祭壇の下から？」

「えゝ、祭壇の下からでも。」

「貴方は何か思ひ違ひをして居られるんぢやないか。」

「いや、あの女の貴方に對する不斷の眞面目な、緊張した憎惡の下には、機會さへ有れば愛が迸らうとして居る……そして、あの狂氣ですね……あの眞面目な無限の愛と……あの狂氣ですね！それに反して、あの女が私に對して有する愛の下には——それも極めて眞面目なものでは有りますがね——機會さへあれば憎惡が閃かうとして居る……最も緊張した憎惡ですね！私も以前にはこんな推移を想像もしなかつた……夢にも。」

「だが、私は驚くね、貴方は如何して此處へ来て、リザベータ・ニコラーエヴナの手を取引することが出来るのですかい。貴方はそんな權利を有つて居るのか、あの女が貴方に委任したのか。」

マヴリーキイ・ニコラーエギーチは顔を蹙めながら、少時頭を垂れて居た。

「そりや言葉の上の争ひだ」と、彼は不意に言出した。「言葉の上の復讐や勝利が何に成る？私は貴方が無言の意味を察して下さるだらうと信じて居ましたよ。これが詰らない自負心を彼は言ふ場合ですか。これでも貴方には十分ぢやないのですか、私は實際の上に點を打たなくちや成らぬのですか、何も彼も言つて仕舞はなくちや成らぬのですか。宜しい、貴方が飽迄私の屈辱を見ようと云ふのなら、私はいの上に點を打つて見せますよ。私は何の權利もない。そんな事を委任されるなど、私には有得ないことですからね。リザベータ・ニコラーエヴナは未だ何にも知らないのだ。只あの女の許嫁の所天は到頭正氣を失つて、風癪病院へ入れられるばかりに成つて居るので。おまけに——おまけに、こんな事を貴方の許へ言ひに来たのです。貴方は此世であの女を幸福にするもの出来る唯一の人だ。私はあの女を不幸にするばかりだ。貴方は何人にもあの女を渡さうとは思はなかつた、貴方はあ

の女を追掛けて居た。が——如何いふ譯か私には解らない——貴方はあの女と結婚しないのだ。若しそれが外國で有つた二人の喧嘩のためだと云ふのなら、又其誤解を解くために私が犠牲にされなくちや成らぬと云ふのなら、可いから私を犠牲にして下さい。あの女は餘りに不幸ですぞ。私は最うそれに堪へられない。私の言葉は批准でもなければ、命令でもない。従つて貴方の自尊心に累を及ぼす筈もないのです。若し貴方が祭壇の下に於ける私の地位に取つて代らうと思つたら、貴方は私なぞの許可を待たないで左様することも出来るのです。左様すりや、私はわざ／＼貴方の許へこんな狂人染みたことを言つて来るにも及ばないのですよ。況んや私が今取つて居るやうな處置を取つた以上、二人の結婚は全然不可能に成るのですからね。私は自分を卑劣な野郎だと信じながら、祭壇の下への女を導くことは出来ない。私が此處でして居ることは、私が貴方に、恐らくはあの女の最も憎んで居る敵に女の女を渡すといふことは、私に取つては如何しても宥しがたい罪惡のやうに思はれるのですからね。」

「貴方は私達の結婚の日に自殺するのせうね？」

「いや、すつと後です。何のために私の血であの女の結婚の暗衣を汚すのですか。恐らく私は自殺なぞしないかも知れない、今にも、後にも。」

「貴方は左様言つて私を安心させるのでせう？」

「貴方を？一滴餘計に血を流した處で、それが貴方に何ですかい。」

彼の顔色は眞蒼に變じて、眼は輝いて居た。一瞬の沈黙が續いた。

「御免なさい、詰らないことを訊いて」と、スタフロロギンは再び言出した。「あんな質問をする権利は私にはなかつたのだ。が、一つだけは貴方に訊ねる権利が有るやうに思ひますがね。貴方は如何いふ事實からリザベータ・

ニコラーエヴァナに對する私の感情に就いて、そんな結論を導いて來たのですか。私は、貴方が此處へ來て……こんな提言を敢てしたのを正當とするやうな、私の方の感情の度合に對する貴方の確信に就いて言つて居るのですよ。」

「なにソ？」と、マヴリキイ・ニコラーエギーチは本當に飛び上つた。「貴方はあの女の手を獲ようとはしなかつたのか。今でもして居るんぢやないのか、貴方はあの女の手を獲ようとは思つて居ないのか。」

「原則として、私はあの女に限らず、何の女に對しても、自分の感情を當の女以外の第三者に對して語らうとは思はない。それは貴方も宥して下さらないぢや、私の性癖なんだからね。だが、其代りには、他の事なら何でも眞實の事を話して上げますよ。私は既に結婚して居るのです。従つて私には他の女と結婚することも出来なければ、又他の女の「手を獲よう」とすることも出来ないのです。」

マヴリキイ・ニコラーエギーチは驚愕の餘り、思はず椅子の中で飛び退つた。そして、少時の間凝乎とスタフロロギンの顔を見詰めて居た。

「そんな、そんな事は少しも知らなかつた」と、彼は呟いた。「貴方はあの朝未だ結婚して居ないと言ひましたね……だから、私は貴方が未だ結婚して居ないのだとばかり信じて居ましたよ。」

彼は死んだ者のやうに蒼く成つた。不意に全身の力を罩めて卓子の上に拳骨を打ち下した。

「左様いふ告白をして置きながら、なほリザベータ・ニコラーエヴァナに着き絡つて、あの女を不幸にするやうなことが有つたら、私は溝の中の犬のやうに杖で貴方を打殺して上げるよ。」

彼は飛び上つて、急に室の外へ駆出して仕舞つた。ビョートル・ステバーノギーチは室の中へ駆け込みながら、

全然思ひも寄らない心的状態の下に主人を見出した。

「あゝ君だつたか」と、スタフローギンは聲高に笑ひ出した。彼は只ビョートル・ステバーノギーチの好奇心に溢れたやうな顔附に刺戟されて笑ひ出したやうに見えた。

「何だ、扉口で聴いて居たのか。一寸お待ち。何の用で来たんだね？ 僕は何か君に約束したかい。あゝ、解つた、仲間の者に會ひに行く筈だつたね。ちや行かう。喜んでお供するよ。實際君は好い時に誘つて呉れたよ。」

彼は帽子を掴んで立上つた。二人は間もなく戸外へ出た。

「君は今から仲間の者に會ふ時のことを豫想して笑つて居るのか」と、ビョートル・ステバーノギーチは、或時は煉瓦を敷いた舗道の上を伴侶と並んで歩いたり、或時は又泥濘の中へ足を突込んだりして、追従らしく跟いて通りながら、快活に囁つた。スタフローギンは伴侶の者が足を運ぶ場所がないのにも頓着しないで、すん／＼道の真中を歩いて行つた。

「僕は決して笑つて居る譯ぢやないよ」と、彼は聲高に、又快活に言つた。「それ處か、僕は皆眞面目な連中が集つて居るだらうと信じて居るよ。」

「君が嘗て言はれたやうに、「陰鬱な鈍漢」ばかりですよ。」

「時としては陰鬱な鈍漢よりも面白いものはないからね。」

「あゝ、君はマヴリーキイ・ニコラーエギーチのことを言つてるのだね？ あの男は許嫁の女を君に譲らうと言つて来たのだらう？ 僕が間接に左様するやうに勸めて置いたからね。えゝ、何んなものだね？ で、若しあの男の方で女を譲らなけりや、此方で取るばかりだからね。左様ぢやないか——えゝ？」

ビョートル・ステバーノギーチもこんな事を言出すからには、非常な冒險を敢てして居るのだとは知つて居た。が、彼も昂奮した際には、何時迄も不安定の儘で居るよりは寧ろ冒險を敢てしようとした。スタフローギンは只笑つて居た。

「君は未だ僕の手助けを爲ようと覗つて居るんだね？」と、彼は訊いた。

「君が僕を喚びさへすれば。だが、此處に一つ最つと上等な手段が有るんだぜ。」

「それは教へて貰はれないかね。」

「あゝいや、そりや少時秘密だよ。で、秘密といふものは値を拂はなくちや成らぬものだが、御存じかい。」

「僕は何れ位するか知つて居るよ」と、スタフローギンは一人で呟いた。が、直に又自ら抑制して黙つて居た。

「何れ位する！ 何と仰有いましたい？」と、ビョートル・ステバーノギーチは續いて言つた。

「僕は君も君の秘密も如何でも可いと言つたんだよ。それよりも、彼處には何んな連中が集つて居るか言ひたまへ。僕も誕生日の會に行くところだといふことは知つて居るよ。が、何んな連中が居るんだい？」

「あゝ、いろんな連中が居るよ。あのキーリロフも。」

「結社の會員は悉皆？」

「馬鹿な、君は餘まり先を急いで居るよ。未だ結社なぞといふものは有りやせんやね。」

「ぢや、如何してあんなに澤山機文をばら撒くことが出来たのだい？」

「これから行く處には、四人だけ會員が居るよ。他の者は試験中で互に一生懸命動靜を探り合つて居らね。そして、僕の許へ報告を持つて来るよ。實際希望を屬するに足る連中だよ。何うしても此方で組織を立て遣らなけ

りや成らぬ材料だね、それから——それからは一昨日来いさ。尤も、君は自分で規則を立てた位だから、僕が説明する迄もないのだがね。」

「ちや、餘まり都合よく行つて居ないのだね？ 何か故障でも有るのかい。」

「何うして、是以上は望まれない程都合よく行つて居るさ。眞個面白い位だよ。一番恐ろしい効験が有るのは、あの連中に役の名を與へることだね。これより有力なものはないよ。僕はわざと役の名や地位を案出して遣つた。秘書官も有れば、祕密探偵も有る、出納係も、記録係も、又其の輔佐も有るんだね。あの連中は恐ろしく左様いふことが所好で、皆盲く行つて居るよ。それから第二の勢力は言ふ迄もなく感傷主義だよ。御存じの通り、吾々の間に社會主義が擴まつたのは、主として感傷主義の力に據るのだからね。只困るのは、他人の肩に嚙み着くやうな士官連の有ることだがね。時には君迄迷惑を掛けるかも知れないよ。で、其次に来るのは真正正銘の惡漢どもだ。いや、彼奴等はなかく、好いもので、時には非常に役に立つことも有るよ。だが、彼奴等は恐ろしく此方の時間を潰させるよ、何しろ始終見張つて居なくちや成らないからね。で、一番肝心な勢力は——有らゆるものを一緒に纏めて行く要素だね——あの連中が自分自身の意見を有つことを恥ぢて居るといふ處に有るんだよ。それが一つの勢力でさ。彼奴等の頭に自分自身の考へが一つも残されて居ないと云ふのは、一體何人の仕業かい。何人がそんな偉い事を成就したのかい。眞個彼奴等は獨創を不名譽と心得て居るんだよ。」

「それちや、如何して君はそんなに骨を折るんだね？」

「如何してと言つて、衆皆がほんやり口を開いて待つてりや、如何したつて引張つて来すには居られないぢやないか。君は眞面目に成功の可能を信じないのか。成程君は信仰を有つて居る。併し人間は意志が必要だよ。實際成

功するのは、斯ういふ連中を相手に仕事をする時に有るのだからね。君に言つて置くがね、僕は彼奴等に火でも潜らせることが出来るよ——只お前達の思想は未だ十分進んで居ないと言つて遣りや、それで可いのだよ。僕が「幹部員」だの「無数の支部」だのと、此處の連中を皆騙したと言つて非難する馬鹿が有るがね。あゝ、君も左様言つて一度僕を責めたことが有つたよ。だが、何處に瞞着が有るかい。君と僕とは幹部員で、支部だつて、何處にでも有るぢやないか。」

「皆愚民の集まりだよ。」

「生の材料でさ。あれでも役に立つことが有るよ。」

「で、君は未だ僕を勘定に入れて居るんだね？」

「君は首領だよ、發頭人だよ。僕は只輔佐で、君の祕書役に過ぎないのさ。僕等は遊船に乗込むんだよ、ねえ。權は楓に、帆は絹に、舳にや美しい乙女のリザベータ・ニコラーエヴナが坐つて居る……畜生、其の先きは如何やら唄ふんだつたね。」

「此奴は如何かして居るよ」と、スタフロギンは笑つた。「いや、僕が最つと好い話をして上げるよ。君は指を折つて、此結社を纏めて行く勢力を數へたがね。役の名や感傷主義も眞個好い膠灰には相違ないよ。だが、此處に最つと好い事が有る。畢竟四人の會員に吹込んで、五人目の奴を反逆者と云ふので殺させるんだね。左様すりや、君は彼奴等の流した血で、彼奴等を繩で縛るやうに結束することが出来るよ。彼奴等は君の奴隸に成つて、君に反對も出来なければ、君の責任を問ふことも敢てしないやうに成るよ。は、は、は！」

「だが、お前は……お前はそんな言葉の代を拂はせられるよ」と、ビョートル・ステパーノギーチは一人で考

へた。それも今晚の間にだ。實際、お前は些と言ひ過ぎたからね。」

そんな様なことをビョートル、ステバーノギーチは心の中で考へて居たに違ひない。二人はヴィルギンスキイの家に近づいて居た。

「君は僕のことを屹度外國から来た會員だなどと言つて置いたらうね、殊に萬事労働協會と關係を有つた検閲使だなど」と、スタフローギンは不意に訊ねた。

「いや、検閲使ぢやない。君は検閲使には成つて貰はないよ。だが、外國から来た發頭人の一人だとは言つて置いた、最も重要な機密に參した——それが君の役割だよ。勿論、君は演説をして呉れるだらうね？」

「如何してそんな事を想ひ着いたのだい？」

「君は今夜演説をする義務が有るんだよ。」

スタフローギンはぎくりとして街燈に近く、街の真中に立停つた。ビョートル、ステバーノギーチは平然として相手の眼を見返した。スタフローギンはかつと唾を吐いたまゝ、すたく歩き出した。

「で、君は演説をするのかい」と、彼は不意にビョートル・ステバーノギーチに訊いた。

「いや、僕は只君の演説を聞いて居る積りだよ。」

「畜生、君は實際僕に一つの考へを起させるよ。」

「何んな考へだい？」と、ビョートル・ステバーノギーチは口疾に訊いた。

「恐らく、僕は彼處で演説をするだらうよ。だが、其後で君に拳骨を一つお見舞ひ申す積りだ——立派な拳骨だよ。解つてるかい。」

「時に、僕は今朝カルマーチノフに、君があつた男は昔で打たれるのが相當だ、單に形式的にはない、百姓を打つやうに打たれるのだと言つて居たと話して遣つたよ。」

「僕はそんな事を言つた覚えはないよ。は、は！」

「構はないさ。So non è vero……（それが眞實でないにしても……）」

「うむ、有難う。僕は本當に感謝するよ。」

「それから斯ういふ事が有るんだよ。あのカルマーチノフがね、吾々の信條の精髓は名譽の否定で有る、不名譽でも居られるといふ權利を公然主張しさへすりや、露西亞人は一番容易に誘惑されるものだと言つて居たよ。」

「成程立派な言葉だね。金言だよ」と、スタフローギンは叫んだ。「眞個それは當つて居るよ。不名譽に對する權利——何うして、彼奴等は皆僕等の後にくツ着いて来て、一人だつて後に残るものはないね！で、ヴェルホーエン

スキイ君、君は高等警察の一人ぢやないのか、左様だらう？」

「そんな事を考へて居る人間は、口に出すものぢやないさ。」

「そりや解つて居るがね、僕は二人だけしか居ないのだよ。」

「いや、僕は當分未だ高等探偵ぢやないよ。それはそれとして、最う着いた。スタフローギン君、好く顔色を落着けたまへ、僕も始終這入つて行く時には、左様するんだよ。沈鬱な顔をしてりや、それで可いのだ。其外には何

にも要らない。譯はないのよ。」

第六章 會 合

ヴァイルギンスキイはムラーヴィン街に於ける自分の家にと云ふよりは細君の家に棲んで居た。木造の一階家で、他に一人も宿泊人はなかつた。ヴァイルギンスキイの誕生日に托言して、其夜十五人の客が聚つた。が、普通此地方の誕生日の祝ひの席で見るやうな舞臺の用意は少しもなかつた。二人が結婚した當初から、夫婦の間に、誕生日に客を招待するやうな馬鹿な真似は一切しないやうに協定された。又、實際「誕生日だからとて喜ぶ理由は一つもないので有る。数年の間に、此夫婦は有らゆる社會から完全に隔離することに於て成功した。主人の方は一種の才能も有る男で、又決して貧乏といふ程でもないが、兎に角何人の眼にも孤獨の所好な、甚しいのは、「對話をしても、何處か横柄な」變り者のやうに見えた。細君は産婆を業として居た。其事實からして、社會の最下層に有るものとせられ、所天が士官の階級に有るにも拘はらず、牧師の細君よりも下目に見られて居た。が、彼女は其地位に相當する謙遜を缺くことに於ても著しいものが有つた。殊にレビヤードキンとのあの馬鹿な、容赦の成らぬ密通——尤も彼女は只「主義の上から」實行したものでは有らうが——此町の婦人連は如何な寛大な女でも唾を引被けむばかりにして背を向けた。それを又ヴァイルギンスキイ夫人は望む處と言はむばかりに振舞つた。で、可訝しいのは、左様いふ婦人連が懐妊になると、他に三人も産科醫が有るのを差置いて、此のアリーナ・プロホローヴァ——即ちヴァイルギンスキイ夫人——に懸るやうにした。彼女は又近郊の田舎の家族からも招待された。それ程に、彼女の其道に於

ける知識と、運と、經驗とは知れ渡つて居た。で、終ひには招かれても金持の家には行かないやうに成つた。彼女は又素的に慾が深かつたのだ。斯うして自分の勢力を感じて來ると、いよく増長して仕たい三昧を振舞ふやうに成つた。町でも好い得意先へ招かれて行きながら、手術の際、故とてかばちに作法を無視したり、安産のお守札や御封などが手頼に成るやうな場合にも、有らゆる灼然な物を罵言したりして、神經質に成つて居る産婦を驚かしたものだ。町の醫者でラザーノフと云ふのが——これも産科醫で有つたが——言明する所に據れば、或時な産氣の附いた産婦が大神の御名を喚んで叫んで居る際に、突如として拳銃の弾丸のやうに發せられたアリーナ・プロホローヴァの自由思想的熱罵が患者の上に怖ろしい影響を與へて、ために出産の期を早めたことも有るさうな。尤も、彼女も虚無主義者では有つたが、自分の利得に成る場合には、決して或種の舊式な社會的迷信を忘れるやうなことはなかつた。例へば、嬰兒の洗禮式にも出席を避けなかつた。平常はだらしが無いので有名な女なのに、左様いふ時には裾の長い緑色の一張羅を引張つて、髪も撫で附けてかく、させながら出張に及んだものだ。で、儀式の間は、始終「不遜な態度」を取つて僧侶どもを撃つて置いた。が、一度それが終ると、お極りのやうに三鞭を容に注いで廻つたものだ——又それが爲に、彼女は服裝を飾つて來るのでも有つた——で、若し彼女に御祝儀のお初穂も上げないで、盃を取上げやうたつて、それは駄目だ。

其晩、ヴァイルギンスキイの家に聚つた客——主として男——は一種並外れた風采を帯びて居た。晩餐の用意も骨牌もなかつた。随分古びた着色の壁紙を貼つた大きな客間の眞中に、二つの食卓を一緒に並べて、餘り清らかでない大きな食卓被けを被け、其上に二つの湯沸器が沸つて居た。食卓の端には、二十五の洋盃を載せた素張しく大きな盆と、男女兒童の寄宿舎で見るやうな、同じ大きさの片に庖丁を入れた幾つかの佛蘭西麵包を盛つた籠とが目に

立つた。アリーナ・プロホロヴァの姉で三十許りの老嬢がお茶を注いで廻つた。むつとりとした意地の悪さうな女で、亞麻色の髪をして眉毛がない。妹の進歩的思想に感觸れて、家庭生活に於てはヴィルギンスキイ自身に取つて有力な恐怖の對象で有つた。室の中には婦人が只三人しか居なかつた、家の女主人と、眉毛のない姉と、ヴィルギンスキイの妹で最近彼得堡から歸つて来た女學生と。アリーナ・プロホロヴァは一寸濼皮の剥けた二十七歳の快活な女で、髪も亂れたまよ、藍がよつた毛織の平常着を被りながら、「御覽よ、私は何物も恐れては居ないよ」とでも言ふやうに、ぢろ／＼と大きな眼で客を見廻して居た。ヴィルギンスキイ嬢は林檎のやうな頬邊をして、矢張一寸濼皮の剥けた、身丈の低い、圓々と毬の様に肥つた女學生の虛無主義者で、未だ旅行服を着たまよ、アリーナ・プロホロヴァの傍に坐つて居た。彼女は手に紙の束を持ちながら、落着きのない眼に、甲から乙と客の顔を見廻して居た。ヴィルギンスキイ自身は此夜何處か加減が悪いやうに見えた。が、矢張這入つて来て、茶卓子の傍の安樂椅子に着いた。客は皆食卓を周つて、一様に椅子に着いた。其光景招宴と云ふよりは、何かの會議を思はせるものが有つた。一同明かに何事かを豫期しながら、其合間に聲高な傍若無人の會話を續けて居た。が、スタフローギンとヴェルホーエンスキイが這入つて来た時には、不意にひつそりとした。

處で、私は一層事情を明かにするために、二三の説明を許して貰はなければ成らない。

想ふに、これ等の人々は何か特に面白い事が聞かれるといふ愉快な期待の下に聚つたので、又豫め左様告げられても居た。彼等は此の舊い町に於ける赤熱的な過激論者の花で、今夜の「會合」のためにヴィルギンスキイの手で一人々々撰り出されたものだ。序ながら、彼等の或者は——多數ではないが——一度も前に彼を訪れたことはなかつた。勿論又客の大多數は如何いふ譯で招かれたかも知然知らなかつた。只當時總ての人が皆ビョートル・ステバ

ーノギーチを外國から全權を賦與して派遣された密使だと考へて居たことは事實で有つた。兎に角、左様いふ考へが彼等の間に根柢を有つて居たから、今夜の招待は痛く彼等の心を動かした。それに又此度へ聚つた客の中には、早くも一定の目的を明かされて居る者も二三有つた。ビョートル・ステバノーギーチは既に莫斯科でも、又後に知れたことだが、此州の士官連の中でも組織したやうな「五人組」を吾々の中にも設けることに成功して居た。彼は又州にも最一つ持つて居たと云ふことだ。かく撰り抜き五人組も今夜は一同と均しく大きな食卓に着いて、巧に普通一般の人民で有るやうな風采を裝つて居た。従つて何人もそんな連中が居るとは知らなかつた。其連中は——最も秘密でないから言つても可いが——リープティンを始めとして、次にヴィルギンスキイ自身、それからジガールフー・ヴィルギンスキイ夫人の兄弟で、耳の長い紳士——それからリヤムジン、最後にトルカーチenkoと稱はれた不思議な男が加はつて居た。此男は四十年配で、人民、特に窃盜や泥棒を熟知して居ると云ふので名高い人物で有つた。彼は其爲に——尤も、全然研究の爲ばかりでもないが——わざ／＼居酒屋などへ出入して、汚ない着物の、泥塗れの長靴だの、下々の者の使ふべらんめえ調だので武裝しながら、大變得意に成つて居た。リヤムジンは二度此男をステバーン・トラフィモーギーチの集會にも連れて行つたが、其處では餘り持てなかつた。彼は鐵道に使はれて居て、仕事のない時でもなけりや、減多に町へは出て來なかつた。

此の五人は自分達の五人組が露西亞全國に散在する何百千といふ集團の一つに過ぎない、そして、それ等の集團は各自中央に於ける秘密の一大勢力の下に従屬して居る、そして又、其中央の勢力は全歐羅巴の革命的運動と密接の關係を有するのだといふ確信の下に、第一の集團を組織して居た。が、残念なことには、當時既に彼等の間に一種の齟齬を生じて居た。彼等は此春以來、ビョートル・ステバノーギーチの來着を待つては居たが——最初はトルカ

「チニコの手に傳へられ、次にはジガロフの到着に依つて先觸れが有つたので——彼等は又彼から一種の奇蹟でも期待して居たやうに、一言の批評も加へないで即座に彼の召喚に應じたものよ、五人組を組織するや否や、如何やら自分達が侮辱されて居るやうな気がして来た。尤も、それは彼等が餘りに取急いで連盟に赴いたからでも有るのだ。勿論、彼等がそんなに取急いだのは、後で彼等が連盟を恐れたなどと取沙汰されたくないといふ、決して高潔でないとは云はれない羞恥の感情から出たものでは有つた。而も彼等はビヨートル・ステバーノギチが最少し彼等の任侠を多として、少くとも何か實際上重要な機密を漏すべき筈だと云ふやうに感じて居た。が、ヴェルホーエンスキイは毫も彼等の正當な好奇心を満足させようとはしないで、必要な事柄以外には何にも彼等に語らなかつた。彼は通則として彼等を非常に嚴格に、一方では又等閑に遇つて居た。これは勿論彼等の不満を烈しくした。ジガロフの如きは斷然彼の責任を問ふべきものとして、他の仲間を煽動して居た。勿論、今夜のやうに、大勢他人の居る此席でと云ふ譯ではないけれど。」

又想ふに、前に擧げた五人組の會員は、其晩ヴェルギンスキイの家で招かれた客の中にも、同じくヴェルホーエンスキイの手に依つて此町の中に設けられ、同じ秘密結社に屬しながら、自分達の未だ知らない、他の集團の會員も来て居るだらうといふやうな疑懼を抱いて居たものらしい。従つて、實際總ての出席者は互に他を疑つて、互に妙な態度を持して居た。それが爲に、全會が極めて複雑な、寧ろロマンティックな色彩を帯びて居た。尤も、中には有らゆる猜疑を超越した人物も交つて居た。例へばヴェルギンスキイの近い親戚で陸軍の少佐が来て居たが、これは何にも知らずに、只誕生日の祝ひが有ると聞いて招かれもしないのに遣つて来たので、何うも歸す譯にも行かなかつたのだ。が、ヴェルギンスキイは此少佐が「彼等を裏切ることの不可能」を知つて居たから、別段心を悩ま

さなかつた。此人は頓間と思はれて居たにも拘はらず、一生極端な破壊論者が集る所と云へば、何でも構はず這入り込むのを得意として居た。別段彼等の思想に同情して居る譯ではないが、そんな話を聴くのが非常に所好で有つた。更に甚だしいのは、一度など實際連累に會はうとさへした。彼の青年時代に起つたことだが、數束の機文や幾十冊の『警鐘』が彼の手を通じて配布された。彼は自分ちやそれを開くことさへ怖れて居たものよ、なほその配布を拒絶するのは絶対に輕蔑すべきことと考へて居たのだ——いや、露西亞にはこんな人間が現今でも澤山居るので有る。

其他の客は生活に敗れて苦くされた利己主義者でなければ、燃えるやうな青年の衝動に驅られた連中で有つた。又二三の教師連も有つた。其中の一人は四十五六歳の跛で、高等學校の教師で、非常に意地の悪い、虛榮心に富んだ男で有つた。又二三の士官連も居た。其中の一人は最近士官學校を出たばかりの若い砲兵士官で、始終黙つて居て、未だ何人とも友達に成らないが、今夜偶然にも手に鉛筆を持つてヴェルギンスキイの家へ遣つて来た。そして、些とも會話の仲間へは這入らないで、絶えず備忘録の中へ何やら書き留めて居た。誰も彼もそれに眼をかけた。が、誰も彼も知らない振をして居た。又例のリュムジンも扶けて、福音書賣りの女の包みの中へ猥褻な寫眞を入れて置いた懶惰者の神學生も来て居た。彼は毎も皮肉な微笑を泛べて、自分の才識に對して素張しい自信を有つて居るやうな、きよとくしなから自墮落な、がつしりした體格の青年で有つた。又如何いふ譯か知らないが、市長の息子も此處へ來合せて居た。前にも中尉の若い細君の話をする際に一寸述べたやうな、不愉快な、早くから身を持ち崩した青年で有つた。彼は一晚中黙つて居た。最後に狂熱的な、頭を減茶々にした十八歳の中學生が居た。彼は自己の威嚴を傷つけられた青年とでも云ふやうな、陰鬱な態度を持して坐つて居た。何うも自分の未だ子供扱ひされ

るのが口惜しくて堪らないらしい。此少年は既に大學豫備門の最上級の中に編成された反逆者の獨立集團の首領に成つて居た。後にそれが顯はれた時は衆皆を驚かしたものだ。

私は殆んどシャツを忘れようとした。彼は食卓の一番外れの隅に、後ろへ椅子を引いて、稍列の外へ出ながら腰掛けて居た。始終床を見詰めたまよ、靜々と黙り込んで、お茶も麵包も謝絶りながら、自分はお客に來たのではない、用事が有つて來たのだ、で、去らうと思へば、何時でも立つて出て行くのだと云ふ意志を見せようとするやうに、一瞬間と雖も手から帽子を離さずに居た。キールロフは彼から程遠からぬ所に坐つて居た。彼も矢張黙つては居たが、床を見詰めて居るやうなことはなかつた。それ處か、例の光のない眼で、一々話手の顔をちろちろと眺めながら、何事にも驚いたやうな顔もしなければ、微塵も感情を動かさないうで、凝乎と聽いて居た。二三の客は前に一度も彼を見ることがないので、折々偷むやうに彼を見つた。ヴィルギンスキイ夫人は五人組の存在を知つて居たか如何か解らない。想ふに、何も彼も所天から聞いて居たので有らう。女學生は勿論何にも知らなかつた。が、此女は又此女だけの心懸りを有つて居た。彼女は一兩日此處に停まつて、其後は一つの大學から他の大學へと何處迄も經廻つて歩きながら、「貧乏な學生の苦痛に同情を示して、彼等の反抗を促さう」と企て居た。彼女は又石版刷りの機文を何百枚となく携へて居た。想ふに、彼女自身の手になつたものらしい。例の中學生は生れて初めて彼女を見たのだが、それにも拘はらず、最初顔を合せた瞬間から、殆んど人殺しでも仕兼ねないやうな勢ひで憎惡の念を抱いたものだ。又、女の方でも、彼に對して同様の念を抱いて居た。少佐は彼女の叔父で、十年目に今日初めて彼女に會つたのだ。スタフロロギンとヴェルホーゼンスキイとが這入つて來た時、彼女の方は紅苺菓子 のやうに紅くなつて居た。恰度今婦人問題に關して叔父と爭論をして居たのだ。

二

ヴェルホーゼンスキイは殆ど一人にも挨拶をしないで、眼を敏てさせるやうな無頓着な態度で、だらしなく食卓の上の外れの椅子に腰を卸した。彼の顔附は如何にも氣難かしさうで、殆ど傲慢にさへ見えた。スタフロロギンは鄭重にお叩頭をした。が、客は皆此二人を待つて居たのにも拘はらず、誰も彼も命令を下されでもしたやうに、殆ど彼等を眼中に置かないらしく見えた。此家の女主人は、彼が座に着くや否や、きつとスタフロロギンの方を見遣つた。

「スタフロロギン、貴方はお茶を飲みますか。」

「何卒」と、彼は答へた。

「スタフロロギンにお茶を」と、彼女は湯沸器の傍の姉に命じた。「貴方も？」と、今度はヴェルホーゼンスキイに訊いた。

「勿論。お客に對して何といふ訳ね様です！それから乳脂も下さい。貴方は何時もお茶の代りにこんなひどい物を出すんですね——而も此家ちや誕生日の祝ひだと云ふのに！」

「なに、貴方も誕生日の祝ひなどを認めるのですか」と、女學生は不意に笑ひ出した。「私達は今それに就いて議論をして居たのですよ。」

「そんな話は陳腐だ」と、食卓の他の端から中學生が呟いた。

「何が陳腐です、因襲を無視するといふことは、それが何んな無邪氣なものにしても、決して陳腐ではない。反

對に、今日尙それが新しいから各人の汚辱だと言ふのですよ」と、女學生は椅子から前へ乗出しながら、即座に返答した。「加之、無邪氣な因襲なぞといふものは世の中に有りませんよ」と、彼女は力を罩めて附足した。

「僕は只斯う言ふ積りでしたよ」と、中學生は恐ろしく昂奮しながら叫んだ。「因襲は勿論陳腐で、根絶しなげりや成らぬ。而も誕生日のことなどは誰も彼もそれが馬鹿けて居て、そんな事のために、此の貴重な時間を費すのは極めて陳腐だといふことを知つて居る。既に世界中到る處議論し盡されたのですからね。従つて何か最つと有益な事に頭を費す方が好からうと言ふのですよ……」

「何を言つて居るのです？ 貴方の仰有ることは何人にも解りやしませんよ」と、女學生は叫喚した。

「僕は何んな人間でも、他の何んな人間でも同じやうに、自説を發表する権利を有つて居ると思ふ。で、若し僕が他人と同じやうに自分の説を發表しようと思つたら……」

「何人も貴方の説を述べる権利を攻撃しちや居ませんよ」と、此家の夫人は鋭く切込んだ。「只貴方の仰有ることは何人にも解らないから、そんなに廻り冗く言ふものでないとお願ひして居るんですよ。」

「だが、貴方は僕に敬意を缺いて被坐しやるのだ。若し僕が自分の考へを十分に發表することが出来ないとするれば、それは思想の缺乏から來るのではなく、寧ろ思想の過剰に基くのですよ」と、中學生はすつかり言葉の理路を失ひながら、殆んど自暴氣味で呟いた。

「貴方も物の言方を知らなげりや、寧ろ黙つて被坐した方が可いでせう」と、女學生は又口を出した。中學生は椅子から飛び上つた。

「僕は只」と、彼はよく、眞赧に成りながら、顔も得上げないで叫んだ。「貴方は只スタフローギン氏が這入つて

來られたから、自分の知力を見せびらかさうと思つたのだ。僕は只それが言ひたかつたのですよ——ええ、それだけですよ。」

「そんな考へは卑劣で、不道德で、只貴方の修養の無價値を示すに止まるのですよ。お願ひですから、最う何にも言つて下さるな」と、女學生は火の様に成つて言ひ返した。

「スタフローギン」と、此家の夫人が言出した。「此人達は貴方が被入しやる前に家庭の權利問題を論じて居たのですよ——其一人は此處に居ますがね」と、彼女は自分の親戚に當る少佐を願で指した。勿論私はそんなすつと以前に論じ盡されたやうな、陳腐な、無意味な問題で、貴方を苦しめようとするのでは有りませんがね。ですが、家庭の權利だとか義務だとかいふものは何處から遣つて來たのでせうね？ 畢竟現在成立して居るやうな、迷信的な意味に於てですよ。それが問題ですね。貴方のお考へは如何ですか。」

「遣つて來る」と言ふと如何いふ意味ですか」と、スタフローギンは訊き直した。

「例へば、神といふ迷信は雷霆と電光とから來たものでせう」と、女學生は殆ど頭から飛出しさうな眼附でスタフローギンを見詰めながら、再び評論の中へ突込んで來た。「原始的人類が雷霆と電光とに脅かされて、自分達の無力を感じる處から、眼に見えぬ敵を神に崇めたといふ事實は、何人でも知つて居ることぢや有りませんか。ですが、家庭の迷信は何處から出て來たものでせうね？ 家庭其者が如何して成立したものでせうね？」

「そりやア全然同じものとは云はれませんが……」と、ヴィルギンスキイ夫人は彼女を阻止しようとした。

「何うも其問題にお答へするのは社交上憚らなければ成らぬことのやうに思はれますね」と、スタフローギンは答へた。

「如何してです？」と、女學生は不意に前へ乗出しながら言つた。が、其時教師連の中にくすくす笑ふ聲が聞えた。それに應じて、一方の端でリヤムジンと中學生とが直に笑ひ出した。少佐の皺噎れたやうな含み笑ひがそれに續いた。

「義妹はこれで一幕物を書きますのよ」と、ヴィルギンスキイ夫人がスタッフローギンに向つて言つた。

「別段それが貴方に敬意を拂つた譯ぢや有りませんよ。私は未だ貴方のお名前も知らないのですからね」と、女學生は可厭々ながらスタッフローギンに向つて附け足した。

「餘り失禮なことを言ふもんじゃないよ」と、少佐は嗚鳴つた。「お前さんも若い婦人だから、最う少し穏やかに振舞つたら可いちやないか。お前さんは針の上にも坐つて居るやうに始終飛んで廻つてるよ。」

「貴方も黙つて居られませんか。少くとも、私に對してそんな親しげな物の言振りをして下さいますな。それに、そんな下等な比喩は平にお断り申しますよ。私は是迄一度も貴方のお眼に懸つたことはない、従つて又親類だなどといふことも認めて居ませんよ。」

「だが、私はお前さんの叔父だよ。赤坊の時分、好くお前さんを抱いて遣つたものだ！」

「貴方が何んな赤坊を抱いて廻つたとて、私の知つたことぢやない。私は抱いて呉れなぞと貴方にお願ひしたことは有りませんからね。成程、そんな事をするのが貴方には娛しみてたらうよ。それからお願ひして置きますからね、お前さんだなど失禮なことを言つて下さいますな、他人同志で言ふやうに願ひしますよ。私は一切そんな物の言方をお断りしますよ。」

「あれだ、あの連中は皆あの通りだ？」と、少佐は拳骨で一つ食卓を打しながら、正面に坐つて居るスタッフロー

ギンに話掛けるやうにして叫んだ。「だが、私は自由主義や近代思想が所好ですよ、又知識ある會話を聴いて居ることも所好ですよ。尤も男性の會話でなくちや成りませんがね。だが、斯う云ふ女どもの風車のやうな會話を聴いて居るのは——いや、眞個頭痛の種子ですよ。そんなに足掻き廻るな？」と、彼は椅子から飛び上らうとして居る女學生に向つて嗚鳴つた。「いや、今度は俺の饒舌べる番だよ、俺は侮辱されたのだからね。」

「貴方は自分ぢや何にも言へやしない、只他人の話の邪魔をするばかりですよ」と、此家の女主人は佛として呟いた。

「いや、私は言ふだけのことを言ひますよ」と、少佐は眞服に成つて、スタッフローギンに話掛けながら言つた。

「スタッフローギンさん、私は未だ一向貴方とお懇意に成らない者ですが、只今新に此場へ被入した方だから、私は一つ貴方に聞いて頂きたい。男がなけりや、女などといふものは蠅のやうに死滅つて仕舞ひますよ——私は左様思ひますね。有らゆる婦人問題は獨創の缺乏以外にはない。私は斷言しますがね、有らゆる此婦人問題なるものは、男子が馬鹿だから婦人のために發明して遣つたものです。それで男子自ら苦しんで居るので。私は自分が結婚しなかつたことを神明に謝して居ますよ。婦人の間には毫厘と雖も差別がない。彼等は單純な典型すらも造り得ないのでですよ。それも彼等に代つて男の手で造つて貰はなけりや成らないのです！で、私は此女を兩手に抱いて遣つたり、十歳位の時には一緒に舞踏曲を踊つて遣つたりしたものがね。今日此女が歸つて來た。勿論、私はいきなり飛び着いて抱擁しようとした。處が、此女は二言目に世に神などといふものは無いと私に言ふのですよ。此女も餘まり速て居るぢや有りませんか、最少し待つたら可いでせう？私は敢て言ひますが、知識有る人間は神を信じない。が、それは知識有るがためですよ。だが、お前は神が如何いふものだから知つて居るかい」と、私は此女に言

つて遣りました。「何處かの學生がお前さんに左様教へたのだらう。で、若し其男がお前に偶像の前へ燈明を上げるやうに教へたら、お前は又屹度燈明を上げたらうよ」と。

「貴方の言ふことは悉皆嘘だ。貴方も恨みッほい男子ですね。只今貴方の地位の守り難いことを教へて上げたぢや有りませんか」と、女學生はこんな人間に此上説明するのは恥辱だとも云ふやうに、さも輕蔑したらしく答へた。「私は今貴方に言ひましたね、吾々は皆「汝の父母を尊敬せよ、さすれば富を獲て長生も出来るだらう」と云ふやうな教訓の下に育てられたと。これは十誠の中に有りますよ。で、若し神が愛に對して報酬を拂はなくちや成らぬと云ふやうなことを教へたとすれば、そんな神は不道德な神ですよ。私が貴方に證明したのはそれでした。決して二言目に言出した譯ではない、只貴方が血縁としての權利を主張されるからなんです。貴方が鈍間で、今でも私の言ふことがお解りに成らないからつて、私の知つたことぢやない。貴方は左様言はれて腹を立てて恨んで被坐しやるのだ——貴方方時代の人は皆それですよ、それで説明が着きますよ。」

「お前さんは馬鹿だよ」と、少佐が言つた。

「貴方は鈍間だよ。」

「何とでも言ふが可いよ。」

「ですが、カビトーン・マクシーミーチさん、貴方は御自分でも神を信じないと言つて被坐しやいましたね」と、リープティンは食卓の他の端から呶鳴つた。

「私が左様言つたとして、それが如何です——別に變りはないぢや有りませんか、左様さ、私も全然信じて居る譯ではない。が、縱令、全然信じて居ないにしても、神は打殺すべきものだなどは言ひませんよ。私も騎兵隊を

去る前から始終神のことを考へて居たものだ。いろんな歌の文句なぞから、貴方も騎兵などは酒を飲んで大騒ぎをする外にも能のないものだと思つて被坐しやるでせうがね。左様さ、私も酒は飲みました。が、私だつて夜半に寢臺から跳ね起きて、寢巻一枚で影像の前に跪いたまよ、胸に十字を切りながら、信仰を與へて下さるやうに神に祈つたことも度々有りましたよ。其時分ですら、私は神の有無に關して平氣では居られなかつたのですね、眞個、それがために煩悶したものです。勿論、朝に成れば、人は又氣が變つて、信仰も消えて仕舞ひさうに見えるものですがね。實際、人は晝間に於ては信仰の薄らぐものだといふことを自分で経験しましたよ。」

「貴方は骨牌を持つて居ませんか」と、ヴェルホーゼンスキイは大きな欠伸をしながら、ヴィルギンスキイ夫人に向つて訊いた。

「私は貴方の其のお言葉に同情しますよ。え、眞個同情しますよ」と、女學生は少佐の言葉に對する憤怒の念から眞賑に成つて呷いた。

「私どもは馬鹿な話を聴かされて、此の貴重な時間を浪費して居るのですね」と、此家の女主人も突然口を出した。そして、窘めるやうに所天の方を見遣つた。

女學生は身を引緊めて立上つた。

「私は此機會に於て、學生どもの苦痛と彼等の抗議とに關して、一言述べさせて頂きたいと思ひます。ですが、不道德な會話のために時間が浪費されましたから……」

「道德だの不道德だのと、そんな物は何處にもない」と、中學生は女學生が物を言出すや否や、自分を抑制することが出来ないで、叫喚き出した。

「中學生の君、私は貴方に教へられなくとも、そんな事は前から知つて居ますよ。」

「如何したつて君は子供だ」と、彼は直に言い返した。「君は彼得斯堡から感々僕達の眼を開かうと思つて遣つて来たのだからね、お生憎様だが、僕達は「汝の父母を尊重せよ」といふ十誡位は元から知つて居るんだよ。君はそれも間違はないやうに引用することが出来なかつたぢやないか。それが不道德だといふこと位、露西亞中の者は何人でもベリンスキイから學んで知つて居るよ。」

「最う斯んな話は止めさせたら可いちや有りませんか」と、ヴィルギンスキイ夫人は斷乎として所天に言つた。此家の女主人として、彼女は會話のだらしないさに顔を赧らめた。特に初めて招かれた客の中に薄笑ひと驚愕の色さへ有るのを見ては、坐しても立つても居られないやうな氣がした。

「諸君」と、ヴィルギンスキイは不意に聲を高めながら言出した。「何誰でも最つと吾々の問題に關係の有ることを述べようと思つて被坐しやる方が有つたら、御遠慮なく左様して頂くやうに願ひます。」

「私は一つ質問をしても宜いでせうか」と、跛の教師が物知らずか言出した。彼は一人整然と坐つて、其時迄物を言はずに居た。「私どもは一體會議を開いて居るのか、それとも、普通の人間と同じやうに誕生日の祝ひに聚つて居るのか、それが伺ひたいのですよ。私は只會場整理のためにこんな事をお訊ねするので、何時迄もそれを知らずに居たくないと思ふのですがね。」

此質問は少なからざる感動を與へた。人々は何人が返辭をするだらうと互に顔を見合せて居たが、不意に申合せでもしたやうにヴェルホーゼンスキイとスタフローギンの方へ眼を向けた。

「私は會議を開いたものか、開かないものか、一つ投票に問ふて見たら可からうと思ひますがね」と、ヴィルギ

ンスキイ夫人が言つた。

「私は全然それに賛成します」と、リープティンが同意した。問題が稍漠然として居るとは思ひますがね。」

「私も賛成する。」「それから私もする」と、口々に叫んだ。

「私も左様したら一層圓滑に進行するだらうと思ひますよ」と、最後にヴィルギンスキイが宣言した。

「では、投票に懸りませう」と、彼の細君が言つた。「リヤムジンさん、何卒洋琴に着いて下さい。投票が始まつたら、貴方は其處から投票しても可いのですよ。」

「又ですか?」と、リヤムジンは叫んだ。「僕は貴方方のために最う随分骨を折りましたよ。」

「特に私がお願ひするのですから、何卒弾いて下さい。貴方も主義のためなら骨惜しみをする譯はないぢや有りませんか。」

「ですがね、アリーナ・プロホローヴァさん、何人も偷聴きなどして居る者は有りやしませんぞ。そりや只貴方の想像ですよ。それに窓が高いから、縦令聴いて居たにしても、何を言つてるか解りやしませんよ。」

「吾々は自分でも何を言つてるか解らない」と、何人かと呟いた。

「ですが、物は用心に如くはなしですよ。特に探偵などの恐れが有る場合にです」と、彼女はヴェルホーゼンスキイに向つて言つた。「街から聞くと、音楽でも弾いて、如何にも娛し相に遊んで居るやうに見せて置いた方が可いちや有りませんか。」

「如何でもしろッ!」と、リヤムジンは舌打ちをしながら洋琴の前に坐つて、殆ど拳骨で鍵盤を打すやうにしながら、滅茶苦茶に舞踏曲を掻き鳴らし始めた。

「私は會議を開かうとお思ひに成る方は右の手を舉げて頂くが可からうと思ひますね」と、ヴィルギンスキイ夫
人が建議した。

或者は右の手を舉げ、或者は舉げなかつた。或者は右の手を舉げてから再び下に卸した。それから又舉げたりし
た。

「ふう！僕には何が何だか薩張り解らないね」と、一人の士官が呟鳴つた。

「僕にも解らない」と、最う一人が叫んだ。

「いや、僕にや解る」と、三番目の男が叫んだ。「賛成」なら賛成と、右の手を舉げたら可いぢやないか。」

「併し賛成とは如何云ふことだ？」

「會議を開くことぢやないか。」

「いや、會議を開かぬことだらう。」

「僕は會議を開く方に投票したのですよ」と、中學生はヴィルギンスキイ夫人に向つて叫んだ。

「ぢや、何故貴方は右の手を舉げなかつたのですか。」

「僕は貴方を見て居たのです。貴方が舉げなかつたから、僕も舉げなかつたのだ。」

「そんな馬鹿な！私は自分が言出したんだから手を舉げなかつたのですよ。皆さん、今度は反對にしませうよ。
會議を開きたい方は、何にも爲すに其儘坐つて居て下さい。開きたくない方は右の手を舉げて下さい。」

「會議を開きたくないものですか」と、中學生が質問した。

「貴方は故とそんな事を訊くんですね？」と、ヴィルギンスキイ夫人が眞顔に成つて叫んだ。

「いや。一體、會議を開きたい者がですか、それとも開きたくない者がですか。其點ははつきり伺ひたいもので
すね」と、二三の聲が叫んだ。

「會議を開きたくない者がですよ、開きたくない者がですよ。」

「左様、ですが會議を開きたくないものは手を舉げるのか、舉げないのか、一體如何したら可いんですか」と、
一人の士官が叫んだ。

「ええ、吾々は未だ立憲的格式に慣れて居ないのですね」と、少佐が傍から言つた。

「リヤムジン君、失禮ですが、君が餘り搔鳴らすものだから、何人も言ふことが聞えやしませんよ」と、跛の教
師が言出した。

「ですが、アリ！ナ・プロホロフナさん、何人も戸口で偷聽きして居るものなどは有りませんよ」と、リヤム
ジンは飛上りながら叫んだ。「僕は最う弾きますまい！僕はお客に來たので、太鼓打ちに來た譯ぢや有りませんから
ね。」

「諸君」と、ヴィルギンスキイは續けた。「私どもは會議を開いたものか、開かないものか、何卒口で仰有つて下
さい。」

「開くのだ！開くのだ！」と、口々に叫んだ。

「左様いふ譯なら、投票する迄もない、これで十分ですね。諸君、如何ですか。未だ投票に問ふて見る必要が有
りますか。」

「必要はない、そんな必要はない。最う解つてる！」

「併し何誰か會議を開きたくないと思つて被坐しやる方は有りませんか。」

「いや、僕等は皆會議を望んで居るのだ。」

「併し「會議」とは一體何の事ですか」と、一人の聲が叫んだ。

何人も答へる者はなかつた。

「先づ議長を擇んだら可いでせう」と、彼方此方の仲間から口々に叫んだ。

「此家の主人が可い、勿論此家の主人が可い！」

「諸君、左様いふ譯なら」と、ヴィルギンスキイは擇まれたる議長として言出した。私は最う一度前の提言を繰返します。何誰か吾々の問題に最つと適切な事を言はうと思つて被坐しやる方が御座いますなら、何卒猶豫なくそれを述べて下さい。」

誰も彼も黙つて仕舞つた。總ての人の眼は再びヴェルホーゼンスキイとスタフローギンとの上に向けられた。

「ヴェルホーゼンスキイさん、貴方は何か仰有ることが有りませんか」と、ヴィルギンスキイ夫人は直接に彼に訊いた。

「何にも有りませんよ」と、彼は椅子の中に伸びをしながら答へた。「だが、私はブランデーを一杯貰ひたいものですね。」

「スタフローギンさん、貴方は如何ですか。」

「有難う、私は飲みません。」

「酒を召上るかと思つたのぢやない、演説を爲さいますかと伺つたのですよ。」

「演説をする、何で？ いや、私は演説などしたく有りませんよ。」

「今にブランデーを持つて来て上げますよ」と、彼女はヴェルホーゼンスキイに答へた。

女學生は立上つた。彼女は先刻から何度も立上らうとして居たのだ。

「私は貧乏な學生の苦痛と、彼等を促して抗議を提出させる手段とに就いて、一言述べさせて頂きたいと思ひます。」

が、彼女は言葉を送切らした。食卓の他の端に競争者が立上つて、皆の眼が其方へ向けられた。例の長い耳を有つたジガーロフが幽鬱な、氣難かしけな態度で、徐かに座から立上つて、眼にも見えぬやうな小さな文字で一杯書き散らした備忘録を裏悲しげに食卓の上に置いた。彼は少時黙つて立つて居た。大抵の人は憫れて其備忘録を見遣つた。が、リープティンや、ヴィルギンスキイや、例の跛の教師などは大分心地よけに見えた。

「私はお集りの方々に對して發言を許されたい」と、ジガーロフは氣難かしげに、乍併凜乎として言出した。

「發言を許します」と、ヴィルギンスキイは許可を與へた。

辯士は下に坐つて、半分間程黙つて居た。そして、莊重な聲で述べ出した。

「諸君！」

「ブランデーを持つて来ましたよ」と、お茶を注いで廻つて居て、それからブランデーを取りに行つた姉は、さも輕蔑したやうにヴェルホーゼンスキイの前へ、盆も皿もなく、指で摘んで來た洋盃と一緒に瓶を突出しながら、突然大きな聲で言出した。

邪魔をされた辯士は威嚴を崩さないで、靜乎と黙つて居た。

「氣に懸けたまふな、續いて遣りたまへ、何うせ僕は聴いて居ないのだからね」と、ヴェルホーゼンスキイは手づから一杯注ぎながら叫んだ。

「諸君、私は貴方方の傾聴をお願いすると同時に、後にも判りますやうに、極めて重要な問題に就いて貴方方の御助力をお願いしようと思ひますので」と、ジガロフは再び始めた。「先づ順序として緒言から申上げねば成りませぬが。」

「アリーナ・プロホロヴァ、貴方鉄を持つて居ませんか」と、ビョートル・ステバーノギーチが不意に訊いた。「鉄を何に爲さるのですか」と、彼女は眼を見張つたまゝ訊いた。

「私は爪を切るのを忘れて居たのですよ。最う三日も前から左様思つて居たのですがね」と、彼は平氣な顔をして、長い、汚れた爪を見詰めながら言つた。

アリーナ・プロホロヴァは眞根に成つた。が、ヴァイルギンスキイ嬢は満足らしく見えた。

「今窓の上で見たやうに思ひますがね」と、彼女は食卓から立上つて鉄を取りに行つた。間もなくそれを持つて歸つて來た。ビョートル・ステバーノギーチは彼女を見返りもせず、鉄を受取つたまゝ、直に爪を除りにかまつた。成程、斯ういふのが新しい自由思想家の態度だなど、アリーナ・プロホロヴァも合點した。そして、自分の過敏を恥ぢた。人々は黙つて互に顔を見合はせた。跛の教師は復讐的に、嫉ましげにヴェルホーゼンスキイを見遣つた。ジガロフは續けて言つた。

「私は將來現在の狀態に取つて代るべき社會組織の研究に没頭して、遂に古代から千八百七十一年度の今日に至る迄、有らゆる社會組織の創始者は皆夢想家であつた、仙譚の作者であつた、自然科学に就いても、人間と稱はれる奇態な動物に就いても、何一つ了解する所のない、自家撞着の馬鹿者どもであつたと云ふ結論に到着しました。プラトリーにもせよ、ルツソオにもせよ、フウリエーにもせよ、彼等は皆屋根の上の燕には適しても、人類社會を教へるには足りない。併し吾々は今や徒らに思索に耽けることを止めて、實行に取懸らうとして居る際だから、此時に當つて社會組織の新しい形式を提出するのは極めて重要なことで有る。其處では以上の不安定を避けるために、私は社會組織に關する私自身の體系を提出したい。此處にそれが有ります」と、彼は備忘録を敲いた。「私は最初皆さんに最つと出来るだけ省略して、私の意見を聴いて頂きたいと思つて居ました。併し左様すると又非常に澤山の説明を必要とするだらうと思ひますので、寧ろ一章に一晚費すこととして、十晩の間皆さんに私の講話を聴いて頂かうと決心しました。」——此處で笑ひ聲が聞えた——「それに、私はなほ私の體系が未完であることを自白しなければ成らぬ。」——再び笑聲起る——「私は私自身の材料のために稍混亂を來して居る。そして、私の結論は私が出發した最初の考への正反對で有る。併し私は私の結論以外に、決して社會問題の解決は有り得ないことを斷言して置きたい。」

笑ひ聲はだん／＼聲高に成つた。が、それは主として弱輩な、此問題に關係の浅い客の中から出た。ヴァイルギンスキイ夫人や、リープティンや、跛の教師の顔には、一種困惑の色が見えた。

「貴方自身御自分の體系を完成することが出来なかつたとして、そして、絶望に終られたものとすれば、私どもはそれを如何することが出来ませう？」と、一人の士官が用心深く言つた。

「眞個其通りです、士官の君」と、ジガロフは急に其方へ向直つた。「特に絶望といふ言葉を用ひられたのは當つて居ますよ。實際、私は絶望に陥つた。それにも拘はらず、私の此書の中に提示された體系に代るべきものは一

つもない、是以外に解決の道はない。何人もこんな解決を發見することは出来ませんよ。それだから、私は猶豫する處なく全會員を招待して、十日の間私の講話に耳を傾けて頂きたい、それからそれに對する皆さんの意見も伺ひたいと言ふのですよ。若し會員諸君にして、私の講話に耳を傾けることを欲しなければ、最初から罷めて仕舞ふが可い——男は政府の下に使はれ、女は厨に行くが可い。何となれば若し諸君にして私の解決を容れなければ、他に解決は無いからですよ、斷じて無いからですよ。若し諸君にして此の好機會を逸すれば、それは單に諸君の損失で有る。何となれば、諸君は再びそれに還り來る外はないから有る。」

一座は稍動搖めいて來た。「彼奴は狂人か。ぢや、何だ？」と口々に訊ねた。

「それぢや、有らゆる問題はジガロフ君の絶望の中に在るのだ」と、リャムジンは註釋を加へた。「で、今日の問題は彼が絶望しなけりや成らぬか、何うかに在るんだね。」

「ジガロフが絶望の縁に立つて居るなぞと云ふことは個人的問題に過ぎない」と、中學生が叫喚いた。

「僕は一つ提議するが、ジガロフの絶望が何れだけ一般的問題に影響するかを投票に問ふて見たら如何です？同時に彼の説に耳を傾ける値打が有りや否やも投票して見たら」と、一人の士官が愉快相に言出した。

「そりやア不可ない」と、跛の教師も遂に口を出した。此男は何時人も人を嘲弄するやうな微笑を帯びながら物を言つた。従つて眞面目で言つて居るのか、戯談に言つて居るのか、何うも判断が着けにくかつた。「諸君、そりや不可ませんよ。ジガロフ君は餘りに自己の研究に熱中して居る、同時に又餘りに謙遜で有る。私は氏の備忘録を知つて居る。氏は問題の最後の解決として、人類を二つの不等部分に分割することを暗示する。十分の一は絶對の自由と、他の十分の九に對する無限の權力とを享受するのだ。他の十分の九は有らゆる個性を捨て、所謂獸の群に

歸するのだ。畢竟無限の服従に依つて、何度も再生を繰返す間には、かのエデンの樂園に似た原始時代の無智の境涯に達することが出来ようと云ふのですね。尤も彼等は勞働をしなけりや成らない、此著者に依つて提言された、人類の十分の九から自由を奪つて、幾代の教育の力で彼等を獸の群に改造するといふ手段は、自然界の事實の上に基礎を置くものとして、眞個素張らしいもので有る、同時に極めて論理的でも有る。或は其中の演繹の或者には賛成出来ないかも知れない。が、著者の知識と用意の程を疑ふことは出来なからう。今要求せられた時日——十晩の時日を都合することが出来ないのは只残念だと云ふ外ない。さもなれば、吾々は興味有る大議論を聞くことが出来たらうに。」

「貴方は眞面目なですか」と、ヴィルギンスキイ夫人は聲に不安の影を宿しながら跛の紳士に話掛けた。「此人は人類を如何して可いか知らない處から、其の十分の九を奴隸にしようと思ふのぢやないでせうか。私はずつと以前から此人の心持を疑つて居たのですよ。」

「貴方は貴方の兄弟のことを言つて被坐しやるのですか」と、跛の紳士が訊いた。

「私の兄弟だから如何なんです？ 貴方は私を笑つて被坐しやるのね？」

「加之、貴族のために働いて、神かなんぞのやうに彼等に服従するのは輕蔑すべきことですよ」と、女學生は猛然として反對した。

「私が提言したことは決して輕蔑すべきものではない。それは樂園ですよ、地上の樂園ですよ。それを外にしては、地上に樂園はない」と、ジガロフは權威を有するものゝ如く説示した。

「僕としては何だね」と、リャムジンが言出した。「若し僕が人類の十分の九を如何して可いか知らなかつたとす

れば、僕は彼等を樂園なぞへは入れて遣らないで、山の上へ連れて行つて風に吹き飛ばして仕舞ふね。僕は教育の
有る人間を一掴みだけ残して置いて、科學的原理の上に向後永久に幸福に暮らせて遣るよ。」

「道化者でもなけりや、何人もそんな事は言ひませぬよ」と、女學生は顔を火の様にしながら叫んだ。

「あの人は道化者ですよ。だが、役に立つことも有る」と、ヴィルギンスキイ夫人は彼女に囁いた。

「成程、そりや一番可い問題の解決でせうよ」と、ジガロフはリヤムジンに向つて熱心に言出した。「勿論君は
自分か何んな深遠なことを言ひ當てたかを知るまい。我が愉快なる友よ。が、君の考へを實行するのは殆ど不可能
で有るからして、吾々は謂ふ所の地上の樂園に満足しなければ成らないのだ。」

「だが、そんな事は悉皆無意味だよ」と、われ知らずヴェルホルズンスキイの口から漏れた。が、彼は眼さへ上
けないで、何の頓着する處もなく、其儘爪を鈍み續けた。

「何が無意味です？」と、跛の紳士は何とか彼が言出したら、それを引捕へて遣らうと待伏せでもして居たやう
に、即座に喰つて掛つた。「何が無意味です？ジガロフ君は人類に對する彼の愛に於て、稍狂的な處は有る。が、
フクリエーにもせよ。更に甚だしいのはカペーにもせよ、又ブルードン彼自身すらも、最も專制的な、狂的な解決
の手段を提出したものだ。恐らくジガロフ君は其の暗示に於て、あの人々よりも遙かに眞面目なものが有ります
よ。私は敢て斷言するが、一度彼の草稿を読んだら、其中の或物に賛成せずには居られませんね。彼は恐らく何人
よりも實際から離れて居ない、又彼の地上の樂園は實物ですよ、人類が常にそれを失つたことを嘆息して來たそれ
ですよ——若し左様いふものが嘗て存在したとすればですね。」

「僕も何かで遣附けられるだらうとは思つて居たよ」と、ヴェルホルズンスキイは再び呟いた。

「御免なさい」と、跛の紳士はいよく昂奮しながら言つた。「將來の社會組織に關する對話や議論は、現今有ら
ゆる思索家を取つて殆ど必要缺くべからざるものと言つても可い位だ。ヘルチエンの一生はそれを措いて他に何に
もないではないか。ペリンスキイも、或確實な筋から聞く據れば、毎晩友達に會して、將來の社會組織に關す
る最も微細な點、更に言へば、家庭的な點迄も確め議論して決定しながら夜を更かしたと云ふことですよ。」

「或はそれが爲に狂人にも成る位だ」と、不意に少佐が傍から言つた。

「兎に角黙つて坐つて指揮官のやうな振をして居るよりは、饒舌つて居た方が、何物かに到達する望みが有るだ
らうね」と、リープティンは到頭攻撃の火蓋を切つたやうに叱咤した。

「僕が無意味だと言つたのは、何もジガロフのことを言つた譯ぢやないよ」と、ヴェルホルズンスキイは口の
中で呟いた。「ねえ、諸君——彼は稍眼を上げた。——僕の考へぢや、凡てフクリエーだの、カペーだのいふ書物
や、勞働の權利に關する凡ての説話や、ジガロフの理論や——そんな様なものは悉く小説だよ、小説だから百
でも千でも書きたいだけ書ける——畢竟美的享樂だね。成程君等は此の小さな町で退屈に成つたでせうよ、それだ
からインキと紙とに走るのさ。」

「御免なさい」と、跛の紳士は椅子の中で身を藻掻いて焦燥りながら言つた。「成程、私どもは田舎者だ。従つて
貴方方から見れば憫れにも見えませうが、同時に私どもは又自分がそれに參加しなかつたのを悔まねば成らぬやう
な新しい事實は、未だ此世に一つも起らなかつたといふことも知つて居ますよ。外國で印刷して、視密に配布され
るいろんな小冊子には、私どもは一般的破壊を齎すことを唯一の目的として、互に聯合して團結を形造らねば成ら
ぬといふやうなことが暗示して有る。又卿等は何れだけ此世を繕つて見た處で決して健全な社會を現出し得るもの

ではない。が、一億の人の首を斬つて一人の負擔を輕めさへすりや、最も安全に此溝渠を飛越すことが出来るといふやうなことも激勵して有る。成程立派な思想でさ。が、其の不可能なる點に於ては、只今貴方が非常に侮蔑して見せられたジガロフの理論と擇ぶ處がないぢや有りませんか。」

「うむ、だが私は議論をしに來た譯ぢやないからね」と、ヴェルホーゼンスキイは此の意味有りけな文句を漏らした。が、自分ぢや全然それに氣が附かないやうに、腰を伸ばして燭臺を自分の傍へ引寄せた。

「貴方が議論をしに來られなかつたのは残念ですよ、眞個残念ですよ。殊に貴方が今お化粧にばかり氣を取られて居られるのは残念で成りませぬね。」

「僕のお化粧が君に如何いふ關係が有りますか。」

「一億の人の首を斬るのは、傳道に依つて世界を改造するのと同じやうに困難で有る。恐らくは一層困難かも知れない、特に露西亞に於てはですね」と、リープティンは再び口を切つた。

「彼等が今一般に望みを囑して居るのは露西亞ですよ」と、一人の士官が言つた。

「私どもは彼等が露西亞に望みを囑して居るといふことも聞きませんでした」と、跛の紳士は再び口を出した。「私どもは左様いふ大仕事を舉げるに最も適當した土地として、不可思議な指が私どもの此の麗はしい國を指して居るといふことも知つて居る。が、其處ですよ。傳道に依る問題の漸次的解決に有つては、兎に角何物か得られる——少くとも、愉快な談話を交すことが出来る、又社會の進運に密與した個人的貢獻に對して政府から認められることも有らう。が、第二の方法では、一億の人の首をちよん斬るやうな簡捷な手段に在つては、個人として何んな報酬が得られるでせうか。若し貴方がそんな傳道に取懸られたら貴方の舌はちよん切つて仕舞はれますよ。」

「君のは屹度ちよん切られるね」と、ヴェルホーゼンスキイが言つた。

「ま、考へて御覽なさい。最も都合よく運んだとしても、一通りそんな虐殺を通り抜けるには、少くとも五十年若しくは三十年を要しますよ——何となれば彼等も羊の群ではない、従つて虐殺される儘に殺されては居ないでせうからね。寧ろ家財を束ねて、海の彼方の穩やかな島に移住した方が好くは有りますまいか、そして、其處で穩やかに眼を瞑つた方が敢て言ふ、——彼は指で食卓を敲きながら聲高に叫んだ——「貴方もそんな傳道ぢや只移住を促すだけです。が、其他には何にもない！」

彼は勝誇つて言葉を結んだ。此男も私どもの州では智者の一人で有つた。リープティンは慧しげに笑つて居た。

ヴェルホーゼンスキイは首を俛れて聽いて居た。他の連中、特に婦人連と士官どもとは非常な注意を拂つて此議論に耳を藉したものだ。彼等は皆一億の首をちよん斬る主義の派は隅っこへ追ひ遣られたものと認めた。そして、其結果如何成ることかと片唾を呑んで待つて居た。

「いや、君の説は却々立派なものだ」と、ヴェルホーゼンスキイは前よりも一層氣がないやうな、殆ど退屈に堪へられないやうな態度で、口の中に呟いた。「移住は好い考へだ。だが、君の豫想されるやうな有らゆる目前の不利益にも拘はらず、日にく牙を執つて此主義のために戦はうとする黨與が殖ゑて來るものとすれば、君がなくとも如何にか出來さうなものぢやないかね。え、君、これは古い宗教に取つて代らうとする新しい宗教だよ。それだから、あんなに澤山の戦士が生れたのだね。眞個大きな運動さ。成程君は移住した方が可からうよ。で、僕は君に助言するがね、「穩やかな島」などは罷めて、ドレスデンにしまへ。第一、あの町は嘗て傳染病に見舞はれたことがないさうだ。君は教育の有る人だから、勿論死を怖れて居られるだらう。次にあの町は露西亞の國境に近いよ。從

つて君は君の愛する祖国から一層容易に君の收入を受取る事が出来る譯だね。第三に、彼處には美術の寶と稱ばれるものがある。君は美的趣味の人として、以前は文學の先生だといふことでしたね。最後に、彼處には又一種瑞西の縮圖とでもいふやうな景色がある——君も詩を作るとすれば、詩的感興を促すために、それも必要だからね。實際彼處は胡桃の殻の中の寶玉だよ。」

一般に客は動搖した。特に士官連の間に動搖した。今一瞬間もすれば、彼等は一度に饒舌り出したかも知れない。が、跛の紳士は苛々しながら其餌に懸つて行つた。

「いや、私は決して吾々の共通な問題を抛たうと言つたのではない。が、斯ういふ事は忘れては成らない……」
「なに、君は僕が言出しさへすりや、五人組にも這入つて呉れやうと言ふのか」と、ヴェルホーエンスキイは、不意に嗚咽した。そして、鉢を下に置いた。

一同吃驚したやうに見えた。謎の男は餘りに急に正體を顯はして來た。彼は「五人組」のことさへ明けすけに言つたものだ。

「自ら正直な人間を以て處る者は、何人も共通の問題に於ける自分の役目を避けようとはすまい」と、跛の紳士はそれから通れやうと藻掻いた。「併し……」

「いや、これは「併し」を許すやうな問題ではない」と、ヴェルホーエンスキイは鋭く相手の言葉を遮ぎつた。「諸君、僕は明答を得なければ成りませんぞ。僕は此處へ來て、自分で諸君をお喚び申したに就いては、貴方方に對して説明をする責任の有ることは十分に心得て居る。」再び思ひ掛けない告白——「が、僕は此問題に對する貴方方の態度如何を知る迄は、決して何物をも説明することが出来ない。事件を簡捷にするために——私どもは過去の

三十年間が無駄な會話で過ぎたやうに、これからの三十年も過すことが出来ずからね——僕は貴方方が二者何れを擇ばれるかを聞きたい。社會主義的小説の假作と、一千年以來續いた人類の運命の學者的配列とから成立つ綴い道か——其間に專制主義は、極めて僅少の勞力を拂ひさへすれば自然に貴方方の口へ飛込んで來るやうな旨い物を悉皆呑み込んで仕舞ひますぞ——それとも、何から成立つて居るにもせよ、終に貴方方の手の縛めを解いて、人類をして、紙の上ではない行爲の上で、自由にそれ自身の社會組織を作らしめるやうな捷徑を擇ばれるか。彼等は「二億の首」などと叫んで居る。そんな物は只比喩に過ぎない。が、專制主義は紙の上の香氣な書間の夢と共に、數百年の間には一億どころでない、五億萬の首をも喰つて仕舞ふものとするれば、それ位の事何が怖ろしいのだ？ 又治療の出來ない病人は、彼のために紙の上で何んな處方を書いて與へたとて癒らないといふことも忘れては成らない。反對に、何時迄も延ばして置いたら、其病人はだんく腐敗して、其結果吾々にも感染すれば、今ならなほ用に立つ有らゆる新しい精力を減して、終には如何とも手の着けられないやうなことに成りますよ。僕と雖も、徒らに舌を敲して自由思想を談するの快適を否むものではない。が、實行は稍困難なもので有る……尤も、僕自身は決して談論に長けた者ではない。僕は只通知を持つて此處へ來たのだ。で、僕は滿場の諸君に對して投票などでなく、口づから簡單に、直截に、何方を擇ばれるかを表明して頂きたい、沼の中の蝸牛の道を擇むか、それともそれを横切るために馬力を一杯出して突進するか。」

「僕は斷じて馬力を一杯出す組だ！」と、中學生は昂奮して叫んだ。

「僕も左様だ」と、リムジンもそれに應じた。

「こんな選擇に何等の狐疑する處はない」と、一人の士官が呟いた。他の士官もそれに續いた。又或者がそれに

應じた。最も深く彼等を動かしたのはヴェルホーゼンスキイが「通知を持つて」来て、自ら辯明しようとする約束したことで有つた。

「諸君、殆ど總ての方が檄文の意味に於て決心せられたやうですね」と、彼は一座を見廻しながら言つた。

「悉皆だ、悉皆だ！」と、多数の聲が叫んだ。

「私は本来最つと人道的な解決に賛成する者で有ることを自白しなければ成らない」と、少佐は言つた。「併し總ての人が他の側に着く以上、私もそれに洩れることは出来ない。」

「ちや、君もそれに反対しては居られない様ですね」と、ヴェルホーゼンスキイは跛の紳士に向ひながら言つた。

「僕ははつきり左様といふ譯ではないが……」と、後者は眞摯に成つて言つた。「僕が今側の者に同意したとすれば、單に騷擾を起さないためだ。」

「君等は皆左様だよ。半年も君等の自由思想的雄辯を振つて議論を闘はせながら、終ひには側の者と同じやうに投票する！諸君、確かり考へて見たまへ、君等が皆用意して居るといふのは眞實なのか。」

何を用意して居る？此質問は稍漠として居た。が、極めて誘惑的のもので有つた。

「勿論、皆用意して居る！」と、口々に言つた。が、皆互に顔を見合せて居た。

「併し後に成つて、貴方は餘りに早く同意したのを悔ゆるやうなことはないか。君等は何時も左様だからね。」

一座はいろんな意味に於て昂奮した、非常に昂奮した。跛の紳士は再びヴェルホーゼンスキイに向つて突進した。

「併し斯ういふ質問に對する返辭は、何うしても條件附のものではないでせうか。私どもは、既に決心を表明したとしても、斯ういふ奇態な方法で發せられた質問といふものは……」

「如何いふ奇態な方法です？」

「斯ういふ質問はあんな風に訊ねられるものではないでせう。」

「では、如何したら可いか教へて下さい。併し僕は最初から君が第一番に腹を立てるだらうとは思つて居たよ。」

「貴方は即座に實行に取懸らうとする私どもの用意に關して、吾々から返辭を掠取された。併し貴方はそれに對して如何いふ權威の下にあんな質問を出されたのですか。」

「そんな事は最つと早く訊かれなければ成らぬ筈ですよ。何故貴方は返辭をしたのですか。一旦同意して置いてから、又後戻りをするのですね。」

「ですが、貴方の無責任な質問其物が貴方の何の權威も、何の權利も有つて居られないことを、只個人的好奇心から訊かれたばかりだといふことを私に暗示する。私はそれが言ひたいのですよ。」

「何を言ふのだ？君は何を言ふのだ？」と、ヴェルホーゼンスキイは非常に愕いて警戒するやうな容子を裝ひながら叫んだ。

「何うして、まア何んな事にもせよ、新しい會員を引入れるといふものは、兎に角、(膝組の上)でされるものだ、決して知らない人間が二十人も集つて居る斯んな席上でされ可き筈のものぢやありませんよ」と、跛の紳士は大きな聲を張上げた。餘りに昂奮して自ら抑制することが出来ない處から、心で思つて居る事をすつかり言つて仕舞つたのだ。ヴェルホーゼンスキイは如何にも驚駭に堪へないといふやうな顔附で、一座の方へ向直つた。

「諸君、僕はそんな事は皆愚だ、僕等の會話は餘りに横道へ反れたと宣言するを以て自分の義務と考へる。僕は未だ一人も會員に入れた覚えはない、従つて何人も僕が會員を引入れたなどといふ權利はないのだ。僕等は只いろ

んな意見を圖はせて居たのだ。左様ぢや有りませんか。が、縦しや左様で有るにしても、無いにしても、君は非常に僕を愕かせたものだ」と、彼は再び跛の紳士に向つた。「僕は膝組みの上でなけりや、此處で斯んな實際無邪氣な事柄に就いて語るのが不安心だなどは夢にも思はなかつたよ。君は密告者を怖れて居るのか。實際此處に、此仲間密告者が交つて居るのかね。」

一座の昂奮はいよく、凄しく成つた。皆各自に饒舌り出した。

「諸君、若し左様だとすれば」と、ヴェルホーエンスキイは續けて言つた。「僕は何人よりも一層自分自らを危くしたのだ。で、僕は貴方方に一つ質問に答へて頂きたい。勿論、答へたくなければ、お答へに成らずとも可いのですがね。それは貴方方の御自由ですよ。」

「何んな質問だ？何んな質問だ？」と、各自に叫喚した。

「えよ、此質問はその返辭次第で僕等がなほ一緒に居られるか、それとも最う談話は止めて、各自に帽子を取つて出て行くかを決定するに足るのですよ。」

「質問せられよ、早く質問せられよ。」

「若し諸君の中の一人が政事的啓蒙の計畫を知つたとして——有らゆる結果を豫想することが出来た場合に、其人は走つて密告に行くか、それとも自宅に残つて成行を見て居るか。意見は此點で違ふのですよ。此質問に對する返辭は、吾々が直に袂を分つものか、それとも一緒に遣つて行かれるかを明白に決定して呉れますよ、今夜ばかりと云ふのではない、すつと永くですね。何卒、君から先づ返辭をして下さい」と、彼は跛の紳士の方へ向いた。

「如何して僕から答へるのです？」

「君が最初言出されたからです。何卒曖昧な返辭をしないやうにして下さい。此處ぢや胡麻化しは許しませんからね。ですが、君の自由意志は妨げないから、其積りで。」

「併し左様いふ質問は全體人を侮辱したものですな。」

「いや、君はそれより明瞭な返答は出来ないのですか。」

「僕は決して秘密警察の探偵ぢや有りませんよ」と、後者はいよく焦燥りながら答へた。

「何卒そんなに僕等を待たせないで、判然言つて下さいな。」

跛の紳士は全然返辭することを止めた程、心から憤つて仕舞つた。彼はぶり／＼しながら黙つて眼鏡の下から相手を睨めて居た。

「然りか否か。密告するか、しないか」と、ヴェルホーエンスキイは叫んだ。

「勿論そんな真似はしないよ」と、跛の紳士は二倍も大きな聲で叫喚した。

「何人もしない、勿論しない」と口々に叫んだ。

「少佐殿、貴方は如何です？貴方は密告するかしませぬか」と、ヴェルホーエンスキイは續いて言つた。「僕は考へが有つて、故と貴方に訊くのですからね。」

「僕も密告などはしないさ。」

「ですが、貴方も或者が或者を殺して盗賊しようと思つたら、普通の殺人ですね、そしたら貴方も密告して警戒を與へるでせうな。」

「そりやア勿論さ。だが、それは私人の場合で、是は政事的陰謀だらうぢやないか。僕は決して秘密警察の探偵